
太陽の子

南 歳三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の子

【Nコード】

N3394E

【作者名】

南 歳三

【あらすじ】

ネット上で勇気を与えてくれた人を主人公が捜し求めて、まったく知らない麻雀プロの団体に所属し、生きていくストーリーの麻雀小説です。取材協力、最高位戦、京杜なおプロ

第1話 合格（前書き）

この物語はフィクションで実在する人物・団体とは無関係です。

第1話 合格

私にとっておじさまは太陽で私はその太陽の子供です。

その日はいつも通りの朝だった。一通の郵便物が届くまでは。

「小林さん、速達です。」

その郵便配達員の声を聞いて香奈は仕方なく玄関に向かった。人付き合いが苦手な香奈には郵便配達員の相手すら苦痛だが、他に誰も居ない以上玄関に行くしかなかった。

玄関に着き、恐る恐るドアを開ける。そこには郵便配達員が一人立っていた。

「小林さんですね、銀河プロ麻雀連合からの郵便物です。」

香奈は黙って郵便物を受け取り、郵便配達員はそのまま帰っていった。

玄関を閉め、香奈はその郵便物を開けた。

不合格通知にしては中身が多過ぎると、香奈は違和感を感じながら一枚の書類を読んだ。

女流合格

香奈はその意味を理解できなかったが合格はわかったのでうれしくて涙が出てきた。

やっとおじさまのそばに行くことが出来る

香奈はプロ試験に合格したことよりそのことの方が何倍も何十倍もうれしかった。

第2話 合格の意味

ただ合格通知を貰ったとはいえ香奈はまだプロではなかった。これから色々な研修を受けて始めてプロになれるのである。そして香奈は正式な合格ではなく女流合格だから本当のプロでは無かった。

その女流合格とは正式な合格と違い、団体が行う普通のリーグ戦には参加できず、女流リーグという女性だけのリーグ戦にしか参加できない合格である。だから香奈が普通のリーグ戦に参加するにはまた半年後のプロテストを受けて正式に合格しなければならない。

むしろ面接では緊張してうまくしゃべれず、その後の実技試験も散々だった香奈が合格になったこと自体不思議と香奈は考えるべきだった。

しかし香奈には合格という文字しか見えてなく、プロとは何かまったくわかってない香奈がそんなことを疑問に思うはずが無かった。

そんな香奈だが合格の通知を貰った後も一人で麻雀の練習を続けていた。友達はいないし家族は麻雀を理解してくれないから香奈は一人で牌を積んで練習するしかなかった。

実戦はプロテストの時から初めてだという香奈だが、テストの時に実戦を体験出来たおかげでより実戦に近い形で練習することが出来た。香奈は頑張ってる自分の雄姿をおじさまに観せられる、そう思い一心不乱に練習に励んだ。

こうしてこれから始まる研修が香奈にとって苦痛になることも露知らず、香奈は研修の日におじさまに逢えると勝手に思い込んで研修

の日は早く来ないかと待ち望んでいた。

第3話 研修初日

研修初日の朝、香奈はおじさまに逢えると信じて研修会場に向かっていた。研修に必要なものは全部確認して揃え、場所は実技試験をした場所だから行くにあたって何の不安も無かった。

歩きながら香奈はおじさまに逢えたら何をしゃべろうか、おじさまに一生懸命練習した結果を見せようと楽しく思いに更けていた。そんな感じで昨日から寝不足になるほど浮かれていた。

ただおじさまという人物はネットで知っただけで、香奈はネットですら恥ずかしくておじさまと会話が出来なかった。

その上、おじさまは香奈の名前も知らないし、香奈がプロテストに受かったことも知らず、そして香奈の存在すら知らなかった。

そのことに香奈はまったく気付かずに幻想に浸りながら会場に向かって行った。

研修会場はプロテストの実技試験で使われた場所と同じだから、香奈は場所も中身もわかっていて何の不安も無く研修会場に辿り着くことが出来た。

中に入ると銀河プロ麻雀連合のプロ達が研修の準備で慌ただしく動き回っていた。香奈はどうすればいいかわからず、恥ずかしくて誰にも声を掛けれず立往生した。

「ちょっと、ちょっと。」

香奈は後ろから聞こえてくる声にあわてて反応して後ろを振り向いた。

「そんなところにおったら邪魔になるから早くこっちきな。」

そう言われた香奈は言われる場所に移動した。そこは待合室でそこには香奈と香奈を呼び込んだもう一人の女性しか居なかった。

第4話 研修の始まり

「私は桜井里香って言っただ。あんたは？」

その桜井の質問に香奈は緊張して

「わ、私は・・・小林、・・・。」

と口籠もって満足に名前も言えなかった。

「あんた何緊張してるのよ、プロは人前に入る商売なんだからもつとしっかりしなさいよ。」

と桜井は香奈をたしなめた。しかし香奈はそう言われてもすぐに直るわけでもなく

「は、はい。」

と小声で返事をするのがやっとだった。

「あんた女流合格？」

と桜井は香奈に質問した。香奈はまた小声で

「は、はい。」

と返事した。

「そうだよ、あなたが正規合格だったら落ちた人達は立場無いわ

よね。ちなみに私は正規合格よ。」

と桜井は香奈に勝ち誇ったように言った。香奈は正規合格という言葉を初めて知り、女流合格の意味がわからず不安になった。そして女流合格は補欠のように思えて今までの浮かれた気分が吹き飛んでしまった。

そんな中、他の合格者達も研修会場に入ってきた。その中に交じって教育係の女性がさっそうと研修会場に現われた。

「キョウカや！」

他の合格者がそう言った。それに反応して香奈はキョウカの方を見る。まぎれもなくあのタレントのキョウカである。

テレビでしか見たことが無いタレントのキョウカを見て香奈は心の中で感激していた。しかし香奈はその程度の知識しかないから、キョウカが麻雀プロでここには教官として来てることをまったく知らなかった。

第5話 自己紹介

「プロテストの合格者のみなさん集まってください。」

その教育係の号令で合格者達は指示された場所に集まりだした。香奈もその場に行って横一列に並ばされた。

目の前を見るとあのキョウカが教育係側の方に立っていた。

（キョウカさんに教育される）

香奈はそう思い怯え緊張し始めた。さらにその香奈に追い打ちを掛けるように教育係が

「まずはみなさん自己紹介をしてください。」

と言った。教育係側からしてみれば誰が誰かわからないから、合格者達に自己紹介をさせるのは当たり前の話だが、自閉症の香奈にはその自己紹介で名前を言うことすら恐怖で精神的に苦痛であった。

次々と自己紹介がされていき、里香も明るく自己紹介をした。そうしてついに香奈の番になった。

「こ、こ、小林香奈といいます。」

自閉症の香奈にはこれが限度で、それでも香奈は心臓が止まる程緊張してもうこれ以上何も言えなかった。教育係達はさすがに香奈にもっと語るように言うことが出来ず、仕方なく次の人に順番を回した。

（何でこんなの入れるのよ）

キョウカは緊張してうまくしゃべれない香奈を見て呆れてしまった。過去に点数計算の出来ない女子まで合格させていた団体側に不満を持っていたキョウカだが、今回の香奈には思わず不満が爆発しそうになった。

そして全員の自己紹介が終わり教育係から今回の研修の説明が始まった。その間も香奈は先程の緊張が解けず、話に集中出来ていなかった。

第6話 キヨウ力の不満

そしてキヨウ力が話す番になった。キヨウ力はその場に居る合格者全員を見渡し不満をもったまま

「みなさんがこれからプロを名乗る以上、もう普段のような振る舞いは出来ません。あなた達の恥は私達の恥です。今日はあなたが恥をかかないよう私達が恥をかかないようマナー研修をします、以上。」

と合格者達にきつく言って最後に香奈を見た。香奈は先程のシヨックでうつむいたままキヨウ力の話を聞いていた。

実は正確には聞き流していたで、香奈はおじさまは努力しない人はきらいだから、自己紹介を満足に出来なかった香奈のことを嫌いになったのではと勝手に思い込み落ち込んでいた。

そんな馬の耳に念仏みたいに、今の話を聞いてなさそうな香奈にキヨウ力は今にも怒りが爆発しそうだった。

しかしキヨウ力は大人らしく冷静に心を落ち着かせようとした。なぜなら麻雀のプロ団体は民間企業と違ってサークル的な仕組みで、参加者は給料を貰うどころか逆に会費を払ってる状態である。

だから厳しくし過ぎてせつかくの合格者がやめたら団体が困ることになるので、キヨウ力はあえて言いたいことを言わずに冷静に我慢した。

例えば民間企業みたいに戦力として使えるように教育しなくてもいい、

とりあえず体裁さえ整ってればいいわとキヨウカは開き直り話を終えた。

そんな風にキヨウカが香奈に対して怒っていたことをまったく露知らず、香奈はこれから香奈にとっての地獄の研修を向かえるのだった。

第7話 マナー研修（1）

「それでは全員、卓に着いてください。」

その教育係の号令で合格者改め研修生達は卓に着いた。テストの時は公平さを期すために各自座る位置が決められていたが、今回は順位など関係なくどこに座ろうと自由だった。

里香は戦略的に香奈と一緒にになった方が香奈を引き立て役に使えると思い、香奈が座る卓に同じく座ろうと待ち構えた。しかし香奈はどんくさくおろおろとして席を選べなかった。

香奈が席を選ぼうとしないから里香は呆れて

「ほら、早くこっちに座りなさいよ。」

と香奈に言っただけで香奈を半端強制的に着席させ自分も同じ卓に座った。香奈は緊張したまま相変わらずおどおどしていた。そんな香奈を見ながら里香は大丈夫なの？と戦略を忘れて心の中で香奈を心配していた。

研修生が四人ずつ全員卓に着いたのを見て教育係のリーダーが

「それではマナー研修を始めたいと思います。まずは親決めを始めてください。」

と言った。その号令で研修生達は全員親を決めるために東南西北を牌山から捜し出しセットした。香奈の卓は香奈も親決めの準備に参加しようとしたけど、香奈の動きが鈍いため、他の三人で準備をし

て香奈は何も出来なかった。

四人のうちの一人がサイコロを振り、セットした牌を開いて場所を決めていった。香奈が掴んだ牌は西で東は里香が掴んだ。その卓は里香が親で始まり香奈は西家になった。

そして里香が座った場所から右回りに南、西、北と座り準備が整った。香奈は少しは落ち着きを取り戻して来たがまだ心は不安でいっぱいだった。

第8話 マナー研修(2)

里香がサイコロを振り、香奈の卓の研修対局が始まった。

当たり前のように早く配牌を取る三人に対して香奈は相変わらず動きが遅くぎこちなかった。家で練習してきたとはいえ動きがあまりにも遅かった。だからキョウカはすぐに香奈が初心者だと見抜いてしまった。

(なんでこんな初心者がプロテストに合格するのよ。いったい何の為にテストしたのよ！)

キョウカは怒れるまま香奈の後ろに貼りついて香奈を睨み付けた。しかし香奈はそんなキョウカの行動にまったく気付かず、ぎこちない動きのまま自摸っては切るを繰り返していた。

逆に香奈の対面に座る里香は、キョウカが注目してくれてると思いき少しでも評価してもらおうと動作を綺麗に振る舞った。そして

「リーチ。」

と言って牌を横に曲げ千点棒を卓上に置いた。その里香の親リーに對して他の二人は警戒して慎重に切る牌を選んだ。しかし香奈は何事もなかったように手牌から不要な牌を選んで切った。

何故なら香奈は麻雀を各自の点棒を取り合い、順位を競い合うゲームだとまったくわかっていなかった。だから香奈はここで里香に振込んでも何も感じなかった。

だが麻雀は四人でやるゲームである。一人の愚かな行為でトップが決まってしまう他、二人は当然面白くないのである。

いつも一人で練習している香奈には順位などあつて無いようなものであり、まして順位を意識して打つなんて香奈には最初から無理だった。

そんなことを知らないキョウカはこの香奈の無神経な行為にますます腹が立っていた。

第9話 マナー研修(3)

しかし、鬼神のごとくキヨウカは香奈の手牌を睨み付けるだけでそれ以上のことをしなかった。なぜなら香奈の天賦の才が自然にキヨウカの心を引き付けていたからだった。

しばらくして香奈もテンパイした。しかし香奈はリーチを掛けないでダマのままだった。それをキヨウカは疑問に思いながらも黙って観ていた。

そうこうしているうちに上家が香奈の当たり牌を切った。とっさに香奈はロンと言おうとしたが声が出ない。その香奈の行動に他の三人が注目し、香奈はますます緊張してしまった。

香奈は上家が切った牌にロンと言えず、おどおどして和了るのをあきらめて自摸ろうと山に手を伸ばした。

「ちよつとー、それ当たりでしょ！何で和了らないのよ？」

キヨウカはあわてて香奈を止めるように言った。香奈は突然のことで頭がパニックになり、何一つ答えられなかった。

そんな香奈に追い打ちを掛けるようにキヨウカは

「あんたこの手で何でリーチを掛けないのよ？待ちはいいいし最高形なんだからリーチしなさいよ！」

とさらに香奈を問い詰めた。追い詰められて香奈は何も考えずに咄嗟に

「や、役があるから。」

と答えた。香奈がやってきた一人麻雀は点数の上下など関係なくただ和了ればよかった。リーチは役が無い時に使う手段だった。

その香奈の返答にキヨウ力は呆れて力が抜けてしまった。それでもキヨウ力は香奈に

「それはわかったわ、じゃあ何で和了らなかったのよ?」

と香奈に問い質した。

第10話 マナー研修(4)

呆れるキヨウカを見て香奈はますます戸惑い、脅え苦しんで言葉が出て来なかった。そんな香奈にキヨウカは

「それで何で今、和了ろうとしないのよ？」

と冷たく問い質した。香奈はおどした口調で

「口、口、口、口、ロンと言えませんでした。」

と申し訳なさそうに言った。そのあまりにもプロとは呼べなさ過ぎる初心者レベルの香奈についてキヨウカの怒りが爆発した。

「あんたそんなレベルで何でプロテストなんか受けるのよ！私達プロを馬鹿にしてるの？こんなレベルでもプロになれる、実際合格してるのだからそう思えて仕方ないわね。」

とキヨウカは香奈に強く言い放った。香奈はまったくそんな気は無く誤解ですとキヨウカに反論したかったが、香奈はキヨウカの偉い剣幕に押されて何も言えなかった。

「もう、あんたいいわ。あっちいつて発声の練習してなさい！」

そうキヨウカは冷たく香奈に言い放った。香奈はそんなのけ者扱いが嫌でキヨウカに何か言おうとしたが言葉が出ない、キヨウカはさらに

「あんたが居たら他の三人が迷惑なのよ。早くどいてちょうだい。」

と香奈に言った。そこまで言われたらさすがに香奈も場所を開ける
しかなく、香奈は仕方なく席を立った。そして香奈は淋しそうに窓
際に移動した。

「ここ代わりに田中君入って。」

キョウカは香奈が抜けた分の人数合わせで教育係の田中を席に座ら
せることにした。こうして香奈は二度と味わいたくなかったつまは
じきという屈辱を味わされた。

第11話 マナー研修（5）

香奈は悲しくて悲しくて涙が出てきた。おじさまが所属する団体で、香奈を受け入れてくれた夢のような団体だと思っていたのにこの仕打ちである。香奈は夢を砕かれ絶望で意気消沈した。

そんな光景を見て教育係の男二人がキョウカの新人いじめが始まったとこそ陰口を言っていた。

キョウカは香奈のことはもうどうでもよく、その日の研修が終わりしだい香奈にプロをやめてもらうつもりだった。

香奈は少しずつ落ち着きを取り戻し、もう何の未練も無いこの場から出ていこうと思った。

しかし、香奈はおじさまと同卓するようなことが有ったとき、今みたいにロンと言えない駄目な子と思われたくない！そう思い香奈は声こそ出せないが、心の中でロンと言う練習を始めた。

心の中でも香奈には苦痛の行為だった。だけど香奈はおじさまに頑張れば出来る子と誉められたくて時間を忘れて練習した。

マナー研修の一日目が終わり、研修生全員が集められ香奈はその時になってやっと呼ばれた。

みんなで終了の挨拶をしてそこで解散することになった。香奈はその時キョウカに呼ばれた。

「あなた、何が目的でプロになろうとしたの？」

とキヨウカが香奈に質問した。

「わ、私は、おじさまに会いたくて、テ、テストを受けたら、合格したのでこ、こに来ました。」

と香奈は緊張しておどした口調でキヨウカの質問に答えた。それを聞いてキヨウカは

「あなた男目当てでプロになったの？」

と激しく怒りだした。

第12話 マナー研修(6)

香奈の返答は香奈からみれば普通で何も問題無かった。しかしキョウカからみれば

「あんだ、男目当てでプロになったの！？ふざけないでよ、プロ団体は男と逢引きする場所じゃないわよ！！」

と激しく香奈に怒りをぶつけるほど不快な物だった。その激しい怒りに香奈はキョウカが何故怒ってるのか理解出来なくて困惑した。そして何も言えずにおどしているとキョウカが香奈を見て呆れながら馬鹿にした態度で

「あなた騙されてるのよ。どうせろくでもない男なんでしょうね、おじさまって人は。」

とおじさまをけなした。それを聞いて香奈は怒りが頂点に達し

「おじさまはそんな人じゃないですー！！！」

と絶叫して会場から走って出ていった。それを見てキョウカは困惑し

(おじさまって親戚か何かなの？もうわけわかんないわよ。)

と思いそばにいた教育係の一人に

「試験官は何であんなの合格させるのよ？相手する方の身になってよね。」

と愚痴った。それを聞いた教育係はキョウカに

「何か事務局長が筆記の成績が良かったから努力を認めてあげましよう」と押したみたいですよ。」

と説明した。それを聞いてキョウカは

（努力、努力したぐらいでなれるなら誰だってプロよ。実際、ちょっと努力しただけでプロになったなんちゃってプロばかりよ。）

と今の団体の現状を苦々しく思った。先輩として新人の面倒をみるのが義務だと思ってたキョウカだが、なんだかんだでもう新人の面倒を見る気は失せていた。

第13話 初めて気持ちを伝える

走って研修会場を出た香奈はさすがに疲れて歩きだした。

（もうあんなとこに居たくない！私はともかくおじさままでひどくいうなんて）

大人に成り切れない香奈にとって研修会場は一秒も居たくない場所になってしまった。それで珍しく香奈は走って会場を出ていった。

そして香奈は歩きながら家に向かった。他に行きたいところも無く、することも無くただ願うのは家に帰ることと安心できる居場所に居たいということだけだった。

実は香奈は好き好んで家に閉じ籠もるわけではない。やりたいことはあるにはある、ただ傷つくのが怖いから家に閉じ籠もるのである。

ゆえに傷ついた香奈が逃げて家に向かうのは必然の行為だった。

家に辿り着き部屋に戻った香奈は思いつきり泣いた。新しい居場所を求めて麻雀のプロ団体の試験を受けた香奈、しかしそこに香奈の居場所は無く、香奈はただ泣くしかなかった。

そして香奈の心の居場所、おじさまの運営するHP「希望の丘」にアクセスしようとPCを立ち上げた。

画面は希望の丘を表示した。まだ更新はされてなくて香奈はおじさまから新しい励ましの言葉を得ることが出来ず心が苦しくなった。

そしてその心の苦しみを解き放つように掲示板に

私にとっておじさまは太陽であり、私は太陽の子供です。

と夢中になって書き込んだ。初めて香奈は掲示板に書き込み、初めておじさまに気持ちを伝えた。

そして香奈は力尽きてPCの電源を切った。

第14話 キョウカの憂鬱

おじさまにネットを通して気持ちを伝えた後、香奈はいつもの引きこもりの生活に戻った。しかし、今まで続けてきた麻雀の練習はもうやろうとしなかった。

その頃、キョウカは自分自身の経営する雀荘

「サンフラワー」に顔を出して、従業員にあれこれと指示を出して家に帰った。

家に着いてキョウカは一休みした。今のご時世、雀荘経営は難しい状態だった。キョウカの店は女子プロ多数常勤が謳い文句だったが、女子プロが増えれば他者の店にも女子プロが常勤し始めた。

おかげでキョウカの店の優位性は無くなり売り上げは落ちた。さらに給料の高いところへと女子プロ達は移動するのでキョウカの店は常勤多数どころか逆に慢性的な女子プロ不足になった。

その女子プロ不足でさらに客足を落とす始めたのでキョウカは毎日のように店に出て営業のてこ入れをしなければならず、精神的負担も大きかった。

だから今日みたいに新人の指導係などする暇があったら、店に出て売り上げを伸ばしたい気持ちである。そんな気持ちで今日のことを振り返り、香奈のことを思い出して怒って事務局長に電話をし始めた。

「はい、斎藤です。」

「水野です、事務局長が合格させた子ですがあんな素人を何で合格にしたのですか？」

「彼女ですか、彼女はかなり筆記試験が良かったから他の人達よりも努力する子なんですよ。それで私をお願いして合格にしました。だから僕の顔を立ててもう少し面倒みてもらえないでしょうか？」

「そうなんですか、わかりました、もう少し面倒みます。」

「面倒掛けてごめんね。それじゃまた。」

「はい、お疲れさまでした。」

キョウカは電話を切り事務局長との会話を終わらせた。

第15話 おじさまの願い

キョウカは努力が理由ならばと事務局長に抗議をしないことにした。事務局長がいい加減な理由で香奈を合格にしてくれるように頼んだ訳ではないとわかったので、もう抗議する気が無かった。

それにあの状態なら香奈はもう研修に出て来ないだろうと思い、香奈をやめさせる行動をしなくていいとキョウカは判断していた。

一方、香奈が無気力になって普段の生活に戻っている間に『希望の丘』で香奈の書き込みに対して他の人達が反発していた。

香奈の文章が、香奈がおじさまの子供と香奈がおじさまを独占または特別扱いしてもらおうと考えてると他の人達がそう受け止めてしまったからだった。

そしてなまいき、ずうずうしいと各自の意見が並び、香奈に対する抗議文が掲示板に並んで書かれた。

事態を重く見たおじさまがあわてて

僕にとつてみなさんは僕の大事な子供達です。そしてみなさんにとって希望を与えてくれる太陽を目指してます。

香奈さんはうまく表現出来なかっただけでみんなが考えてるようなことは一つも思っていないです。

僕は、こんな風にうまく表現出来なくて、誤解で苦しく悔しく悲しい思いをしている子達を助けたいし助けて欲しいです。

どうか彼女を温かく見守って、彼女がうまく気持ちを伝えられるように助けてあげてください。

と掲示板に書き込んだ。この後、その書き込みに賛同、感謝の書き込みが続いた。そしてもう誰も香奈を責めようとはしなかった。

第16話 おじさまへの熱い気持ち

一夜開けて、香奈は昨日の疲れを少し残したまま目が覚めた。香奈は二トだから時間に急かされることもなく、マイペースで日常の活動を始めようとしていた。

そして香奈は自分自身の書き込みにおじさまがどう返答してくれたか気になり、PCのスイッチを押して希望の丘の掲示板を見た。

掲示板のいろんな人の書き込みを見てやっとおじさまのコメントを見つけた。この文章は誰のことを指してるか香奈はわからず、さらに遡った。

そこで香奈の後の書き込みを見て香奈はショックを受けた。その香奈を非難するコメントを見て

（私はそんな風に思ったことない、おじさまに温かい言葉を掛けて欲しいだけなのに）

香奈は激しく動揺し次々と他者のコメントを読んだ。そしておじさまのコメントに辿り着いてやっとおじさまのコメントの意味がわかった。

意味がわかり、香奈はうれしくて涙が出てきた。そして画面に向かって

「ありがとうございます、私は一センチミリでもおじさまの傍に居たいし、一分一秒でもおじさまと一緒に居たいです！」

と涙を流して熱く語った。しかし香奈は今回はそう書き込む勇氣は無く何もコメントを返さなかった。

香奈はすぐにでも麻雀の練習を始めようとしたが、問題があることに気付いた。キョウカにあんな態度を取った以上、もう銀河プロ麻雀連合に参加できそうに無かった。

こうして香奈は後悔と憂鬱な気分でまた夢も希望の無いニート生活に戻ることになった。

第17話 仲間扱い

昼過ぎに家の電話が鳴った。香奈は驚いて電話機の傍に行った。そして家の者は居なかったから渋々香奈が受話器を取った。

「はい。」

「小林さんのお宅ですか？」

「はい。」

「私、銀河プロ麻雀連合の斎藤と申します。香奈さんは今居られますか？」

「わ、私です。」

「どうも香奈さん初めまして。私、事務局長の斎藤と言います。香奈さん、今回の研修は難しかったですか？」

「・・・」

「研修は最初はみんなうまく出来ないからどうしても教える方はいらついたりしちゃいます。だけど時間掛ければ出来るようになるから一時的なことだと思って気にしないでください。」

「わ、私、向いてないかもしれません。」

「だからみんな最初からうまくいきませんよ。向いてる向いて無い研修が終わってから判断すればいいじゃないですか。」

「せっかく合格したのに簡単にあきらめちゃ駄目ですよ。次の研修にも絶対来てください。あなたは私達にとって大切な仲間なんですから。」

「はい、行きます。」

「お時間取ってごめんなさい。それじゃ研修会場で待ってますから。」

「はい。」

電話を切った後、香奈はうれしくて涙が出てきた。あきらめていた

おじさまに逢うチャンスが出来たことと仲間扱いしてもらえたからだった。

香奈は人付き合いが苦手で、他の人達と永遠に仲間にはなれないと思っていた。おじさまがグループを持っけていても香奈は怖くて入れなかっただろう。

だから斎藤に仲間扱いされたことがものすごくうれしかった。

第18話 香奈の悩み

香奈はまたプロ団体で頑張れるようになったから、今までやめていた麻雀の練習を復活した。

そして研修の時に厳しく言われた発声を香奈は出来るようになるうと必死に練習を始めた。香奈は人との対話が苦手なだけだから単なる発声なら臆することなく問題なかった。

「ポン！」

相変わらず友達も居ない一人麻雀だけど、香奈は研修の時に体験した普通の対局を想像し、実戦的な発声練習を続けた。

いざ本番になればまた緊張して声が出せなくなるかもしれないが、練習に次ぐ練習で香奈は無意識に発声出来るようになるだろう。

香奈はそこまで考えてなかったが、おじさまに少しでも近付きたい、その一心で大きく声を出せるように練習し続けた。

こうして二回目の研修の日の朝が来た。研修の日を迎えて香奈はやはり緊張していた。おじさまが研修会場に来るとは限らないのに、心の中は来てくれると思い込み緊張していた。

緊張してあまり声が出せず、それが不安でますます精神が弱くなる悪循環であった。しかし香奈はおじさまに会いたいという気持ちで前に進み玄関を出た。

香奈は歩きながらおじさまに逢えるという気持ちと裏腹に1番難しい問題を危惧していた。その悩みはキヨウカの存在であり、キヨウカの気分次第では香奈は研修を受けられないかもしれないかった。

香奈はおじさまのことを忘れ、事務局長の斎藤が香奈のことをキヨウカから守ってくれるよう必死に願いながら研修会場まで歩いた。

第19話 痛恨のミス

研修会場は前回と同じ雀荘で香奈は震えながら恐る恐る雀荘のドアを開けた。

ドアを開けると前回と変わらない風景が香奈の目に飛び込んできた。ただ教育係が前回と違うからみんな香奈のことを普通の研修生と思い、誰も香奈を気にしなかった。

これ幸いと普通に香奈は前回と同じく待合席に行った。そこには先に桜井里香が座っていた。里香は香奈を見て驚き香奈に

「あんたやめたんじゃないの？」

と聞いた。そんな失礼な質問に香奈は怒るよりも不安になり

「じ、事務局長さんが、また来てくださいと言ってくれました。」

と不安気に答えた。それを聞いて里香はこの団体は女なら誰でも採用する団体なんだと、半ば呆れた。

香奈が普通に待合席に座るのを見て里香は、香奈が何で麻雀プロになりたいのか不思議でならなかった。それで香奈に

「あんた何で麻雀プロになったの？」

と聞いた。その問いに香奈はおどししながら

「お、おじさまにあ、会いたくてなりました。」

と答えた。

「お、おじさま？誰？その人。」

里香はさらに問い質した。

「な、名前はわ、わからないけど麻雀のプロです。」

と香奈は答えた。名前もわからない人に会うためにプロになる香奈に呆れて

「それでこの団体所属なの？」

と質問した。

「えっ？」

その質問に香奈は驚いた。驚く香奈に里香は

「プロ団体は他にもあるのだから、おじさまっていう人がここに居るとは限らないわよ。」

と言って教えた。それを聞いて香奈はろくに調べもせずにもこの団体に入ったことを激しく後悔した。

第20話 香奈の回復

（この団体がおじさまの所属する団体と仲が悪かったらどうしょ？）

思わず香奈はそう考えてしまい不安を増大させてしまった。そして
香奈は里香に

「ほ、他の団体に移ることは可能ですか？」

と香奈が今から他の団体に移籍出来るが聞いてみた。そんな香奈からの質問に里香は呆れて

「あんだ、この団体に合格したのが奇蹟なくらいなのに他の団体つて、あんだ他の団体も受かると思ってるの？」

と逆に香奈を問い詰めた。そう里香に言われ、香奈は確かにと他団体に移籍することをあきらめた。

しかし、この団体がおじさまの所属する団体と対立する限り、私はおじさまの敵になると香奈は勝手に思い込み深く落ち込んだ。

そんな香奈を見て里香は

「団体同士仲良くやってんだからわざわざ他に移る必要無いのじゃないの。」

と馬鹿なことを考えてる香奈をたしなめた。

（仲良くやってる……、私はおじさまの敵じゃないんだ）

そう思い香奈は元気になった。おじさまにこの団体で頑張っていると
ころを見せられる、おじさまは頑張ってる香奈を誉めてくれる、そ
う思い香奈は幸せそうに目を輝かせた。

（何、この子）

そんな喜怒哀楽の激しい香奈を見て里香はただ呆れるだけだった。

そして前回と同じようにキヨウカが到着し研修会場に入ってきた。
キヨウカは周りを見渡し香奈に気付いた。

（やめたんじゃないの？）

キヨウカは香奈が何でここに居るのと驚いた。

第21話 危険な振る舞い

キョウカは香奈をどうするか迷った。いつものキョウカならすぐに香奈に引導を渡しているが、今回は香奈の面倒を斎藤に頼まれているから、簡単に引導を渡せなかった。

しかし、香奈にはどう考えてもプロとしての活動は無理である。そのことをわからせてからやめさせた方がいいかもと思った。よってキョウカは香奈を最後まで研修を受けさせて、それからやめさせることにした。

一方、香奈はキョウカの考えなどまったくわからないまま、ただ必死に他の団体に移れるだけの実力を付けることだけ考えていた。

第二回目の研修が始まり、研修生たちは全員整列させられた。

研修の説明が始まり、最初は前回のおさらいから始めるとのことだった。香奈は途中で外されたから当然内容がわからなかった。

しかし、香奈の目的は他の団体でも合格出来るようにレベルアップすること、ここの団体のプロになることでは無かった。

こんな不真面目な考え方は当然問題だった。おじさまが銀河プロ麻雀連合所属だったら香奈のやっていることは逆効果である。

香奈は事務局長からの電話でこの団体をやめさせられないと安心しているが、不真面目な態度で研修を受けているのなら、事務局長もさすがに香奈を退会にしなければならない。

こんな感じで香奈はおじさまを追い求めるあまり、組織のマナーに違反して再び引きこもり生活に戻りそうになっていた。

そんな危険性を孕みながら研修二日目スタートした。

第22話 緩慢な動作

研修二日目はまずは前回のおさらいから始まった。

香奈は途中で退席させられたから指導内容はほとんどわからなかった。だから香奈はすべて他の人の真似をすることにして、研修を乗り切ることにした。

そして対局中の動作、マナーを教育係に見てもらう為に研修生全員が対局を開始した。

香奈は他者の動作を見よう見真似で実行しようと精神を集中して努力した。

その結果、自己動作ではなく真似だから、ただでさえ動きの遅い香奈はますます動きが遅くなった。

そんな光景は嫌でもキョウカの目に付く。キョウカは呆れて香奈の傍に張り付いた。

香奈はキョウカに見られてることを知らず、見よう見真似での動作に終始した。その動きの緩慢さに対局者達はいらつきキョウカもいらついた。

（努力の子ね。）

キョウカは動きの遅い香奈にいらつきながらも香奈がきちんと発声するように成ったことを感心した。

ただキヨウカが感心しても他の対局者達は納得できない。声に出せないが目線で香奈と打てないとキヨウカに訴えた。

さすがにキヨウカも香奈に注意しないといけないと思い香奈に

「小林さん、もっと早く動けないの？」

と厳しく質問した。突然の質問に香奈はうつたえるだけで何もキヨウカに言えなかった。

香奈は合格点を貰えると思った動作が否定されたと思い、心が動揺した。心の支えを失った香奈は当然キヨウカに何も言い返されなかった。

そんな香奈の態度にキヨウカはただ呆れるだけだった。

第23話 点数計算の研修

本来なら香奈はまた退席させられ、一人で練習になるところだが、今回は退席させられなかった。

「小林さん、あなた何も考えずにただ早くなるように打ちなさい。これが課題よ。」

とキョウカは香奈に指示した。さらにキョウカは他の研修生達にも「あなた達も今は結果なんか関係ないからきれいに打てるよう練習しなさい。」

と指示した。当然、誰もキョウカに逆らえないから全員言われた通りにやるしかなかった。

そして香奈は指摘を受け入れれば他団体の試験に合格しやすくなるおじさまのそばに行きやすくなると考え、喜んで練習した。

こうしてマナー研修が終了し、今度は点数計算の研修になった。

点数の計算方法の講義が行われ、研修生達が理解できたか確認するために数々の問題が出され、指された者達が次々と答えていった。

「小林さん、これは何点？」

突然ヨーカが香奈に質問した。その問いに香奈は

「よ……4400点です。」

いつものように自身無さそうに答えた。キョウカは次々と香奈に質問した。それに対して香奈はすべて正解の点数を答えた。

（点数計算は出来るのね）

そうキョウカは思い香奈を見直した。香奈はプロテストに合格するために点数計算を必死に勉強していたから、無事今回も全問正解になった。

しかし、目の前の牌を使って110符2ハンを作れと言われたら、いつもの動きの遅さから他者に先に牌を取られ、作ろうにも必要な牌がもう無くて出来ずで終了した。

第24話 キョウウカの雀荘に就職することに

別に実戦で牌を集めて 符 ハンを作るというゲームはやらないから、この場で出来なくてもどうってことはなかった。

しかし、香奈からしてみればこの問題で他者に負ける テストに不合格 おじさまの元に行けないになるから、思わずショックで落ち込んでしまった。

そんな香奈を見て、キョウウカは香奈の動きが遅すぎるのは経験不足が原因だと思い、あることを考え実行しようとしていた。

二回目の研修が終了し、研修生たちが少しずつ帰りだした。ここでも香奈は鈍臭く帰るのが遅れていた。

「小林さんちよっと！」

そう言つてキョウウカは香奈を呼び止めた。香奈は驚きながらもヨイカの所に向かった。そしてキョウウカの前に立った。

「あなた雀荘で働いてみない？」

とキョウウカは香奈に質問した。突然のことで香奈はどう返事をしていいかわからず戸惑った。香奈から返事が来ない事を確認してヨイカは

「あなた、今のままじゃプロになれないわよ。だから私の店に来て練習しなさい。どうせ家に居たってまともに練習出来ないのだから、プロになりたいなら私の店で働きなさい。」

と香奈を自分の雀荘に誘った。それを聞いて香奈はプロになれる実力が付く おじさまに逢えるだからキョウウカの申し出をすぐに受け入れた。

「じゃあ決まりね。場所は・・・」

とキョウウカは紙に場所と電話番号を書いて香奈に渡した。香奈はおじさまに早く逢えるようになりたい、そう思い紙に書かれた場所を明日尋ねることにした。

ただ香奈は雀荘勤務のことはまったく知らず、研修の延長みたいな気持ちで考えていた。

第25話 サンフラワー

次の日の朝、香奈はうれしそうに家を出た。雀荘で働くことによつて憧れのおじさまに近付けると思えば、雀荘で働くことは苦になるどころか幸せになる一歩である。

と言うよりも香奈は雀荘の仕事がどんなものかまったくわかってなかった。だから香奈は雀荘勤務を苦に思いようがなかった。

電車を降りて新宿駅から歩いて5分、地図に書かれた雑居ビルの3階にキョウカの店の『サンフラワー』があった。

香奈はビルのエレベーターに乗り3階で降りた。店の入り口の壁にはキョウカのポスターが貼つてある。それを見て香奈は無事キョウカの店に来れたと確信してほっとした。

ただキョウカの雀荘は初めてなので、香奈は緊張しながらドアをゆつくり開けた。

「いらつしゃいませ。」

店員と目が合うと店員がそう挨拶してきた。店内はキョウカの趣味で、壁は白く装飾品が綺麗に飾つてあった。

「初めてですか？」

店員はそう香奈に聞いてきた。香奈は静かにうなずいた。

「それならルール説明しますね。ここにお名前とご住所をお願いし

ます。」

店員はそう言っで香奈に用紙に名前と住所を書くように求めた。それで香奈は用紙に名前と住所を書き出した。名前と住所を書き終えると店員はルール説明を始めた。

サンフラワーはフリー雀荘だから団体とはルールは少し違ってた。

香奈はフリー雀荘の知識が無く、フリー雀荘の用語の意味がまったくわからなかったが、怖くて質問出来ないから、ただ黙って説明を聞くだけだった。

第26話 接客

店員がルールとマナーを一通り説明し終わると

「何か質問等がありますか？」

と香奈に聞いてきた。香奈は質問というよりも、マナー自体まともに理解していないからもう一度詳しく説明して欲しかった。

しかし香奈は怖くてとてもそんなことは言えないから

「な、な、無いです。」

とそう緊張しながら答えた。

「当店はフリードリンクになってましてお飲物は何にいたしましょうか？」

さらに店員は香奈に何が飲みたいか聞いてきた。香奈はフリードリンクの意味（飲み物代無料）がわからないし、何があるのかもわからない、それで思わず

「み、水をください。」

と緊張しながら言った。それを聞いて店員が

「じゃ、お水を持って来ますね。」

と言って香奈から離れた。何事も初体験の香奈は客としてゆったり

と構えることが出来ず、ただ緊張して震えるだけだった。

それに香奈は客じゃなくてヨーカに言われてここに働きに來たと店員に伝えるだけでいいのに、怖くて言えないからこんな風に客として扱われるのである。

ただ仮に言ったとしてもうまく伝えることが出来ないから、逆に働きに來たと言わない方がよかった。

すぐに店員が水を持ってきて香奈に渡した。その後

「それでは現在南2局ですので、先にお預かりを頂きたいのですが。

」

と香奈に言った。

（お預かり？）

香奈は預かりの意味がわからない。そう言われてただ戸惑うだけだった。

第27話 案内

「5000円程でよろしいのですが？」

香奈が意味がわからずただ戸惑っただけだったので、そう店員が香奈に言った。

（会費？）

香奈は団体に払う会費みたいなものかと思い、あわてて財布から五千円札を出して店員に渡した。店員は香奈から五千円札を受け取り

「五千円からお預かりいただきました。」

と叫んだ。香奈は金を渡したまま、金を払う意味もわからずただ卓上で麻雀をしている客を見ていた。

店員が戻ってきて香奈に籠の中身を見せた。そして香奈に

「これが千円分で二枚、これが五百円分で三枚、後小銭が五百円分と籠が千円分で合計五千円になります。」

と籠と籠の中身を説明した。先程の五千円が籠とカードになったのだが、香奈はまったくわかってなかった。

香奈は会費として払ったつもりだからその金が戻ってくるとは思ってなかった。だから籠と籠の中身はゲームで使う小道具と勝手に判断し、使い方をわからないことを黙っていた。

質問はおろか会話すら出来ない香奈には店員に何も言われない時が安らぐ時だったが、そんな時間は長くは続かない。

「卓ラストです。優勝は・・・」

香奈が見ていた卓が終了し、卓上でカードのやり取りが行われていた。一人が抜け、先程の店員が点棒を卓の箱の中に戻していた。

「それでは待ち席でお待ちの小林さんどうぞ。」

と店員が香奈を一卓に呼び込んだ。しかし香奈は呼ばれてることがわからず待ち席から離れなかった。

第28話 パニック

「小林さんどうぞ!」

と店員が強く言って、香奈は小林が自分一人しか店内に居ない事がわかり、席を立ち訳わからぬまま空いた席に向かった。

すでに他の三人は準備万端で香奈を待っていた。香奈は席に座ったが何をしていたかわからない、ただおとなしくしてるだけだった。

「これが配牌で小林さんは南家スタートになります。」

店員が香奈の立場を説明し、香奈はやっと少しは今の状態をわかった。とは言っても南家から麻雀を始めることしかわからなかった。

香奈の動きは昨日の今日だから相変わらず遅い。しかし前よりは早いから、同卓者からは初心者だからだと不満の声は上がらなかった。

順目が進む内に香奈はツモドラ1を和了った。

「ツ、ツモ、ご、五百、千」

香奈はおどおどしながら点数を申告した。しかし同卓者は千点と二千点と各自百円玉を香奈に渡してきた。

(??????)

香奈は点数計算を間違えたと思い恥ずかしく感じた。しかし百円玉の意味がわからない。香奈はどうしていいかわからず体がフリーズ

した。

同卓者達はみんな牌を機械の中に落としたが香奈は落とそうとしなかった。それで代わりに他の人が落としたが、香奈はまだ点棒を片付けようとしなかった。

動かない香奈に業を煮やして同卓者が店員を呼んだ。あわてて店員が来て香奈が動こうとしないことを説明された。

香奈はパニックになって頭の中が真っ白になり、体は硬直したままだった。

第29話 キョウウカの怒り

「小林さん、点棒片付けてください。」

店員が香奈にそう言って点棒と100円玉を片付けだした。香奈はあわてて

「わ、私の点数は・・・」

と点棒が多かったことを店員に言おうとした。しかし他の客が

「ツモ赤ドラ1だから千、二千でいいんだよ。」

と言い、店員も

「点数は間違つてませんよ。」

と言った。香奈は周りにそう言われるともう何も言えなくなり黙ってしまった。

こうして次の局が始まった。香奈は訳が分からないままだったが、親番で普通に打ち始めた。しばらくして香奈はテンパイした。しかし香奈はリーチをしなかった。

何故なら香奈は点数がわからなかった。だから他の人から出ても点数が言えないので、当たるに当たれなかった。

先程、香奈が点数に疑問を持った理由を女性の店員が気付いて、香奈のそばに寄って

「小林さん、5で赤色の牌はドラ扱いで和了れば1000円貰えますから。」

と香奈に説明した。それを聞いて香奈はやつと先のことがわかった。そして今回の手牌の点数もわかったから香奈は安心してリーチを掛けた。その後

「おはよーございます。」

キヨウカが出勤してきた。キヨウカは店内を見渡し・

「あんた何で本走してるのよ!？」

キヨウカは香奈が打つてることに驚いて香奈を叱った。香奈は何で怒られたかわからない、他の店員達も何でヨウカが怒ってるかまったくわからなかった。

「なお、この子まだまだなんだから本走なんてさせないでよ!」

とキヨウカは女性店員のなおを叱った。

第29話 キヨウカの怒り（後書き）

取材協力 京杜なおプロ（最高位戦）

第30話 何も知らない香奈

「え、小林さんはお客さんじゃ無いの？」

となおは驚いてキヨウカに聞いた。

「そうよ、この子今日からうちで働くことになったのよ！」

とキヨウカは声を荒げて言った。なおはそんな話は聞いてなくて分かりようがなく、知ってるか知らないか他の従業員達の顔を見た。

他の従業員達もそんな話は聞いてないから知らないと態度で示した。

「ケロ、この子と交替して。」

キヨウカは香奈と従業員のケロと交替させることにした。

「小林さん、交替よ。早く席を立つて。」

キヨウカは香奈に席を立ててケロと交替させようとした。香奈は理由が分からないが仕方なく席を立った。

そしてその席にケロが座りゲームは続行した。

「小林さん、ちょっとこっちに来なさい！」

何も分からず立ち止まる香奈をキヨウカはカウンターに呼び寄せた。香奈は言われるままにカウンターの前まで来た。

「小林さん、あなたはここに働きに来てるのだから、ちゃんと先輩メンバーの言うことを聞くのよ！」

とキョウカは香奈に厳しく指導した。しかし香奈はメンバーの意味がわからず、キョウカの言ってることがわからなかった。

メンバーとは雀荘の従業員のことと店長のキョウカの下はすべてメンバーだった。つまり香奈は立場上一番下っぱのメンバー見習いだった。

雀荘で働くどころか遊んだことの無い香奈には雀荘の仕組み及び用語がわからない。まして働いたことは無いは働こうという気も無かった。

香奈は実力を付ける為の訓練及び指導を受けるつもりでサンフラワ―に来ていたのだった。

第31話 限度

そんな香奈にキョウカは何をさせようか悩んだ。しかし香奈にさせれるのは掃除ぐらいしかなかった。

「小林さん、あっちから床の掃除をしてきて！」

キョウカはバケツと雑巾を用意して、香奈に店の端っこから床を雑巾で拭くように指示した。けど香奈は

「わ、わ、私、麻雀を打てないのでしょうか？」

とおどおどしながらキョウカに聞いてきた。しかしキョウカは

「いいから早く拭きなさい！」

と香奈を怒鳴った。香奈はキョウカに怒られ、言われるまま角の方に向かい、床の雑巾がけを始めた。

その間、キョウカは香奈の籠を精算しながらメンバーのなおに

「ねえなお、あの子、麻雀プロとしてやっていけると思う？」

と聞いた。その問いになおは

「うーん、さすがに無理じゃない。メンバーすら勤まらない子にプロは無理でしょ。」

とあっさり答えた。そのなおの考えに同意しながらもキョウカは

「あの子、今回のプロテストに合格して研修中なの。」

となおに教えた。なおは激しく驚き思わず

「ええーっ！」

と大きく声を出してしまった。客達は驚いてなおの方を見た。なおはあわててまわりに小さく謝り、キョウカに

「なんであんな子が合格するの!？」

とキョウカに聞いた。キョウカは精算しながら

「事務局長が決めたのよ。彼女は努力の子だつて。」

とキョウカも不満があるように答えた。それを聞いてなおは物には限度があると今にも事務局長の斎藤に抗議したい気分だった。

第32話 戸惑う香奈

一方、香奈は指導を受けるつもりでここに来たのに、掃除をさせられてるからキヨウカに抗議したかった。

しかし、香奈にそんなことが出来るはずもなく、仕方なく香奈は言われるまま床を拭き続けた。そんな香奈に

「小林さん、あなたのお金よ。」

とキヨウカは先程清算した金を香奈に渡した。驚きながら香奈はキヨウカから金を受け取った。

「金額は合ってる?」

キヨウカが香奈に先程預かった金と同額が聞いた。香奈は同額よりも金が戻ってきたことに不安になった。

何故ならその金はプロに成る為の受講料として払ったのだから、返ってくるということは講義をもう受けられないということだから。

つまり講義を受けられない プロになれないだから香奈は

「は、はい。」

と不安に怯えながら返事をした。そんな香奈を相手にしないかのようにキヨウカは

「もうこの雑巾掛けはいいから、あそこに居るなおに卓掃の仕方

を教わって来なさい。」

と香奈に命令した。香奈は卓掃の意味がわからなかったが、教わる
「講義だから少しずつうれしくなってきた。

「あ、あの、お金払わなくて、いいのですか？」

香奈は払ったつもりの受講料が戻って来た後だから、不安になり、
そうキョウカに聞いた。

それはキョウカにしてみれば訳のわからない質問だった。さすがに
仕事を教えるくらいで金を取る気は無い。キョウカは激しく怒り

「金なんかいらなから早く教わって来なさい！」

と大声で香奈を叱った。

第33話 卓掃

「は、はい。」

そう返事をして香奈は卓掃の準備をしているなおの所に向かった。

（人が親切心でここまで面倒みてあげてるのに）

そうキョウカは思いながら、あまりの香奈の駄目っぷりにいらついていた。

香奈はなおのそばに来たが、怯えてなおに声を掛けることが出来ない。ただ黙ってなおを見ることしか出来なかった。

そんな香奈にあきれながらなおは卓掃を始めながら香奈に

「小林さん、あなたプロになりたいの？」

と聞いた。そうなおに言われて香奈は

「は、はい。」

と怯えながら返事をした。

（かわいそうだけど、物には限度があるのよね。こんな子がプロになったって半年持たずに居なくなるに決まってるじゃない。）

となおは思いながら、香奈に卓掃の仕方を説明することにした。

「まずこうやって牌の表側を拭くでしょ。次に一列、一列起こして全部起こしたら一気に全部拭いてしまふ。横も同じで全部立てて一気に拭く。さあやってみて。」

なおは香奈に指示した。香奈は不器用でこんなことは初めてだから、当然動きはぎこちなかった。

なおも最初から香奈が出来ると思っていないから、怒らずに

「小林さん、研修では教えないけどプロは卓掃が出来て当たり前なのよ。これは私達の大事な商売道具、商売道具を大事に出来ない人ははつきり言ってプロじゃないから。」

と香奈にきつく説明した。しかし香奈は相変わらずプロ意識など無いから、なおの言いたいことはほとんど理解してなかった。

第34話 キョウウカの計算

それでも香奈は“プロになりたい”からなおに言われる通り、卓掃を覚えようとした。

相変わらず動きは遅いが、香奈は真面目に卓上を掃除した。そして毎度のごとく、香奈は掃除している姿をおじ様に誉められることを想像して喜んでいた。

そんなことは露知らず、なおは香奈が真面目にやってるから、少し態度をやわらげ香奈に

「私、銀河プロ麻雀連合の高木直子と言うの、つまりあなたの先輩なの。」

と語った。そう言われて香奈は少し驚いたが、かといって香奈は何も言えないからただ黙っていた。

「あら、私みたいなのがプロだと駄目なの？」

となおは微笑しながら香奈に聞いた。そうなおに言われて香奈は激しく戸惑いなおに

「そ、そ、そんなことないです。え・・・」

香奈はどう答えていいかわからず、言葉に詰まった。

「いいから、早く掃除して。点棒もきちんと拭くのよ。」

となおは態度を変えて、厳しく香奈に言った。そうなおに言われて香奈はあわてて卓掃に戻った。

（ものには限度があるわよ。）

なおは香奈の駄目っぷりにそう思い、キョウカの方を見た。キョウカは逆に香奈が駄目なままで終わらせる気は無かった。

香奈をメンバーとして雇ってる以上、香奈にそれなりに仕事が出るように仕込むつもりだった。

別にメンバーとはいえ記帳などの難しい仕事はさせるつもりはないから、キョウカの計算では香奈でもメンバーは出来るはずだった。

第35話 プロになる動機

キョウカはメンバーの人手不足を補うために香奈を使おうと思っていたから、香奈には全部の仕事が出来なくても、ある程度は出来るように成ることを願っていた。

そんな中、なおがキョウカの傍に来て心配そうに

「ねえ、あの子このまま続くかしら？」

とキョウカに聞いてきた。その問いにキョウカは

「続くわよ。あの子は芯が強いもの。他の子達とは違って純粋な気持ちでプロを目指してるもの。」

と真剣な表情で語った。ただその純粋な気持ちにキョウカにしてみれば不純な気持ちだから、気分的には受け入れられなかった。

しかし、香奈の純粋な気持ちの中身をまったく知らないなおは、そのことで香奈のことを気に入る、香奈を本気で応援したくなった。

何故なら、麻雀プロを目指す女の子のほとんどすべてがタレント感覚でプロの世界に入って来た人ばかりで、なおはそのことを少し不満に思っていた。

ただ現実的に競技プロとして活動する姿よりも、タレントのように各雀荘にゲストとしてやってくる姿ばかりを女の子達は見ているから、憧れる動機はどうしてもタレント的な活動になっても仕方なかった。

それになお自身、他の雀荘にゲストとして呼ばれ、タレントのように振る舞ってるのだから、この件に付いて彼女達に強く言うことは出来なかった。

ましてキョウカにいたっては本当のタレント活動をしているのだから、彼女達のタレント志望熱を冷ます事など出来るわけ無かった。

第36話 代走

やっと香奈は卓掃が終わった。その間に店の中は目まぐるしく変わり、キョウカ迄が卓に付いていた。

「小林さん、このお客さんにコーラを持ってきて！」

卓に居て手の離せないキョウカはそう香奈に命令した。しかし、香奈はドリンクのことをまったく知らないから、何もわからずただ戸惑うだけだった。

その香奈の姿を見て、すぐにキョウカも頼むだけ無駄だと気付き

「もう！小林さん、いいからここ代走入って！」

と言ってあわてて命令を変更した。

香奈は今度は代走の意味がわからず、キョウカに言われるまま席に座ったが、戸惑ったまま何も出来なかった。

「普通に打てばいいよ。」

同卓していた客がそう香奈にやさしく教えた。

「あ、はい。」

そう香奈は返事をして改めて手牌を見た。

「ほら、自摸番だから。」

再度、同卓している客に教わり、あわてて香奈は手を伸ばし、山から一枚自摸った。

キョウカは香奈をメンバーとして使おうとした事を後悔しながら、グラスに客に頼まれた飲料を注ぎこんだ。

そして注ぎ終わるとすぐに注文した客のサイドテーブルに置いて、卓に戻るうとした。

途中、香奈に任せて自分はフリーな状態にした方が都合がいいのではと考えたが、香奈に代走をさせるのはお客さんに迷惑だと感じ、その考えをあきらめた。

「小林さん、もういいわよ。」

キョウカはそう言って香奈に交代を迫った。香奈は打ち続けたかったが、仕方なくキョウカと交代した。

第37話 疎外感

卓を離れ、立ち番になった香奈は打たせてもらえなかったことがショックで、貝のようになって落ち込んでいた。

そんな時に、新たにお客さんが来店したけど、香奈はいらっしゃいませと言わず、ただ黙ったままだった。

「いらっしやいませ！」

キョウカと他のメンバー達は来店したお客さんにそう挨拶した。しかし、香奈はそれでも黙ったままだった。

「なお、そっち入れそう？」

「南2局です。」

キョウカとなおがお客さんを案内出来るかとやり取りをする。香奈は当然そのやり取りの意味が判らないから二人のやりとりを軽く聞き流していた。

香奈は接客業をまったくわかってなく、香奈自身が接客をする立場なことを露一つ理解していなかった。ただわかっているのは、研修の時とはまったく違うということだけだった。

香奈は働きたくてここに来たわけでは無い。プロになりたくてここに来たのである。だから研修の時と空気が違うから、香奈は今、どんな場所に居るかもわからず、不安で苦しくなった。

本来ならここで香奈は逃げて帰っていただろう。高校の時は、まわりの雰囲気についていけず、登校拒否になって中退したくらいである。

だけど香奈はプロになりたいという気持ちが強かったから、苦しくても我慢して、この場に踏み留まることが出来た。

来店したお客さんはキョウカの後に卓に入った。

（また打たせてもらえない。）

香奈はそう思い悲しくなってきた。

第38話 立ち番（前書き）

ここで解説しています。

小説*解説ブログ：<http://aburemon.coccolog-nifty.com/>

第38話 立ち番

キヨウカは、来店したお客さんを今の場所に座らせると、すぐにお預かりを客から貰い、籠を作った。

そして、客に籠を渡すとすぐにドリンクの注文を聞いて、頼まれたドリンクをグラスに注ぎ込んで、その客のサイドテーブルに置いた。その間、香奈は何もわからずただ立っているだけだった。キヨウカはもう香奈は当てにしていなかったから、完全に香奈を無視してメニュー業務を進めた。

一連の仕事を終えたキヨウカは、すぐにカウンターに戻り、ノートにゲーム代の記帳をし始めた。

そんなキヨウカに香奈は恐る恐ると

「わ、私は、また麻雀をすることは出来ないのですか？」

と聞いた。その問いにキヨウカは

「あんだ、負けたら自腹よ！お客さんもメンバーも負けたら、全部自分出払うの。さっきの五千円もラスだけなら3回持たないわよ！」

とこの忙しい時にと迷惑そうに怒った。いつもならやめたくならないように、ある程度は怒りを自制するのだが、今回はやめてもいいからと、キヨウカは投げ遣りに香奈を怒った。

そして、香奈はここで金を賭けて麻雀をしてるとはまったくわかつ

てなかった。だから金が減る理由はまったく理解していなかった。

しかし、お客さんという言葉から、ここでは麻雀すると参加料を払わなければならない仕組みなんだと、少しは判りだした。

（おじさまと打つ時もお金を払わないといけないんだ！）

そう思うと、香奈は急に打つことをあきらめた。

第39話 雀荘事情

香奈がおとなしくなったので、キョウカは香奈を無視して雀荘の業務に集中することにした。

とりあえず香奈は、今は経済的に余裕が無く、この場で麻雀を打つことをあきらめた。

何故なら、香奈は働いていないから、収入は親からの小遣いしかなかった。そこから自分の趣味とプロ団体の会費（麻雀プロは給料を貰えるところか、逆に払ってる）

を払ってるから、雀荘なんかで遊ぶ余裕などまったく無かった。

（おじ様と麻雀をする時の為に残しとかないと。）

そう思い、香奈はおとなしく打つのをあきらめた。

そうこうしてるうちに、なおの方も卓が割れ、残ったお客さんを他のメンバーが入ってる卓に案内することにした。

「小林さん、卓掃して。」

ヨーカが帳面を付けながら、香奈にそう命令した。香奈は言われるまま、なおの居た卓の掃除を始めた。

卓から戻ってきたなおは、香奈の加入で少し安心していた。なぜならメンバーが増えればなおは休みやすいし、他の雀荘に行きやすくなるから。

東京は雀荘が多過ぎてメンバーが慢性的に不足していた。ゆえになおはなかなか休みが取りずらく、月三日取れればいい方だった。

なおは毎日ここサンフラワーに出勤してる訳ではなく、飛び飛びだが他の雀荘にも出勤していた。

慢性的な人手不足が、なおのように仕事が出来て、客を呼べる女子プロを引っぱりだこにしていた。

逆にキョウカは自身の雀荘の人手不足で、他の雀荘にゲストで行くのが、難しい状態だった。

第40話 願い

メンバーの手が空いてきたから、キョウカは香奈に

「小林さん、もう帰っていいわよ。」

と声を掛けた。それを聞いて香奈は

「あ、はい。」

と返事をした。わからないことだらけで、いろいろ質問したかった香奈だが、人見知りが激しい性格が災いして、何も聞けなかった。

そして、香奈はこれ以上雀荘に居ても意味が無いから、そのまま帰りだした。

香奈が出て行った後、なおはキョウカに

「あの子、やっぱり駄目？」

と聞いた。その問いにキョウカは

「あれじゃ接客無理よ。かといって掃除だけで雇う訳にはいかないし。」

と嘆きながら答えた。なおもそれじゃ仕方ないとあきらめた。

雀荘を出て、香奈は考え事をしながら家に向かった。

（おじさまも雀荘で働いているのだろうか？）

香奈はおじさまも雀荘で、ドリンクを出したり、卓掃をしているのか、すごく気になった。そして、今すぐ確かめたいという衝動に駆り立てられた。

しかし、香奈はすぐに確かめることをあきらめた。なぜなら香奈は他の雀荘の場所を知らなかった。

知ってるのは、プロテストと研修の場所として使われた雀荘だけで、そこには若いメンバーしか居なかったから、『おじさま』らしき人物は居ないように思えた。

（おじさまが雀荘で働いてるなら、私も働きたい！）

香奈はそう強く願い、まだ見ぬおじさまへの憧れを胸に秘めながら、帰り道を急ぎ足で歩いた。おじさまのHPに早くアクセスしたいから。

第41話 落ち込む香奈

家に着くと、香奈はすぐに自分の部屋に入り、パソコンを起動した。目的はおじさまの運営するHP『希望の丘』にアクセスすることである。

ディスプレイに希望の丘が現れると、香奈は心臓がドキドキした。いつもは黙って見ることにしか出来ない香奈だったが、今回は質問をする意欲があつた。

しかし、いざとなると香奈は緊張し、何も質問が思いつかなかった。そして、無理矢理質問するように

おじさまは卓掃をしますか？

と唐突に入力した。あまりにも中身が無かったがこれしか思いつかなかった。

とりあえず何か質問を書くことが出来たので、香奈は名前も入力して、何も考えずに送信した。

ただ、おじさまに質問をするという目的を達成し、落ち着きだすと、書いた質問があまりにもひどく失礼だと気付いた。

おじさまが雀荘で働いてるなら、卓掃するのは当たり前の話である。それをしてるかしてないかの質問だから、香奈でも聞く方がおかしいと気付いた。

香奈はあわてて質問を削除しようとしたが、削除できなかった。それであまりの恥ずかしさに、ショックでパソコンの電源を切つてし

まった。

香奈はショックでふさぎ込んだ。ネット上とはいえ、香奈は自分が晒し者扱いされてると思うと、心が苦しくなった。

そんな状態だから、香奈は食事もあり取らず、毎日の日課である麻雀の練習も休み、部屋に閉じ籠もって寝込んだ。

こうして香奈は落ち込んだまま布団の中で眠った。

第42話 返信

次の日の朝、昨日に比べると少しは落ち着いた香奈は、普通に食事をした後、パソコンの前に座り希望の丘のページを開いた。

失礼な書き込みと過剰に反応してしまったが、おじさまはやさしい人だから、こんなことでは怒らないと、香奈は自分に言い聞かせて質問した場所を探した。

その質問におじさまが返信していて、香奈はそれに気付いて緊張した。

返信はこう書かれていた。

私は卓掃をします。卓も牌も麻雀プロとして大事な物です。私は卓と牌があるから、プロでいられるという気持ちで卓掃してますよ。

香奈さんも私の分まで卓掃してあげてください。

それを読んで香奈はうれしくて涙が出てきた。

（おじさま、私も気持ちを込めて卓掃します。）

と香奈は心に誓った。

香奈はそう誓うと、とある場所を目指して家を出た。そのとある場所とはサンフラワーである。

一方、キヨウカは早く起きたから、二度寝しようかと思っていた。

しかし、店のことが気になって、二度寝のことをSNSに笑いながら日記に書き記し、新宿に向かった。

キヨウカは眠たい目をこすりながら、サンフラワーのことを考えていた。

集客を増やすためにはまた新しい女子プロを入れなければならない。

ただのゲストなら居るだけで十分だが、メンバーとして雇うつもりだから、しっかりした者で無いと雇う気にはならない。キヨウカは青田買い出来る立場で、ある女の子を誘うつもりだった。

第43話 キョウカの雀荘の事情

「おはようございます。」

キョウカは店に入るとまず店内全体に挨拶した。そしてメンバー達と挨拶を交わし、卓上のお客さん達にも挨拶した。

そして、カウンターに入り、店長として店の売り上げを見た。相変わらず厳しい数字だった。

キョウカの計算では、当初は自身が運営すること、新宿で低レートで女性が入りやすい雀荘として、女性客の確保を見込んでいた。

しかし、その女性達が客として来ないと逆に低レートがネックになって、集客が落ちることになった。さらに大手雀荘も低レート雀荘を同じ新宿で始めるなど、状況は厳しくなりだした。

それでキョウカは少しでも客を確保しようと、人気女子プロを使って集客を始めることにした。

その甲斐あって、集客はある程度増えだした。

しかし、他の雀荘も人気女子プロの活用を始めて、キョウカの店はまた苦戦しだした。

しかも、キョウカがそれなりに人気女子プロを確保しても、プロ団体側が人数集めの為、採用基準を大幅に緩和して、女子プロを乱造したため（このプロ団体の愚虚が、香奈がプロになる奇蹟を作った）、

人気女子プロの数が増え、女子プロの集客効率が落ちてしまった。

それでも女子プロには集客力があるから、東京の雀荘数の過剰状態の維持（メンバー不足を乱造された女子プロ達が埋める）を継続する由々しき問題を生じてる。

こんな感じで、キョウカにしてみれば、濡れ手に粟の雀荘経営のつもりが、高いテナント料と人件費の掛かる、面倒な商売になり、頭の痛い話だった。

第44話 熱意

キョウカが雀荘の稼ぎの悪さに頭を痛めてる頃に、香奈がサンフラワールのドアを開けた。

「いらつしゃいませ。」

ドアの前に居る香奈に対して、メンバー達がそう挨拶する。キョウカは誰が来たのかと、あわてて入り口の方を見て驚いた。

（何しに来たの？）

そう思いながらキョウカは、香奈を無言で迎えた。香奈は相変わらず何かに怯えるように、キョウカに向かって

「わ、私、、卓掃したいです。」

と弱々しく言った。

（はっ？）

キョウカは突然のことで、香奈が何を言いたいのかわからなかった。しかし香奈は、戸惑うキョウカを見て、怯えてそれ以上語ろうとせず、キョウカの目を見て震えていた。

「なお、この子に仕事教えてやって！」

キョウカはあまりにも駄目過ぎる香奈に呆れながらも、なおに香奈

の面倒を見させることにした。

いつもなら、呆れて香奈を追い返すところだが、今回は、事務局長の斎藤の言った『努力の子』が頭に浮かび、無意識に香奈のやる気を認めていた。

「小林さん、こっちに来て。」

なおは香奈が入り口のそば居ると、後から来たお客さんの邪魔になると思い、やさしくカウンターのそばに呼び寄せた。

香奈は不安ながらも、なおの傍に行った。その香奈をなおは温かく迎え

「メンバーは卓掃だけじゃ駄目だから、これからお姉さんが教えてあげる。」

とやさしく語った。

香奈は卓掃だけでよかったが、メンバー＝プロとの気持ちもあったから、なおの言うことを素直に受け入れた。

第44話 熱意（後書き）

ここで小説の解説をしています。

小説*解説ブログ

<http://aburemon.cocolog-nifty.com/>

第45話 香奈の気持ち

「私、お姉さんじゃ駄目なの？」

この突然のなおの質問に、香奈は驚き戸惑い、何も言えなかった。

「あなたプロなんだから、ちゃんと受け答えをはっきりしなさいよ！」

そんな戸惑うだけの香奈に、なおがきつく言った。さらに

「私達はお人形じゃないのだから、挨拶、返事をきちんとしないと駄目ですよ。」

となおは香奈を叱った。そうなおに言われ、香奈は

「は、はい。」

と言われるまま返事をした。

あまりにも頼りない香奈に呆れながら

「ねえ、何で卓掃したいの？」

となおは香奈に問うた。香奈はなおにそう聞かれ

「お、おじさまが、卓と牌を大切にするように言われまして、おじさまはま、麻雀のプロだから、卓掃をきちんとするそうです。」

と香奈はおどおどしながら答えた。

（また、おじさま）

キョウカは二人の会話を横耳で聞きながらそう呆れた。

「ねえ、そのおじさまって誰？」

なおが続けて香奈に質問をする。その質問に香奈は戸惑いながら

「わ、わかりません。だけど、おじさまは太陽です。私達を照らしてくれる太陽です。」

と香奈は答えた。その香奈の答えは、なおはともかくキョウカも理解出来なかった。続けて香奈は

「私はその太陽の子供として、頑張って生きてます。」

と言った。この香奈のおじさまへの気持ちは、不幸な立場から救ってくれるおじさまへの感謝の気持ちだから、

幸せな生活を送るなおとキョウカには、到底理解出来ない気持ちだった。

第46話 風と太陽

この香奈の答えに、今度はなおが戸惑い、香奈に対して何も言えなかった。

なおは社会経験が豊富とはいえ、香奈の様なタイプの相手をした経験が無く、どう香奈に接すればいいかわからなかった。

「小林さん、おじさまにどう言われてるかわからないけど、ここは私の店だから私の指示に従ってもらわよ。」

とキヨウ力は二人に割って入る様にして、香奈にきつく言った。

そうキヨウ力にきつく言われても、香奈はキヨウ力の指示よりも、おじさまの言うことを聞きたかったから、即座に断りたかった。

しかし、香奈が卓掃をさせてもらえる雀荘はここしかなく、香奈は黙ってキヨウ力の指示を受け入れるしかなかった。

「ちょっと、返事しなさいよ。さっきなおに言われたばかりでしょ！」

キヨウ力の言うことを仕方なく受け入れ、黙っている香奈にキヨウ力はさらにきつく言った。

「は、はい。」

あわてて香奈が弱々しく返事した。

キョウカは香奈を受け入れることにしたけど、あまりにも香奈にメ
ンバーとしての見込みが無いから、もうやる気が失せていた。

逆に香奈にしてみれば、嫌になって逃げた高校時代を思い出し、今
すぐここから逃げたくなつた。

そんな感じで萎縮している香奈になおは温かく

「小林さん、楽しくやりましょ。あなたが暗い顔してたらおじさま
も暗くなつて太陽じゃ無くなるでしょ。」

とやさしく香奈に語り掛けた。そして目でキョウカにあまりきつく
言ったら駄目だと合図した。

第47話 雀

キョウカはなおに牽制されて、さすがに香奈を怒る事を自制した。

今まで何人もキョウカの厳しさに嫌気が差して、やめていったメンバーのことを考えれば、なおの行為は適切だった。

ただキョウカも好きで厳しくしてるわけではなかった。サンフラワ―のオーナーとして、店を潰すわけにはいけないから、どうしても従業員に対して厳しくする必要があった。

だけど今回はなおに牽制されて、改めて香奈をなおにすべてまかせることにして、冷静に対処することにした。

元々キョウカは、軒先に雀の為に小皿を用意し、米粒を乗せて、食べさせようとする女性である。今回も香奈をメンバーとして雇うのではなく、保護する気持ちで接することにし、温かく見守ることにした。

「これを押すとジュースが出るから、これをコップに注いでお客さんに渡すの。」

なおが香奈にドリンクの作り方を丁寧に教えていた。今のところ、仕事はお客さんにドリンクを提供するぐらいなものだから、あらかじめ香奈に教えていたのだった。

「コーラくれ！」

卓上の客から注文が来た。

「香奈ちゃん、ほら、コーラ用意して。」

なおがそう香奈に指示をした。香奈はあわててグラスを取り、コーラの場所にグラスを持ってきて、グラスにコーラを注いだ。

やり慣れていない香奈は、ドリンクバーからグラスを離すタイミングが遅れて、コーラがグラスいっぱいになってしまった。

そして香奈はいっぱいになったままで、グラスをコーラを注文したお客さんの元に行った。

第48話 特別サービス

コーラがグラスいっぱいのまま、香奈は何も気にしないで、コーラを頼んだお客さんの元に向かった。

コーラを持ってお客さんの元に来たのはいいが、香奈は渡し方がわからなかった。

ドリンクは普通にサイドテーブルに置けばいいのだが、香奈はそれがわからず、立ち止まって不安そうに

「コ、コーラを、持ってきました。」

と弱々しく香奈は、お客さんに向かって言った。そう香奈に言われて、コーラを頼んだお客さんはあわてて香奈を見た。

香奈が持ってきたグラスには、コーラはあふれそうなくらいいっぱいだった。お客さんは、少し驚き戸惑った。しかし、おどおどした香奈に文句を言うことが出来ず、苦笑いしながら

「ありがと。そこに置いて。」

と香奈に頼んだ。

「は、はい。」

香奈はお客さんに怒られなくて、ほっとした気持ちでコーラの入ったグラスをサイドテーブルに置き、逃げ帰るようにカウンターに戻った。

同卓者達もコーラの異変に気付き、対面が

「山下さん、そんなにいっぱい飲むのですか？」

と客の山下をからかった。山下も苦笑いしながら

「おう、俺だけ特別サービスだから。」

と笑って言い返した。その二人のやりとりを見てなおが

「新人いじめたら、私、あの子のおねえさんだから許さないわよ！」

と笑いながら、香奈のミスをうまくフォローしようとした。逆にキョウカは別に、いちいち目くじら立てる程でもないから、黙って香奈のミスを静観していた。

第49話 久しぶりの幸せ

香奈は、自分の対応に何か問題があったのかと思いながら、なおとお客さんとのやり取りを不安気に見ていた。

「お姉さんじゃなくて母親じゃないの？」

と笑いながらお客さんがなおをからかった（実際になおと香奈は20くらい歳が離れている）。

お客さんにそう言われてなおは

「失礼ね。私の方が年下なんだから！」

と笑顔で反論した。それには店内のみんなが爆笑した。キョウカもくすくす笑っている。香奈もサンフラワーに来て初めて笑った。

「もう香奈ちゃんまで笑わないでよ。」

なおが苦笑いしながら香奈に文句を言った。このなおのアドリブで、店内はなごやかな雰囲気になり、香奈は何年か振りに幸せな気分を味わえた。

この後、卓が割れなくて、香奈はお目当ての卓掃が出来なかった。しかし、店のなごやかな雰囲気が、そのことを忘れさせるほど、香奈に幸せな一時を与えた。

「小林さん、もう帰っていいわよ。」

ヨーカは香奈に勤務時間の終わりを教えた。香奈は仕事という感覚は無く、もうこんな時間だから帰らないと思ひ、帰ることにした。ただ、帰るときの挨拶がわからず、戸惑いながら

「さ、さ、さようなら。」

と言った。それを聞いてキョウカが

「もう、お先に失礼しますでしょ！」

と香奈を怒鳴り付けた。怯える香奈はあわてて

「お、お先に失礼します。」

と言い直した。

「ごくりうさま。」

とキョウカが香奈に挨拶し、なおは

「おつかれ、明日も頑張るのよ。」

と挨拶した。

「あ、ありがとうございます。」

そう言つて香奈は喜びながら店を出た。

（明日もここに来たい。）

香奈は明日もサンフラワーに来ることにした。

第50話 昨日と違う風景

次の日、香奈はうれしそうに家を出た。憧れのおじさまに会えるわけでもないが、サンフラワーの温かい雰囲気が好きで、またその中に居れると思うとうれしかった。

新宿に着いて、サンフラワーのあるビルに向かう。交差点を歩きながら、香奈はすれ違う人達に恐怖感をあまり感じなくなっていた。

香奈の対人恐怖症は精神的なものだから、気持ちが高揚していれば必然的に恐怖感が無くなる。

そうして、知らず知らずのうちに香奈は社会復帰を始めていた。

ビルに辿り着き、エレベーターの到着を待つ。そしてエレベーターに乗って3階のボタンを押した。

すぐにエレベーターが3階に到着し、香奈はエレベーターを降りて、サンフラワーに向かった。

廊下の途中にあるキョウカのポスターは、前まで香奈にとっては恐怖の対象だった。何故なら、キョウカ自身が怖いから、香奈にはポスターでも怖く見えた。

それが今回は、ポスターが怖いどころか、ヨーカの写真が天使のように見えた。それくらい香奈の心が充実していた。

サンフラワーのドアを開け、香奈はいつもの不安気な気持ちで

「おはようございます。」

と挨拶した。

香奈が来たのでメンバー達も香奈に挨拶した。

幸せな気分で来店した香奈だが、昨日とは打って変わっての殺風景な店の雰囲気にも飲まれ、途端に借りてきた猫のようになった。

不安になり、香奈はあわててなおを探したが、店にはなおの姿はなかった。

第51話 別の雀荘

なおが居ないと思った香奈は、激しく不安になり、途端にいつもの状態に戻った。

（なおさん、トイレかな。）

香奈はなおがトイレだと思い、なおがトイレから出てくるのを期待して待った。

しかし、なおは出勤していないから、いつまで経ってもなおがトイレから出てくるわけなかった。

その香奈が、トイレを見ながらこちない振る舞いをするのを見てキョウカは、香奈がトイレに行きたいのかと思い、無言でトイレの様子を見に行った。

トイレには誰も居なかった。キョウカは呆れて

「小林さん、トイレに誰も居ないから、トイレ行きたいなら早く行きなさい。」

と香奈を叱った。そうキョウカに言われて香奈は

「あ、な、・・・、...。」

と言った。

「何が言いたい全然わからないわよ！」

とうまく答えられない香奈にキョウカがヒステリックに怒った。そうキョウカにきつく言われ香奈は

「な、なおさんがトイレに居ると思って・・・。」

と最後が言葉にならないように、震えながら答えた。

「はあ、なおが居るわけ無いでしょ！なおは今日は他の雀荘よ。」

とキョウカは香奈に呆れながら、なおが今日は休みなことを教えた。

（他の雀荘・・・）

香奈は他の雀荘と聞いて、急に気持ちが高揚した。なおが行った雀荘におじさまが居るかも知れないと、激しく期待しキョウカに

「わ、私も他の雀荘に行きたいです。」

と訴えた。しかし、その訴えがさらにキョウカを怒らせることになった。

第52話 キヨウカの勘違い

「あんだ、他の雀荘で勤まると思ってるの！？ここだから使ってもらえてるだけで、他の雀荘ならとくにクビよ！！」

とキヨウカは香奈の訴えに頭に血が上ったように香奈を怒鳴り付けた。

キヨウカにしてみれば、香奈の面倒を見てあげてるのに、他の雀荘に行きたいなんて言われて、恩を仇で返された気分だった。

そんなキヨウカの気持ちを香奈はまったくわからないが、怒るヨウカの前ではただひたすら

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

と謝り続けた。

香奈は何も悪いことをしてないと思っていたが、難を逃れるには謝るしかない、今までの人生で悟っていた為、何も反論せずにただひたすら謝った。

お客さん達も、何で香奈が怒られるのかまったく理由がわからなかったが、鬼の様なキヨウカが怖くて、誰も何も言えなかった。

キヨウカはもう香奈の面倒を見たくないと、香奈をクビにしようと考えたが、そこまで怒るには、あまりにも香奈は弱過ぎた。

それでさすがに香奈をこれ以上追い詰められなくて、キヨウカは怒

るのをやめた。

香奈はキョウカが何も言わなくなったから、少しは落ち着き、そして怒られなくなってほっとした。

キョウカはまだ腹の虫が治まらなかったが、改めて冷静に考えて見ると、香奈はサンフラワーが嫌なのではなく、ただ単におじさまのところに行きたいのだと気付いた。

あまりにも単純な香奈らしい思考である。なおがゲストに行った雀荘におじさまが働いてるとは限らない、それでも香奈なら行こうとするだろうとキョウカは悟った。

第53話 牌譜用紙

香奈はキョウカに激しく怒られて、かなり落ち込んでしまった。いつもならもう逃げ出していただろう。

ただ今回は、昨日の幸せな一時が期待となって、香奈をサンフラワ―に踏み留まらせていた。

そんな香奈を見ながらキョウカは、香奈を怒ったのは間違いだと思いつつも、他の雀荘に行きたいと言った香奈だって悪いと、心の中で自己弁護していた。そして香奈に

「あんた、なおの居る雀荘におじさまが居ると思ったのでしょ？仮に居ても、今のあなたじゃおじさまの足手纏いになるだけよ。」

と香奈をわけもわからず怒鳴り付けた償いの意味を込めて、香奈に忠告した。

（足手纏い！）

香奈はキョウカに足手纏いと言われて、激しく傷ついた。しかし、それは事実であり、香奈も否定はしなかった。

香奈はショックで黙り込んだまま、硬直しながら立っていた。そんな香奈を見てキョウカは

「ここで修業させてあげるから、元気出なさいよ！この店だっておじさまが来るかもしれないから、今のうちにレベルアップしときなさい！」

と香奈を元気付けようと励ました。それを聞いて香奈は、エンジンが掛かったように動きだした。

香奈は、おじさまが客としてサンフラワーに來たときに備えて、メソバーとしててきぱきと動かなければならない。そう思い体を動かそうとするが、どう動いていいかわからなかった。

「ほら、これ見て勉強しなさい。」

そう言ってキヨウカが香奈に渡したのは一枚の牌譜用紙だった。

第54話 頭が痛いキヨウカ

香奈は、キヨウカからもらった牌譜用紙をじっくり見たが、用紙は記号だらけで、香奈はまったく意味がわからなかった。

「誰がどんな風に打ったかこんな感じで記録するのよ。万子は漢字の……。」

とキヨウカは香奈にきめ細かく説明した。しかし、香奈はヨーカの説明に付いていけず、ほとんど聞き流していた。一通り説明を終えるとヨーカは

「あんだ、おじさまがどんな麻雀を打つか記録したいでしょ。これあげるから、次の研修まで勉強してきなさい。」

と未記入の牌譜用紙を渡した。香奈は牌譜用紙を貰うと、あわてふためき採譜の練習をしようとした。香奈は、おじさまの採譜を早く出来るようになるうと、あわてていた。

しかし、採譜の仕方を教わってないから、香奈はお客さんが打っている周りを、ただ紙を持ってあわてふためいているだけだった。

「小林さん、仕事中でしょ！採譜の練習は家に帰ってからやりなさい。」

とキヨウカは香奈を叱り付けた。香奈の振る舞いはさすがにお客さんに迷惑だからキヨウカはあわてて注意した。

キヨウカに叱られて、香奈はおとなしくなり、普通の立ち番に戻っ

た。こんな香奈をキョウカは、これからずっと教育しなければなら
ないと思うと頭が痛くなるのだった。

その頃、桜井里香は大阪に旅打ちに来ていた。難波の雀荘でプロの
強さを見せてあげると息巻いていた。

「この二人は特別だから。」

と店長が里香に教えた。里香は目の前の男女二人を見て

（大阪の雀ゴロ達、今日私と打ったこと後悔させてあげる。）

と一人気合いを入れていた。

第55話 謎の男女

里香は、目の前の男女二人がイカサマをしないか、必死にチェックした。そして二人の会話にも“通し”サインが無いかチェックした。
(あんたら二人組んでも無駄よ！通しなんか使っても私が見破ってあげる。)

と里香は、男女二人がイカサマをすると決め付け、それを見破るつもりで息巻いていた。

数時間後

「あんたら二人組んででしょ！！私達がリーチを掛けたらベタ降りして、あんたらがリーチしたら、わざと振込もうと危険牌切りまくるって汚いわよ。」

と里香は立ち上がり、最初と打って変わって二人の行為をなじった。

「あらあら、私達は道を作ろうと危ない牌を切ってあげただけよ。」

と女は里香をなだめた。

「よし、俺が抜けるから、美央、一人で相手してやれ。」

と男は潔く席を立ち、女に勝負を託した。

「ん、どうした？打たないのか？」

男は座ろつとしない里香に聞いた。里香は悔しそうに
「もうお金無いわよ。」

と答えた。

「ほれっ。」

男は財布から10万円程抜いて卓上にポンと置いた。

「これで好きなだけ打てばいい。」

そう言つて、男は里香に10万円を渡した。

「打つてあげるわよ！」

里香は卓上の10万円を鷲掴みし、自分の籠に入れた。

「おーい、ここワン欠け。」

男はメンバーにそう呼び掛け、卓には男の代わりにメンバーが入ることになった。

（1対1なら負けないわよ。）

里香はそう思い、対面の美央をにらんだ。

第56話 伝説の二人

美央は、里香のことを無視するかのように、卓上に集中していた。

（何よこの女、さつきと態度が違うじゃない。）

と里香は動揺し、最初から気負けしていた。

いざ二人の戦いが始まると、自分の手だけに集中する里香と、それに対して各自の第一打から色の偏りを探ろうとする美央では、レベル的に端から勝敗が決まっていた。

数時間後、里香は男に貰った金を半分にして、気落ちしていた。

男は美央に声を掛け、二人は帰ることにした。

「待って！」

里香が二人に声を掛ける。続けて

「お金は後で返しますから、連絡先を教えてください。」

と言った。

「ん、金ならくれてやったからいらんよ。」

と男が里香に言い返した。しかし、里香は

「貰うわけにはいきません。必ず働いて返しますから。」

と男に訴えた。

「じゃ、出世払いでいいや。俺は南 良一。」

「私は前園美央。」

と二人は名前を告げて里香のもとを去った。

（あ、あの二人・・・）

里香は二人がどんな人物かわかり、茫然とその場に立ち尽くした。

その頃、香奈は家に帰り、キョウカから貰った牌譜用紙を必死に眺めていた。

記入してある方は「キョウカ」の打ち方が記入してあるみたいで、名前が水野キョウカになっていた。

香奈は牌を表す記号を、キョウカから教わったことをうる覚えながらも、解読していた。

しかし、さすがに香奈には全部の記号がわからず、この日は練習することをおきらめた。

第57話 キョウカの朝

次の日の朝、キョウカはいつもより疲れていたのか、ベッドから出るのが、普段より時間が掛かった。

こんな時はだらけて昼過ぎに出勤のヨーカだけど、香奈がまた朝から来るような気がしていたから、頑張って朝からサンフラワーに出ることにした。

歩きながらヨーカは、仕事のような感覚で、携帯でSNSには明るく振る舞う日記を書いていた。しかし、本当は疲れていて、朝から頑張る気などなかった。

そして、ベッドから出るのが遅かったから、いつもより通勤時間は遅く、今からサンフラワーに行くと、まるで遅刻したようにみえる時間帯に到着だった。

（本当は休んでもいいけど、私が休んだら店的に困るから、出てあげるのだから感謝して欲しいわ。）

とキョウカは、心の中で自己を美化しながら、サンフラワーに向かって歩いていった。

そんな時に、キョウカの携帯が鳴った。キョウカはサンフラワーからかと思っあわてて、携帯を持って画面を見た。

電話はサンフラワーからではなく、新たにサンフラワーで働くことになった女子プロからだった。

「はい、水野です。」

「え、ほんと!」

「そう、明日待ってるから。」

とキョウカは電話を切った。やっとサンフラワーを補強できると思い、キョウカは先程からの疲れが無くなったかのように元気になった。

しかし、サンフラワーにはキョウカの疲れの元である香奈が、牌譜に関して色々聞きたくて、手ぐすね引いて待ち構えていた。

第58話 明と暗

香奈は、サンフラワーに昨日よりも早く出勤していた。

早く来た理由は、メンバーの仕事が好きなのでもなく、キョウカに質問したいからではなく、おじさまがサンフラワーに来ているかも知れないという期待からだった。

おじさまがサンフラワーに来るとは限らないのに、キョウカの「おじさまがサンフラワーに来た時・・・」での発言で、香奈はおじさまがこの雀荘に来ると勝手に思い込んで期待していた。

サンフラワーに到着してドアを開けると、なおはともかくキョウカも居なかった。居るのは男のメンバー二人だった。

香奈は不安で萎縮して、その二人に挨拶が出来なかった。二人も香奈には関わらないようにしたから、三人の間には何も会話がなかった。

香奈は萎縮したままカウンターの前に立ってキョウカを待った。

待つ間、店内を見回したが、おじさまらしき人物は居なかった。メンバーの仕事は他の二人がやるから、香奈はカウンターの前に只立つただけだった。

キョウカは遅れていたにも関わらずあせらなかった。逆に余裕を持って歩いていた。

そしてビルに到着し、エレベーターに乗る。キョウカは強力な助っ

人が、サンフラワーに来ることになったから、上機嫌のまま店のドアを開いた。

「おはようございます。」

キヨウカは上機嫌にあいさつした。

「おはようございます。」

メンバー二人がキヨウカに挨拶する。キヨウカはカウンターを見ると、香奈が不安そうな感じで立っていた。

香奈を見て、キヨウカは上機嫌な気持ちで吹っ飛んだ。

第59話 やる気

香奈は、キョウカを見ると何かを聞いたそうな態度で体を震わせた。しかし、その態度がキョウカをますます不快にさせた。

（やる気の無い子に教える気なんか無いわよ！）

キョウカは、香奈が昨日あげた牌譜用紙を今持つてることが不快だった。

何故なら、メンバーとして使ってあげてるのに、メンバー業よりおじさまの方が大事だと香奈が態度で示しているからである。

しかも、サンフラワーに入ってくれる助っ人の方は、明日から働きますと言ってくれるほどやる気があるのに、香奈にはやる気がまったくみえないから余計腹が立った。

本来なら香奈はこれだけでクビだった。しかし、キョウカは香奈に期待してなかったから、クビに成るまで怒られるどころか、逆にまったく怒られなかった。

「いったい何を聞きたいの？」

キョウカは投げ遣りに香奈に問い質した。香奈はキョウカに怯えながら

「う、これ・・・」

と牌譜に下と書かれてる文字を指した。香奈は書いてある文字がア

ルファベットのTだとわかったが、字の意味がわからないから読むことが出来なかった。

「これ、東南西北の東じゃない！あんたもローマ字でTONと書けるからわかるでしょ。」

と呆れながら香奈を叱り付けた。キヨウカに怒られてグズグズしている香奈に、キヨウカは

「Nは南のNよ。」

と先手を取って答えた。そしてまだ質問がありそうな香奈に向かって

「矢印は自摸切り、他に質問は？」

と逆に問い質した。

第60話 温かい言葉

キヨウカの開き直りのような逆質問に、香奈は怖くて何も言えなかった。キヨウカも香奈の相手などしてられないから

「ほら、質問無いなら仕事に戻りなさい。」

と香奈を追い払うようにまくしたてた。そのキヨウカの威圧感に、香奈は怯えてあわててキヨウカの元を離れた。

（あんたの相手なんかしてる余裕なんか無いのよ！）

キヨウカは心の中で香奈を追い払ったことで少しは不快感を解消していた。逆に香奈は、キヨウカに怒られないようにと怯え、人形のように硬直していた。

「香奈ちゃん、冷茶！」

麻雀を打ってる客の高橋からの注文だった。名指しで呼ばれた香奈は、どうしていいかわからず動けなかった。

「小林さん、高橋さんに茶を持って行って！」

キヨウカが香奈に呆れながら命令した。香奈はあわててグラスを取りに行き、グラスに冷茶を注いだ。

冷茶を注ぎ終わると、香奈は高橋の方に冷茶を持って向かい、高橋のそばで震えながら立ち止まった。

「そこに置いてくれ。」

高橋が香奈に、冷茶を左側のサイドテーブルに置くように指示した。

「は、はい。」

香奈は怯えながら返事をして、冷茶をサイドテーブルに置いた。

「香奈ちゃん、キョウカさんに怒られてもサンフラワーをやめたら駄目だよ。俺、香奈ちゃんが居なかったらさびしいから。」

と高橋は香奈に温かい言葉を掛けた。すると同卓者達までが俺も俺もと香奈に訴えた。

みんな香奈がキョウカに怒られてばかりなのを不憫に思い、香奈を守ろうとしてくれていた。

第61話 反論

そんなお客さん達の応援を、香奈は理解できず、どう対処していいかわからなかった。

「ありがとうって言いなさい！せつかく応援してくれてるのだから感謝しなさいよ！」

お礼も言えずにただ固まる香奈に対して、キヨウカがカウンターから怒鳴り付けた。キヨウカに怒られて、香奈はあわてて

「あ、ありがとうございます。」

と言ってすぐにその場を離れ、定位置のカウンターの前に逃げた。そして先程と変わらない感じで、人形みたいに動かなくなった。

（この子が金を取れるプロになるなんて。）

この人形のような香奈が人気者になるとは、キヨウカはとても理解できなかった。

しかし、キヨウカは集客しなければいけない以上、仕事が出る出来ないを抜きにして香奈を使い続けなければならなかった。

一方、香奈はお客さんからの人気などどうでもよかった。香奈にとって大事なのはおじさまであり、おじさまでない人にはまったく関心が無かった。

それでも香奈はお客さんに呼ばれる限り、メンバーとしての仕事を

こなさなければならず、ただ立って、おじさまが来るのを待つ訳にはいかなかった。

そうして香奈の勤務時間が終了し、香奈はキョウカに呼ばれた。

「小林さん、あんた接客をちゃんとしなきゃ駄目ですよ。おじさまが客として来ていたら失礼ですよ。」

とキョウカは香奈を叱った。しかし香奈は

「お、おじさまはプロですから、わかります。だ、だから大丈夫です。」

と反論した。

第62話 苦悩

その香奈の聞き分けの無い態度にキョウカは激しくいらついたが、
疲れてて香奈を怒る気にならず

「もう、いいわ。おつかれさん。」

と香奈に帰りの挨拶をした。香奈はおどおどしながら

「お先に失礼します。」

と小声で帰る挨拶をした。

香奈が帰った後、キョウカは香奈をどうするか考えた。

香奈がメンバーとして頑張る気なら、大変でも教えがいがあるが、
香奈はメンバーをやりたくてサンフラワーに来てるのではなく、い
つ来るかわからないおじさま目当てである。

ヨーカは香奈の相手をするのがストレスになってきたから、もう
香奈をクビにしようかと思った。

しかし、庭に来た小鳥に、わざと食べやすいように餌を置く、やさ
しいキョウカは香奈に止めを刺すようなことは出来なかった。

一方、香奈は新宿駅に向かいながら悩んでいた。キョウカに怒られ
るのが怖くて、サンフラワーに居るのが苦痛になって来ていた。

おじさまに頑張ってる姿を見せたいと、苦しくつらくても頑張って

きたが、肝心のおじさまがサンフラワーに来てくれない以上、もう心が折れそうだった。

せめてなおが居てくれればと思って淋しく駅に向かって歩いた。

その香奈に切望されているなおは、サンフラワーの状態も香奈の苦しみもわからず、たまの休みをフィットネスクラブで汗を流していた。

そしてSNSにいつものテンションの高さで、汗を流して気持ちよかったと明るいい日記を書いて、二人の苦悩をよそに人生を楽しんでいた。

第63話 里香の加入

次の日の朝、香奈は憂鬱なままサンフラワーに向かった。かつて登校拒否になった時のように、ためらいながら出勤していた。

逆にキョウカは今日から新しく新人が入るので、少しは気を引き締めてサンフラワーに向かっていった。

サンフラワーには香奈の方が先に着いて、エレベーターに乗り3階で降りた。

そして店の前でしょぼんとした感じで、店のドアを開けるのを躊躇っていた。

そんな時にキョウカが出勤してきて店の前でうろついてる香奈を見た。キョウカは呆れながら

「ちょっと、あんた何してるの？」

と香奈を叱った。香奈はあわててキョウカを見て

「お、おはようございます。」

と小声で言った。

「早く入きなさいよ。」

キョウカは怒りながら香奈に命令した。香奈はあわてて店内に入り、また小声で

「おはようございます。」

と言ってカウンターの端に逃げるように移動した。

「おはようございます。」

キヨウカは店内に挨拶し、卓上で打ってるお客さん達にも挨拶した。

香奈はキヨウカに店内に入ることを許されたと思い、ほんの少しだけ安心したが、それでも不安な状態に変わりが無かった。

（まるで私がいじめてるみたいじゃないの。）

キヨウカは香奈が怯えるように、隅で硬直しているのを見て、そう嘆いた。

「おはようございます!」

突然、店のドアを明るく開く人が居た。それを見てヨーカの目が輝いた。桜井里香だった。里香がサンフラワーに新しく入るプロだった。

第64話 対抗心

「桜井リカ、大阪から戻ってまいりました！」

里香は明るくそうヨーカに報告した。香奈は里香がサンフラワーに來たことに驚いたが、里香に話し掛けることが出来ず、里香と目を合わせないようにしていた。

それでも里香は香奈を見つけて

「あんたいつもここで打ってるんだ。」

と香奈に話し掛けた。香奈は里香に返答が出来ず、おどおどして何も言えなかった。

「その子、プロ修業の為ここで働いてるのよ。」

とキョウカが香奈の代わりに答えた。

「へー、そーなんだ。じゃあよろしく。あたし名前をカタカナのリカに変えたから。」

とリカは香奈に挨拶した。香奈はまだ緊張してリカとしゃべれなかった。しかしリカは香奈のことを気にせずに、ヨーカに仕事の説明をしてもらうことにした。

（リカさんも修業に來たんだ。）

香奈はリカも修業でサンフラワーに來たと思い、変な対抗心をリカ

に抱いた。

香奈はリカに負けても、おじさまは香奈を責めたりしないから、その点は香奈も安心していた。

しかし、ただでさえ少ない仕事を奪われたら、香奈はただ立っているだけになり、おじさまから見れば、香奈は努力していない子になる。

香奈はいつおじさまが来るかわからない以上、リカに仕事を譲る余裕などなかった。

そんな中、一つの卓からお客さんが帰ることになり、席が一つ空いた。すぐにリカが点棒を片付け、その場を清掃した。

香奈は仕事があったことに気付かず、リカのやっていることを黙って見ているしかなかった。

第65話 意欲的な香奈

「リカー、そこ本走入って！」

キョウカが空いた席にリカを入れることにした。リカはヨーカに言われるまま

「それではリカ、本走します。」

と言って、リカが明るく同卓者達に振る舞い、卓に本走で入ることになった。

（リカさんは麻雀を打たせてもらえるんだ。）

それを見て香奈はリカがすごくうらやましく感じた。キョウカは帰るお客さんの換金を済ませ、リカの籠を作った。そして

「これをリカに渡してきて。」

キョウカは今作った籠をリカに渡すように香奈に命じた。香奈はキョウカの作った籠を持って、言われるままりカのそばに行った。

香奈は緊張してリカに籠を渡せなかった。ただ立ち止まってリカを見るのがやっとだった。その籠を持ってただ立ち止まる香奈に気付いてリカは

「ありがと、そこに置いて。」

と香奈に言って再び卓に集中しだした。香奈は黙って籠をリカのサ

イドテーブルに置いて、そのまま帰っていった。

香奈は戻った後も、ずっとリカの方を見つめていた。キョウ力はそんな香奈の態度に気付き

（あら、リカに対抗意識を持つてるのね。）

と思い微笑した。香奈はお客さんにドリンクを頼まれると、普段より早く動いて、お客さんにドリンクを渡した。

そんな香奈を見て、キョウ力は香奈がまじめにメンバー業務に取り組みだしたと思い、うれしくなってきた。

しばらくして新しくお客さんが来店したので、リカの席に案内することにして、お客さんをしばらく待たせることにした。

第66話 志願から拒否へ（前書き）

進行が遅いという意見があります。個人的には私生活で働かないと食えない以上、どうしても執筆時間があまり取れません。小説で稼げるなら他のをやめてでも執筆しますけど。そして主人公は普通の女の子じゃないから、どうしても他の子より進行に時間が掛かります。それをわかっていただければと思い、ここに書きました。

第66話 志願から拒否へ

香奈はそのお客さんの元に御用聞きに向かった。しかし、香奈はお客さんに要望を聞くどころか、話し掛けることすら出来ないから、ただ立ち止まったままだった。

「ちよつと香奈！こつちに来なさい。」

キヨウ力はあわてて香奈を呼び戻した。香奈がカウンターに戻るとキヨウ力は

「あんたお客さんの前をうろつろしたら、お客さんの迷惑でしょ！ここに居なさい。」

と香奈の定位置を指差し、香奈に命令した。しかし香奈は

「わ、私も麻雀したいです。」

とキヨウ力に訴えた。それを聞いてキヨウ力は呆れながら

「あんた、今卓に入ったらおじさまといっしょに打てなくなるわよ。あんたの都合何かで卓組み変えられないから。」

と香奈に言った。それを聞いて香奈は、すぐに麻雀を打ちたいと思わなくなった。それ以上にキヨウ力に言われても断る気だった。

お客さんは他の卓にラス半が入ったから、そこに案内し、リ力はそのまま続行になった。当然香奈はリ力と交替したいと露と思わなかった。

リカの入っていた卓が割れて、そこで打っていたお客さん達が帰り出した。

「香奈、2番卓掃して。」

キョウカが香奈にそう指示して、香奈は目の色変えて卓に向かった。そしてリカとすれ違いながら卓掃を始めた。

籠を戻しにカウンターに行ったりリカは籠を返ししながら不思議そうな気持ちで香奈を見ていた。そのリカにキョウカは

「あの子、プロとして卓掃が好きなのよ。」

と教えた。

第67話 おじさまの教え

リカはキョウカの説明では、香奈が卓掃が好きな訳が理解出来なかった。リカからしてみれば、どう考えても麻雀のプロが卓掃を好きになるわけがなかった。

実際、とあるプロ団体は卓掃を罰ゲームに使うほどだから、誰もが卓掃をしたいと思わなかった。

香奈がうれしそうに卓掃する姿を不思議な気持ちで見ているリカにキョウカは

「あの子の好きなプロが、あの子に卓掃は大事なことと言ったのよ。だから卓掃は人一倍一生懸命するのよ。」

と言った。それを聞いてリカは香奈が卓掃を一生懸命やる理由がやっとわかった。続けてキョウカは

「あの子の仕事を奪ったら駄目よ。」

と微笑しながら軽くリカに釘を刺した。

リカは香奈から仕事を奪ってまで頑張る気は無いから、キョウカに何も言わなかったが、自分より香奈の方がプロに感じるのが少し悔しかった。

香奈はおじさまが来店したことを考えながら卓を掃除していた。掃除している姿を見て誉めてくれる、きれいな卓を見て感心する、想像するだけで香奈は幸せだった。

しかし、いつまで経ってもおじさまは来店しないから、香奈は不安になり、掃除が終わった卓は他のお客さんが使うことになった。

香奈は掃除した卓を他の客に使わせなくなかったが、とても行動に移すことが出来ないから、黙って卓が他の人に使われるのを見ているだけだった。

本来なら、このことで香奈はショックでやる気を無くしていただろう。

ただおじさまのサービス精神を理解していたから、香奈も掃除した卓をサービスで他の人達に提供したことにして気を取り直した。

第68話 期待だけの出勤（前書き）

携帯水没事故で遅くなりました。

第68話 期待だけでの出勤

卓掃を終えた香奈は、いつもの位置に戻り、新に仕事があるのを待った。

こうして香奈は、卓掃かお客さんにドリンクを渡すことしか出来ないのに、メンバーの仕事が出来るような気持ちになって、就業時間を終えた。

家に帰り、PCを立ち上げておじさまのHPの希望の丘を開いた。そしておじさまにサンフラワーに来て欲しいと頼もうと思った。

しかし、おじさまが普段は忙しいとわかり、頼むことをあきらめた。それと同時におじさまがサンフラワーに来る事を期待することもあきらめた。

おじさまが来ないのならば香奈もサンフラワーで頑張る意味が無い、香奈は明日からサンフラワーに行くのをやめようかと思った。

ただとおじさまが来ないとは限らない、そして何時来るかわからないから香奈は明日もサンフラワーに出勤することにした。

次の日の朝、ふと目が覚めたキョウカは、休みの日だから二度寝しようとした。しかし香奈のことを思い出したら、安心して寝るどころか休むことすら出来なかった。

仕方なく出勤しようとしたキョウカだったが、あることに気付いた。

（なおちゃんが居るから大丈夫だ。）

そうとわかればとキョウカは安心して布団の中に戻った。

香奈は普段通りサンフラワーに向かっていた。おじさまが来るとは限らないが、何時来てもいいように香奈は、脳内でイメージトレーニングをしていた。

サンフラワーに到着し、何時ものごとく恐る恐るとドアを開けると、そこにはなおが居た。

第69話 強気のリカ

「あら、香奈ちゃんお久しぶり。」

なおは香奈に久しぶりに会えて喜んだ。香奈もなおに久しぶりに会えてうれしかった。しかし香奈は相変わらず会話が苦手で、なおに話し掛けることが出来なかった。

「香奈ちゃんが頑張ってるってヨーカさんから聞いたわよ。」

なおは香奈に明るく話し掛ける。香奈はそう言われてうれしかったが、相変わらずうまくしゃべることが出来ず、なおに何も言えなかった。

「おはようございます。」

ドアを開けて入って来たのはリカだった。

「あ、なおさんおはようございます。桜井二等兵ただ今到着しました。」

リカはなおへの挨拶にジョークを交えた。なおは微笑しながら

「おはよ、あなたがヨーカさんが言っていたうちの団体のホープね。」

とリカに言った。そう言われてリカは

「とんでもない、なおさんの足元にも及びませんよ。」

と謙遜しながら否定した。程なく店内が動きだし、三人は会話を切り上げ各自動いた。

「どう、次本走に入る？」

少し落ち着いたので、なおがそうリカに聞いた。

「はい、喜んで。」

とリカは返事をした。

（私はおじさまと一緒にでないなら麻雀を打ちません。）

と香奈は二人のやりとりを聞いてそう思った。

「あら、麻雀に自信あるんだ、すごいじゃない。」

なおはリカの意欲に感心した。

「はい、師匠が師匠ですから。それに少しでも打って強くなりたいので。」

とリカは語った。

第70話 なお再び（前書き）

インフルエンザを罹って遅くなりました。

第70話 なお再び

「あら、香奈ちゃんお久しぶり。」

なおは香奈に久しぶりに会えて喜んだ。香奈もなおに久しぶりに会えてうれしかった。しかし香奈は相変わらず会話が苦手で、なおに話し掛けることが出来なかった。

「香奈ちゃんが頑張ってるってキョウカさんから聞いたわよ。」

なおは香奈に明るく話し掛ける。香奈はそう言われてうれしかったが、相変わらずうまくしゃべることが出来ず、なおに何も言えなかった。

「おはようございます。」

ドアを開けて入って来たのはリカだった。

「あ、なおさんおはようございます。桜井二等兵ただ今到着しました。」

リカはなおへの挨拶にジョークを交えた。なおは微笑しながら

「おはよ、あなたがヨーカさんが言っていたうちの団体のホープね。」

とリカに言った。そう言われてリカは

「とんでもない、なおさんの足元にも及びませんよ。」

と謙遜しながら否定した。香奈は二人の会話には混じらず、ただおじさまが来店するのをいつものごとく待った。

「だって私の師匠はプロ中のプロです。」

そのリカの言った一言が香奈をあわてて二人の会話に飛び入らせた。

「その人はどの団体所属ですか？」

その香奈の突然の質問にリカは困惑しながら

「どこにも所属して無いわよ、本物のフリープロよ。」

とリカは答えた。それを聞いて香奈は黙って元の位置に戻ろうとした。

「香奈ちゃん、おじさまのことだと思っただけでしょ？」

となおが明るく香奈に聞いた。リカは意味が分からず戸惑っていた。そのリカになおは

「おじさまはプロ団体に所属していて香奈ちゃんの好きな人なのよ。」

とリカに説明した。

第71話 太陽の子

「ねえ、おじさまってどんな人？」

リカがそう香奈に聞いた。その突然の質問に香奈は緊張しながら

「私にとっておじさまは太陽であり、私は太陽の子供です。」

といつもと同じフレーズで説明した。当然リカには意味がわからなかった。

「香奈ちゃんのキャッチフレーズは『太陽の子』ね。」

となおは笑顔で香奈に語り掛けた。キャッチフレーズと言われても香奈にはさっぱりわからなかった。

「いーなあ。私もキャッチフレーズが欲しいなあ。」

とリカがなおにねだった。

「そんなの自分で考えなさい！私だって無いのだから。」

となおはリカに言い返した。こうして二人が欲しがるキャッチフレーズを得た香奈だが、価値がわからないからうれしいと思わなかった。

そんな香奈を見てなおが

「もう喜ばないよ。キャッチフレーズで目立つようになれば、お

じさまが香奈のことを見つけてくれるわよ。」

と香奈を叱った。そう言われて香奈は真剣になおに

「め、目立つようになるにはどうしたらいいですか？」

と聞いた。香奈は早くじさまに逢いたいという気持ちだから、真剣そのものだった。そう香奈に問われてなおは

「そうねえ、タイトル取るのが一番だけど香奈ちゃんはBリーグからスタートだから・・・、ここで頑張ることよ！そうすれば評判になっておじさまの耳に入るから。」

と香奈にアドバイスした。それを聞いて香奈は喜び勇ながら

「頑張ります！」

と明るく言った。

第72話 3回目の研修

香奈は目立てば、おじさまに知られて、おじさまが香奈を見に来てくれると信じ、ずっと頑張り続け、キョウカを喜ばせる程の働きをした。

そして3回目の研修の日が来た。指導係のキョウカは香奈のことが心配で、不安になりそうだったが

（牌譜の書き方は予め教えたし、本人は努力して覚えたから大丈夫だろ。）

と安心していた。

香奈はいつも通り早く来て隅で縮こまっていた。キョウカはそんな香奈を無視して、研修の係に指示をして研修の準備をした。

「おはよー。」

リカだけは隅に縮こまっている香奈に挨拶をした。

「お、おはようございます。」

相変わらず香奈は緊張したままでリカに挨拶を返した。

「研修を始めるからみんな座ってー。」

キョウカの号令で研修生達は各自卓を囲むように椅子に座った。遅れて香奈は空いてる席に座った。

「それでは3回目の研修を始めます。」

キヨウカの講義で3回目の研修が始まった。今回は採譜の研修で香奈は予め予習していたから、授業には着いていく事が出来た。

しかし、実戦が始まると香奈は他の人達より動きが遅いから、香奈の所だけ研修が進まなくなった。

「もういいわ、山本くん代わってー！」

キヨウカがいらついて香奈をまた外した。香奈は外されたくないから、離れた場所から採譜を続けようとした。

だが進行は香奈のスピードに合わせてくれない。香奈が書いてるうちに手はどんどん進み、香奈は追いつけないことを自覚させられるだけだった。

第73話 キョウウカの決心

キョウカは香奈が採譜が出来なくても問題ないと思って、香奈をほったらかしにした。

香奈は自摸と捨て牌が抜けまくった自分の採譜用紙を見て、少しずつ頑張る意欲を無くしていた。そしてとうとう採譜をすることをあきらめた。

打ち手と採譜者を交代しながら研修が進んだが、香奈だけは止まっていた。たまだった。キョウカは香奈を気にしたが、香奈の相手などとしてられないのでこの時も放置だった。

各自の採譜の確認、指導が終わり3回目の研修が終了した。別にペーパーの新人に採譜を頼むことは団体としては無いから、今回の研修で採譜がマスター出来なくても問題無かった。

キョウカは研修生達に期待していないから、終了の挨拶も手短に終わらせ、研修を終了した。

そしてこれから片付けようとしたときに、香奈がヨーカの前に現われた。香奈は泣きながら

「わ、私プロにはなれません。おじさまの採譜が出来ない駄目な子です。」

とキョウカに訴えた。キョウカは香奈を放置していたことを申し訳ないと思いながら香奈に

「馬鹿ね、おじさまはあなたが一人前のプロになるのを待ってるのよ。こんなことで挫けちゃ駄目でしょ、あなたは太陽の子なんだから。」

と香奈をなだめた。続けてキョウ力は

「ほら頑張りなさい！おじさまが待ってるわよ。」

と香奈を励ました。それを聞いて香奈は泣くのを止めて

「は、はい。」

と返事した。キョウ力は香奈をここまでさせるおじさまっていった誰？とおじさまを捜し出す決心をした。

第74話 給与計算

キョウカはおじさまを探すことにしたが、肝心のおじさまの情報が無くて探しようが無かった。それにキョウカは従業員の給与計算で忙しくて探す暇すら無かった。

給与は普通の会社と違い、従業員は店での負け分を給料で払っているから、その分も計算しなければならなかった。

麻雀は四人揃わないと出来ないから、人が足りない分はメンバーが入って、一緒に麻雀を打つことになる。これを雀荘では本走という。

その本走でメンバーが負けたら負け分を給料から払うことになる。当然負け過ぎれば給料が残らず、そのメンバーはやめていなくなるだろう。

だから雀荘は従業員が定着しづらく、慢性的な人手不足になる。サンプラワーも例外ではなく何人も経済的に続かずやめていった。

キョウカは全員の分を終え、ほっとしたが香奈を忘れていたことに気付き、その場であわてて計算することにした。

キョウカは一つの不備に気付き、計算を止めた。香奈の時給を決めてなかったのである。キョウカは香奈を練習で店に呼んでいたから、時給のことをすっかり忘れていた。香奈を他の従業員と同じ時給にするのは抵抗があった。何故なら香奈は本走していないからである。

他の従業員には本走の負けを考慮して、時給を高くしていたから香奈も同じ時給には出来なかった。

しかし、香奈目当てで来店する客が居るほど、香奈は集客で店に貢献していたから、その分を考慮して考えないとキヨウカは感じていた。

第75話 次のステップ

研修が終わり、本格的に銀河プロ麻雀連合の女流プロになった香奈だが、プロとしての自覚はまったく無かった。

香奈はプロになりたいのではなく、おじさまと同じ団体に所属したいだけである。

だからおじさまが違う団体に所属しているのならば、すぐにでも銀河プロ麻雀連合をやめて、おじさまの居る団体に入ろうとしていただろう。

香奈が正式にプロになったにもかかわらず、前と変わらずにサンフラワーに居る時にキョウカが遅れて出勤してきた。

香奈はキョウカを見て採譜が出来なかったことを思い出し、あわてて採譜の練習をしようと、採譜用紙を探そうと周りを見た。

どこにも採譜用紙が無く、香奈はあわてふためいてヨーカに

「さ、採譜用紙無いですか？」

と聞いた。その質問にキョウカは

「香奈、採譜なんか出来なくていいから今は仕事しなさい！」

と香奈を怒鳴り付けた。キョウカに起こられた香奈はおとなしく定位置に戻った。

カウンターに入ってキョウカは香奈に

「香奈、今は勤務時間中なんだから、仕事しないとおじさまは香奈が仕事をさぼって遊んでると思うわよ。」

と忠告した。そうキョウカに言われて香奈はすぐに採譜のことを考えなくなった。この頃にはキョウカは香奈の操縦の仕方を理解していた。

しかし、キョウカは香奈をただの従業員として扱うわけにはいかず、プロとして育てなければならぬから、次のステップに進めることを考えていた。

ただ香奈が次のステップに進められるか疑問だった。

第76話 初めての給料

次のステップとして、キョウカは香奈に本走させることを考えていた。

本走とはお客さんが四人揃わない時、足りない人数分メンバーが入って卓を立てていた。この時メンバーが入る行為を本走といい、この時負けた場合、負け分は自分持ちである。

何故負け分が自分持ちかというと、負け分を店が負担すると、お客さんと組んでわざと負けるような不正行為をする人間が出てくる。

そのような不正行為を阻止する為に負け分はどの雀荘も自分持ちにしている。

キョウカはさすがに香奈が不正行為に走るとは思っていないが、負け分は香奈自身が払わなければならないから、本走させるのをためらった。

負け分を店持ちとかで香奈だけを優遇するわけにはいかないから、キョウカは香奈を本走させることをあきらめた。

香奈の勤務時間が終わった。

「ちょっと香奈、こっちに来なさい。」

キョウカが香奈を呼んだ。香奈は何事かとキョウカの元に出向いた。キョウカは封筒を取り出し

「香奈、給料よ。」

と言って香奈に封筒を渡した。キョウカから封筒を貰った香奈は何の事かわからずただ戸惑った。

「ほら、早く中身を開けて確認しなさい。」

相変わらず動きの鈍い香奈に、キョウカはそう言って催促した。香奈がおそるおそる封筒を開けると一万円札2枚と千円札が数枚と小銭と給与明細書が入っていた。

香奈はキョウカからお金を貰えたことに激しく驚いて、その場で硬直したまま動かなくなった。

第77話 聖地サンフラワー

キヨウカは香奈が何も言わないから、給料の金額が不服なのかと思い

「文句あるの？」

と不満そうに聞いた。キヨウカにそう言われて香奈はあわてて

「あ、ありがとうございます。」

と言った。香奈は不満どころかうれしくて仕方がなかった。新宿までの毎日の交通費が馬鹿にならないし、プロ団体への会費とか出費が多くて経済的に苦しかったから、少なくとも給料が貰えるのは幸いだった。

キヨウカは香奈の煮えきらない態度にいらついてそのまま香奈を放置した。香奈はキヨウカが何も言わないから普通に

「ありがとうございます。」

と言って帰った。給料の中身だが、キヨウカは香奈が本走をしていないから、他のメンバーの半分の時給にした。香奈目当ての客が居ても時給を上げる理由にならないから、半分という決定は変わらなかった。

逆にリカは他のメンバーよりも時給が高く、本走も黒字だったから、香奈よりも遅れて入ってきたけど香奈より給料が多かった。

香奈は自宅に向かって歩きながら、給料の意味を少しずつ理解し始

めていた。

（おじさま、香奈は給料を貰えるくらい頑張りました。）

香奈はまだ見ぬおじさまを思い、そうつぶやいた。

家に着いても、香奈は両親に給料のことは報告しなかった。両親に黙ってサンフラワーで働いていたから、報告して怒られてサンフラワーに行けなくなるのを恐れたから。

香奈にとってサンフラワーはおじさまに逢えるチャンスの場合だから、サンフラワーに行けなくなるようなことは絶対したくなかった。

第78話 両親には内緒（前書き）

諸事情によりヨーカの名をキョウカに変えました。正式には水野京花になります。

第78話 両親には内緒

家に帰り、香奈はすぐに部屋に入りPCを起動した。目的はおじさまに給料を初めて貰ったことを報告する為である。

おじさまのHPの『希望の丘』にアクセスして、掲示板に香奈は「初めて給料を貰えました。」とうれしそうに書き込んだ。

香奈は正式にプロになったという自覚も無く、プロに成れてないと思ひ、おじさまにサンフラワーに来て欲しいと頼む勇気が無かった。ただ給料を貰えたことだけを報告し、それに対してのおじさまのお褒めの言葉を期待して、おじさまのHPを閉じた。

夕食時、香奈は両親に初めて給料を貰ったことや、サンフラワーで働いてることを一言も語らず、ただ黙々と食事を取った。

香奈の両親達は香奈が毎日出歩いているから、香奈の社会復帰が近いと密かに喜んでいた。だから就職して給料を貰えるまでになったと知ったら、手を挙げて喜んでいただろう。

しかし、勤め先が雀荘だと知ったら顔色変えて香奈をやめさせていた。それだけ世間一般では、雀荘はパチンコ店や飲み屋みたいな扱いで、大事な娘を働かせれるような場所だと思われて無かった。

香奈は雀荘がそんな風に思われていることは露知らず、いつもの警戒心から両親に語らなかつただけだった。それ以前に香奈は雀荘がどんなところかわかつていなかった。

仮に語つても両親の説得には耳を傾けなかった。それだけサンフラワーはキョウカの趣味で綺麗に飾られた場所で、何よりおじさまに逢える唯一の可能性のある場所だったから。

第79話 香奈に振り回されるキョウカ

香奈は両親にすべてを内緒にしたまま、部屋の中で採譜の練習を始めた。

おじさまの採譜をするのは自分だと思い、ただひたすらそれだけ努力し、疲れて就寝した。

次の朝、香奈は起きるとすぐにおじさまのHPの希望の丘を見るために、PCを起動した。

希望の丘のトップが出ると、香奈はすぐに掲示板に行き、香奈へのおじさまのコメントを見た。そこには

おめでとう、これからも継続して貰えるように頑張りましょう。

と書かれていた。ささやかなコメントだが、香奈には涙が出てくるほどうれしかった。

香奈はうれしくて、すぐPCを止めてサンフラワーに向かうことにした。目的は当然おじさまに巡り会うことだった。

その頃、キョウカは今日はなおが居るから、休もうかと思っていた。キョウカはシフト的にはいつでも自由に休める立場だから、今休みに決めても問題なかった。

しかし、香奈が毎日休まずサンフラワーに出勤するから、キョウカは香奈の面倒を他の人に任せられない以上、キョウカは香奈に合わせて出勤しなければならなかった。

（なおなら別にまかせても問題無いけど・・・）

キョウ力はなおなら香奈を任せても大丈夫と思っても、香奈は世間から見ればもうただのメンバーではなく、女流プロである。

麻雀を打たせられないプロなんて団体の恥だから、キョウ力はそんな恥ずかしいことがばれないように、香奈を監視したい気分でサンフラワーに向かった。

第80話 キョウウカの憂い

香奈はおじさまに会いたいからと、急ぐかと思えば逆に緊張して動きがぎこちなかった。

それでもサンフラワーに向かう足取りは早く、キョウウカよりも早くサンフラワーに着いた。

中におじさまが居るかもしれない勝手に思い、香奈はドアをゆっくり開けた。しかし、店の中はいつもと変わらない風景でおじさまらしき人は居なかった。

「あら香奈ちゃん、今日も出勤？偉いわね。」

香奈を見てなおはそう香奈に言った。心ここに有らずして、香奈は周りを見渡して

「お、おじさまは来てないですか？」

となおに尋ねた。なおは首を横に振り、それを見て香奈は元気を無くした。

「香奈ちゃん、おじさまは都合良くここに来れない立場だから、せめて香奈ちゃんがここで頑張ってることがおじさまの耳に入るように頑張らしましょう。」

となおは香奈を励ました。

「はい。」

香奈はなおに励まされ元気を取り戻した。

「おはようございます。」

リカだった。リカも南に借りた10万円を返そうと、ほとんど毎日出勤していた。

香奈となおとリカが居るから人件費的にキョウカは出勤する必要は無かった。しかし、キョウカは香奈がプロなのに麻雀を打たせられないレベルだとばれないようにしなければならなかった。

その頃、キョウカは息を切らせながらも無事新宿に到着し、そしてサンフラワーに出勤した。

「おはよう。」

キョウカはあわてて店に入り、普段より元気な香奈を見て、気落ちしていた。

第81話 キョウカの決断

キョウカは、香奈におじさまが本当にプロならこんな安い雀荘じゃなく、もっと高いレートの雀荘に行くわよと言いたかったが、言うのをあきらめた。

そう言ったら、香奈は本当に高いレートの雀荘におじさまを探しに行くだろう。

キョウカは香奈を危険な目に合わす訳にはいかないから、おじさまがサンフラワーに來ないことを香奈に言わなかった。

そんなキョウカの気遣いもわからず、香奈はおじさまに誉めてもらおうとメンバー業務に励もうとしていた。

ただキョウカが本当に危惧しているのは、香奈を見に來る人間が他に居ることだった。

香奈がなおの気遣いで、銀河プロ麻雀連合のHPでキャッチフレーズが『太陽の子』と会員登録の香奈の欄に記載されていて、一緒に打てる店としてサンフラワーが書いてあった。

他の新人達は自己紹介欄が空白で、香奈だけ目立っていた。これがリカならキョウカは心配してないが、香奈だから激しく心配した。

香奈に興味を持った人達が香奈を見て、プロの印象を悪くするのをキョウカは恐れ、香奈を打たせないようにしたかった。

だけど香奈をやめさせることは出来ないから、キョウカは香奈が普

通に打てるようにするしかないと思い、香奈を指導することにした。

丁度、なおも居るから香奈を指導するチャンスだと思った。それでキョウ力は香奈に

「香奈、次卓に入って麻雀を打ってもらわよ。」

と言った。しかし香奈は前に卓に入ったら、都合良くおじさまと打てないと言われてたから激しく拒否した。

第82話 本走前

本走を激しく香奈に拒否されたキョウカだが、香奈の都合など気にせずに

「あんた今のままだとおじさまと打ったら恥かくだけなんだから、今のうちに練習しなさいよ！」

と香奈を怒鳴り付けた。

そうキョウカに怒られた香奈は、何も言わずすぐに卓に向かった。香奈は麻雀が出来なかったら、おじさまに努力してないと思われるから、すぐに麻雀をする決心をした。

しかし卓に向かったまではないが、卓はまだ準備中で、香奈はどうすればいいかわからなかった。その間、なおは準備を進め、客達からゲーム代を取り出した。

香奈はあわてて財布から一万円札を出し、他の客みたいに現金をカードに換えようとキョウカの元に向かった。

「いないわよ！」

キョウカはそう言って香奈をはねつけ、カードの入った籠を香奈に渡した。香奈は意味がわからずキョトンとしたままだった。

「早く行きなさいよ！」

キョウカは訳もわからず立ち止まっている香奈を怒鳴り付けた。キ

ヨウカに怒られて香奈はあわてて卓に戻った。

「香奈ちゃんここよ。」

なおが香奈に座る場所をやさしく教えた。香奈はわけわからず、なおに言われるままそこに座った。

続いてなおが香奈の下家に座り

「高木、本走に入りまーす。」

と言った。香奈は意味わからずなおの言ったことを聞いていた。

「香奈ちゃん、本走に入るって言わないと、お客さんが代走と勘違いしちゃうでしょ。」

となおが香奈に教えた。

第83話 初心者レベル

香奈はなおに言われたことの意味がわからない。代走と本走の意味がわからないから、ずっと戸惑ったままだった。

「香奈ちゃん、小林本走に入りますと言えいいのよ。」

となおが香奈にやさしく教えた。そうなおに言われて香奈はあわてて言おうとしたがキョウカが

「もういいからさっさと始めなさい。」

と言ってゲームのスタートを強要した。なおはキョウカに言われるままゲームを始めることにして

「この子本走初めてだからお手柔らかにお願いします。」

と他の客達に言った。こうして香奈は西家から始まった。

キョウカが監視する中、東場1局が始まった。配牌を南家の後で取り、キョウカは一つ安心した。

しかし配牌を取り終わると、バラバラな手牌を直そうとして香奈は手間取った。

「香奈、自摸番よ。だから早くしなさい！」

手牌しか見ていない香奈にキョウカからのカミナリが落ちた。香奈はあわてて自摸ろうとするが、場所がわからない。お客さんにここ

だと教えてもらって香奈はあわててそこから牌を取った。

取ったはいいが、手牌がバラバラでそれが必要牌かわからない。香奈は早くどれかを切らないとキョウカに怒られると思い、わかりやすかった北を切った。

（もー、何で北から切るのよ。）

キョウカは対子になってる北から切った香奈にイラついた。キョウカから見れば他に孤立している牌があるのだから、それから切ればいいのじゃないと思った。

第84話 なおの思惑

北を切った後、香奈はゆっくり手牌の並び替えを始めた。他の三人は並べながら自摸をして他の牌を切つて、瞬く間にまに香奈の番になった。

「香奈ちゃん、自摸番よ。」

なおが香奈にそう催促した。香奈はなおに言われて、あわてて山に手を伸ばして牌を取った。

そしてあわてて切ろうと手牌を見渡し、一枚だけある北を切った。香奈の河に北が二つ並び、他の三人は香奈が何を狙ってるか、考えながら手を進めた。

しかし、香奈の狙いは後ろから見ているキョウウカにもわからず、香奈自身わかっていなかった。

（あ、痛ー。）

なおの手牌で北が重なった。しかし北は二枚切れてしまつて、北家のなおは北を役牌として使えなかった。

なおとしては北を鳴いて安く場を進めたかった。何故なら香奈を負けさせて、損させたくなかった。自分自身も損したくないし、かといって他のお客さんに重い負担をかけさせる訳にはいかなかった。

故になおは点差を小さくして場を進めたかった。ただ北を鳴けなかったから、なおが思い通りに場を進めることが出来なかった。

自摸番の度に慌てさせられる香奈は、手牌を解す為に上家の捨てた4索を鳴いた。

「チツ、チー。」

そう言つて5索と6索を手牌から摘まんで右側に置き、手牌からいない牌を切り、4索を上家の河から持つてきた。

（もう、何やってんのよ！タンピン三色が無くなったじゃないの。）

キョウ力は心の中でそう怒った。後ろでキョウ力が怒ってるのも知らずに香奈は手牌が分かりやすくなって喜んだ。

第85話 なおの方針

香奈の鳴きを見て、三人は香奈が鳴きタンを狙ってると思った。

しかし香奈は周りからせかされていたから、役など考えている暇など無く、ただ単に手牌を解す為だけに鳴いていた。

香奈の鳴きを見て、なおはこの局は香奈にあがらせようとして、自分自身は動こうとしなかった。逆に客二人は香奈の手が安いと思い、積極的に手を伸ばした。

「ポ、ポン」

香奈は対面から出た四万を鳴いて赤五万を切った。香奈は赤で貰える祝儀の価値を知らない（サンフラワーではカードだから香奈はわからなかった。）から平気でそんな鳴きをした。

キョウカは香奈の仕掛けにはもう呆れて何も言えなかった。

「ツ、ツモ、500、1000のい、一枚。」

香奈がタンヤオ赤一をあがった。長くサンフラワーに勤務して卓上のやり取りを聞いていたから、申告は問題なく行えた。

三人が点棒と100円分のカードを一枚ずつ香奈に渡した。香奈はそれらを無言で受け取り、点棒とカードを仕舞い出した。

香奈がそれらを仕舞う頃には、もう次の局の準備が出来ていて、香奈が追い付いた所で次局が始まった。

なおは前局香奈があがったことで少し心に余裕が出来ていた。安く局を進めるのに香奈が協力してくれるのは、なおにとって凄く都合のいいことだった。

この局、なおは香奈の動向に合わせることにした。香奈があがりに向かうなら、なお自身は抑え、香奈があがれそうに無いなら、なおがあがりに向かおうと考えていた。

第86話 無問題

東2局

香奈はプロテストに合格したくて必死に麻雀の勉強をした。だから役や点数計算は完璧だった。

それで今回もタンヤオにしようとして一万を先に切り出した。

（何やってんのよ！出来面子じゃない。）

後ろで見ていたキョウカが香奈の打牌に激しく呆れた。

香奈はタンヤオで手を進めようとしたが、上家の手が悪いのか中々鳴ける牌が捨てられなかった。その間隙を縫ってなおがピンフをテンパイした。

なおはピンフ赤ドラ1だからリーチを掛けて満貫にしたかったが、香奈が振り込んだら元も子も無いのでダメテンにした。ほどなくなおの下家がなおの当たり牌を切ってくれたので

「ロン、3900の一枚。」

となおは下家のお客さんからあがった。

「それリーチだよ。リーチなら切らなかったのに。」
とぼやいた。

「そう思ってリーチを掛けなかったんだから。」

となおは場を和ますように言った。香奈はなおの手牌を見た後、何事も無かったように自分の手牌を崩して、中央の穴に入れた。

リ力はキョウ力となおを一つの卓に取られていたから、一人でてんてこ舞いしていた。

お客さんが来店したので、なおの所に案内しようと思ったが、香奈の指導をしている最中だから案内を諦めて

「すみません、今東2局なのでしばらくお待ちください。」

と説明してお客さんを待たせることにした。

東3局

香奈の親番である。香奈は手つきは慣れてはいないが、無事親として局を始めることが出来た。

第87話 混乱する香奈

東3局

香奈の親番である。配牌と第1自摸を取った香奈は一番に捨てなければならぬ。

手牌全体を見渡して香奈は中が三つあることに気づいた。中が三つあればそれだけで役だから、無理にタンヤオを狙う必要は無い。香奈は少し気分が楽になった。

しかし、逆に何を切ればいいのかわからなくなり、香奈は混乱した。一生懸命理牌する香奈、他の三人は玉って香奈が切るのを待った。

「左から四番目を切りなさい。」

キョウカからだった。香奈はあわてて左から四番目の北を切った。なおは香奈が切ったのを確認して自摸を始めた。

大業を成した気分で香奈はドキドキしながら休んだ。

「早く理牌しなさい！自摸番が来るわよ。」

キョウカはのんびりしてる香奈に催促した。キョウカに煽られ香奈はあわてて理牌を始めた。だけどすぐに香奈の自摸番が来た。

香奈はあわてて山から牌を取り、先程と同じ状態になった。むしろ前より厳しくなった。香奈は何を切っていいかわからない、今度はキョウカは口出ししなかった。

香奈はさっきのキョウウカの指示から、字牌が一番要らないと思い、あわてて東を切った。

（また、何考えてるのよ！）

キョウウカは香奈の判断に呆れるしかなかった。香奈は役が一つあればいいと思っていたから、東は必要だと思っていた。

キョウウカからしてみれば、三枚あれば二翻になるダブ東を早く捨てるのはもつての他で、香奈が麻雀をわかってないのが十分にわかった。

第88話 カン（前書き）

自分の携帯ではカンとリンシャンを漢字変換出来ませんでした。

第88話 カン

香奈がダブ東を切ったから、三人は香奈の手が早いと感じた。なおはこの局は香奈があがると思い、被弾を避ける為に受け身の体制にした。

この局も香奈は鳴いて手を進めたかったが、香奈の上家が牌を絞って香奈に鳴かれないようにしていたから、香奈は鳴けなかった。

しかし、面前でも手が進み、香奈は四枚目の中を持ってきた。

「カ、カ、カン。」

香奈は中を暗カンした。手順は今まで他のお客さんのを見ていたから、それを真似してリンシャン牌から一枚持つて来てテンパイして不要牌を捨てた。

（何やってるのよ！ここはリーチでしょ。）

キョウカは香奈がリーチを掛けなかったことにいらついた。

カンドラが増えたのにリーチをしなかったら、他の三人が裏ドラ期待で前に向かってくるから、それらを押さえ付ける意味で香奈はリーチをするのが戦術だった。

香奈は役牌という役があるから、リーチを掛ける必要は無いと思っていた。それに香奈は順位を上げることなどまったく考えていないから、わざわざ面倒なことをしようと思わなかった。

香奈がリーチをしなかったからなおはほっとした。ここで香奈がリーチをしていれば香奈が勝ち過ぎて、他のお客さんに申し訳ないところだった。

しかし、香奈がカンをしてカンドラを増やしたから逆に他のお客さん達が、大きく勝つ可能性が出てきたから、なおは対処に困った。

なおがあがってこの局を終わらすのが、なおにとって最適だが、なおは手を遅らせていたから、この局は無事流れることを願うしかなかった。

第89話 初心者のままで

カンドラが増えたから、客二人は積極的に前に出てきた。

「口、ロン3400」

香奈が香奈の上家が無造作に捨てた5索で出あがった。中のみ70符1翻3400で、申告には問題無いから、キョウ力はあえて何も言わなかった。

東3局1本場

今回は白が対子だった。香奈は一枚しかない発を第1打に選んだ。キョウ力からみればプロらしくない1打だが、もう香奈にプロらしいことを期待するのはあきらめたから、何も思わなかった。

「ポン。」

なおからだった。なおはプロの性で香奈の親を流しに掛かった。なおの戦略でいけば、ここは香奈に連荘させて香奈に点棒を貯めさせるほうがよかった。

半荘は長いから、香奈が点棒をばらまく展開を想定し、香奈に親を続けさせて、点棒を蓄えさせるべきだった。

「ツモ、300・500は400・600」

なおがツモあがった。香奈はなおが四つも数字を出すから、いくら払えばいいのかわからない。他の二人が400点を払ったから香奈もあわてて400点を出した。

「香奈ちゃんは600点よ。」

となおが香奈に言った。そう言われて香奈はあわてて200点を追加した。なおは香奈からそれを受けとり東3局は終了した。

その後右往左往しながら、香奈一位なお二位で終わった。

「2卓終了。優勝は会社です。」

なおがそう言っ てリカに伝え、リカは結果を記帳した。香奈はなおの言ってることの意味がわからずただ黙っていた。

「ほら、お客さんを案内しなきゃいけないから、早く退きなさい。」

キョウカが香奈にそう言っ て席を空けるように言った。そう言われ てすぐに席を空けた。

第90話 思考の違い（前書き）

のべぷろというサイトで有料小説を始めました。
のべぷろ

<http://www.novepro.jp/>

第90話 思考の違い

香奈は卓を離れ、いつもの立ち位置に戻った。

「リカちゃん変わって、あたし疲れた。」

なおがそう言ってリカと代わった。なおは香奈をうまくトップに導くのに疲れ果ててしまっていた。だからもう一度やれと言われたら、無理だと断るだろう。それくらいむずかしいことをやってのけたのだった。

しかしそんななおの努力を知らない香奈は、相変わらず自分のことしか考えてなく、カウンターに戻ったキョウカに向かって何かを話しかけたくてオドオドしていた。

「何が言いたいの？」

何も言えなくて、キョウカの前をうろつく香奈にそうキョウカが冷たく言い放った。

「わ、私は合格だったでしょうか？」

怯えながら香奈はそうキョウカに聞いた。キョウカは合格の意味がわからない、少孝して本走のことだと思い

「別にいいんじゃないの」

とそっけなく答えた。それを聞いて香奈はうれしくて

「ありがとうございます」

とキョウカに礼をした。キョウカは本走ぐらいで何で礼までされるのかわからなかったが、すぐにおじさまと同卓出来るからかと思い、もう気に止めようとしなかった。

しかし、香奈はそういう理由で礼をしたのではなかった。プロとして合格かときいていたのだった。

合格ならおじさまと同じプロ団体に居られる、それがうれしかったのだ。プロとしては合格とはいえないが、その点は大丈夫だった。何故なら香奈はプロを名乗る気は無く、プロの権威を下げることはなかった。

第91話 Cリーグ

香奈がうれしそうにいつもの場所に立っていると、なおがカウンターに来てキョウカに

「リカちゃん強いわね。Cリーグの昇級候補ね。」

と話し掛けた。香奈はリーグの事をまったくわかってなかったが、なおが近くに來たのでなおの方を見ると、なおと目が合い、なおが

「香奈ちゃんは関係ないわよ。香奈ちゃんは女流合格だから女流リーグにしか出れないの。」

と香奈に言った。香奈は女流合格も女流リーグの意味もわからない。だからわけがわからないままだった。

続けてなおは

「女流リーグは女だけで対戦するけど、Cリーグは男の人達もいっしょに打つリーグで、香奈ちゃんはそんな大変なところで打たなくていいから安心していいわよ」

と香奈に二つのリーグの違いを簡単に教えた。大変という意味は、リーグの成績の下位グループはリーグ陥落で、リーグ戦に出れなくなるのだった。

逆に女流リーグは、最下位でもそのまま次の開催されるリーグ戦に出れるから、何も問題が無かった。

しかしそんなことは香奈には関係無かった。

「わ、私もＣリーグに出たいです！」

と香奈は訴えた。突然の事でなおは理由がわからない。キョウカはまたいつものことが始まったと嘆いた。

「駄目よ。香奈ちゃんは正規合格じゃないからＣリーグには出られないのよ。」

となおが香奈を止めた。しかし香奈は

「せ、正規合格になるにはどうすれば？」

となおに聞いた。この問いになおは

「もう一回試験を受けて合格しないと駄目よ。」

と説明した。

第92話 客達の不満

「もう一回試験を受けたいです。受けて正規合格になりたいです！」
香奈は執拗になおに食い下がる。香奈はおじさまといっしょに打ちたいから、これだけは譲れなかった。

なおは困った。プロテストは半年に一回で、まだ三ヶ月以上日があった。それに香奈がまた試験を受けても正規合格するとは思えなかった。

なおが何も言えなくて困つてると、横からキョウカが

「ちょっと香奈！リーグ戦は競争よ。おじさまを蹴落とさなきゃならないのだから。あなたおじさまを蹴落とせるの？」

と言つて香奈を叱った。

（おじさまを蹴落とす・・・）

とつさに香奈はリーグに参加する気が無くなった。当然正規合格も逆になりたくなかった。

なおは香奈が急に収まったのでほっとしたが、お客さん達が手を止めて二人を見ていたから、あわててなおが

「みなさんお騒がせしてごめんなさい」

とお客さん達に謝った。しかし客の一人が

「香奈ちゃんみたいなまじめない子が合格じゃなくて、ちゃらちやらしたふざけたのが普通にリーグ戦に出てるっておかしくないか？」

となおに文句を言った。

「そーだそーだ」

他の客達も同意見でなおを煽ってきた。このことにキョウ力は客達に

「ごめんなさい、この子は今日が本走初めてなくらい、まだ慣れないから正規はまだ無理だったのです。それをわかってもらえないでしょうか？」

と客達をなだめた。みんなキョウ力の説明に納得し、また麻雀を始めだした。

第93話 本当の集客力

キョウ力は客達みんなが香奈を応援してることに驚いた。

キョウ力はおじさまとに誉めてもらいたいと、不純な目的で香奈がプロになったと軽蔑的な目で見ていたが、客はそんなことを知らないから、香奈は真面目に頑張ってるいい子だった。

例え知ったとしても、けなげな香奈を応援することには変わりは無かった。それくらい香奈はお客さん達の心を掴んでいた。

香奈が何故人気があるのか？香奈はおじさまに教えてもらっていることを下手ながら実践していたからだった。

香奈はおじさまに幸せを分けてもらえるように、お客さん達に幸せを分け与える努力をしていた。

下手だからキョウ力には分からなかったが、お客さん一人一人には伝わったから、香奈はサンフラワーでは人気者になった。

キョウ力は香奈だけではなくリカも見た。リカも真面目な姿勢がお客さん達に評判が良かった。

リカはいつも「師匠が」と明るく語るくらい、師匠の南を尊敬していた。その南から雀荘のメンバーの在り方を教わっているみたいで、キョウ力はリカに何も言う必要が無かった。

なおもサンフラワーの要と言える立場で、店に貢献していたから、キョウ力はなおにすべてを任せ、安心して店を休むことが出来た。

キヨウカは人気女流の確保で客を集客しようとしていたことが、浅はかな考えであり、優秀なメンバーを揃えることが本当の集客に繋がるのだと、今さらになって気付いたと三人を見て自覚していた。

第94話 リーグ戦のしわ寄せ

キョウカが新しい発見に喜び浸ってるのとは対称的に、香奈はある種のストレスを増やしていた。

香奈は実力が付けば付くほど、おじさまに見せたくなり、おじさまのことを恋しくなるのであった。

しかし、香奈はおじさまが誰だかわからない、思いを伝えようにも勇気がなかった。だから来るかわからないおじさまを待ち続け、来たかどうかわからない状態で居なければならなかった。

香奈が帰る時間になった。いつもならキョウカは香奈を機械的に帰すが、今回は感謝の意を込めていた。

だけど香奈はいつもと変わらず、いつもより不満気に帰り出した。この態度にキョウカはムツと来たが、これが香奈だからと、怒るのは無駄だと思い、あきらめた。

帰り道を歩きながら、香奈はおじさまがサンフラワーに来ていないのか、来ていても香奈がわからないだけなのかかわからず、いつもより不満だった。

しかし、香奈は発想を切り替え、香奈が対局する女流リーグにおじさまが観戦しに来てくれると勝手に思い、いつもの香奈に戻った。

香奈が帰った後、キョウカは勤務体制をどうするか考えていた。次の日曜日からリーグ戦が始まるから、リーグ戦のある者は日曜日には出勤出来なかった。

Cリーグはなおトリカが出るから、キヨウカは確実に出勤で、問題は女流Bリーグの日だった。香奈、なお、リカの三人が出るからその日はほぼ男のメンバーだけになるのが確定していた。

しかもキヨウカは女流Bリーグの立ち会いを頼まれていたから、余計悩むことになった。

第95話 安心する香奈

結局キョウカは悩んだ末に女流Bリーグの立ち会いをすることにした。

香奈が何かをやっても、それを理解できるのは自分だけで、他の人には香奈のやりたいことがわからないと思い、キョウカはサンフラワーが休みになってもいいから立ち会わなければならないと思った。

Cリーグ当日、サンフラワーにはキョウカと香奈と男のメンバーだけで、なおとリカはリーグ戦に出ていた。

その日に限って香奈は落ち着きがなく、店の中をうろろろしていた。

その行動に耐えきれずキョウカは

「ちょっと、香奈、あなた何したいの？」

と香奈を怒鳴り付けた。

「お、おじさまはけ、蹴落とされたりしてないでしょうか？」

と香奈は恐る恐る聞いてきた。キョウカには実に馬鹿げた質問である。そんなに知りたいなら、リーグ戦の会場に行って見てくればと香奈を怒鳴りたかった。

しかしそんなことを言えば、香奈はすぐに会場に向かうだろう。今日だって会場の位置がわからないから、サンフラワーに来ているよなものである。

そんな香奈の思考を理解してキョウ力は

「あんたおじさまが蹴落とされるわけないでしょ！くだらない心配なんかしないで仕事しなさい。おじさまに怒られるわよ。」

と香奈に言った。それを聞いて香奈はさっきの態度は何だったのかと思えるくらい、幸せそうな顔をしてメンバー業務に取り組もうとした。

（おじさまが蹴落とされるはずが無い）

香奈はそう思い、安心しきっていつもの香奈に戻った。

第96話 香奈の意欲

そんな香奈を見て、キヨウカはこの子にこれだけ思われるおじさま
っていったい何者？と思った。

ただ香奈と同じくおじさまの正体を知りたいキヨウカだが、肝心の
おじさまに関する情報が無かった。

香奈から聞こうにも、香奈は相変わらずの返答だから、他に知りよ
うが無かった。

おじさまの手掛かりが無い以上、キヨウカは今さらながら、なおが
香奈のプロフィールに太陽の子と書かせたのは、懸命な判断に思え
てきた。

例えおじさまを探せなくても、太陽の子のフレーズにおじさまが気
付いてくれば、おじさまの方から香奈に会いに来てくれる。そう
キヨウカは考えた。

一つの卓が客が一人抜けて三人になった。そして香奈が空いた席の
前でそわそわと落ち着きの無い動きをしていた。

キヨウカは香奈が何をしたいか、とつさに気付き香奈に

「香奈、本走していいわよ」

と呆れるように言った。そうキヨウカに言われてすぐ香奈はそこに
座った。

その卓におじさまらしき人物が居るわけでもなく、香奈は麻雀の実戦をしたかったからだった。

香奈はおじさまに誉められたいから、おじさまの前でミス一つ出来なかった。だから少しでも練習して、本番に備えたかった。

準備が終わると香奈は弱々しく

「こ、小林本走入ります」

と言った。香奈はおじさまに誉められなくて、メンバー業務も頑張っ
て出来るようになるうとしていた。

（頑張りなさい！）

キョウカはいつのまにかけなげな香奈を応援するようになって、そ
う思いながら香奈に籠を渡した。

第97話 本走の負け

香奈は人並みに麻雀が出来るようになったが、とてもプロと言えるレベルではなかった。

香奈は初めから勝ち負けにこだわってなく、やってることはただのパズルだった。

ゆえに配牌と自摸で組んでいく、そこにはゲームらしい順位争いの駆け引きも無かった。

それで香奈は順位にも点数にも興味が無かったから、何でも牌を切っていた。今回はなおのサポートも無く、みんな金を賭けてやってるから容赦無く香奈から当たった。

しかし、香奈は振り込んでもツモられても、ただ単に点棒と籠の中のカードが減るだけに過ぎないとまったく気にしてなかった。

今回はキョウ力は後ろでチェックしていなかったから、そんな香奈に気付かず、香奈を放置したままだった。

異変に気付いたのは香奈がトビで終了した時だった。香奈がハコラスになった時にふと気になって香奈の籠を見た。

次負けると足りない状態だった。キョウ力はあわてて香奈に交代するように言って香奈を卓から離れた。

そしてそのまま本走することにして、香奈をいつもの立ち番に戻した。

慌ただしい状態ながら、キョウカは香奈に本走させるべきじゃなかったと後悔した。

逆に香奈は涼しい顔をして立ち番をしていた。給料が減ったことに気付かずに。

キョウカが香奈に本走の負け分は自腹だと香奈に言っただけでなかったから、香奈はいくら負けても気にしていなかった。

他のメンバーがアウトと言ってカードを追加して貰っているのは、香奈はただ単にカードを補充してもらっているだけだと思っていた。

第97話 本走の負け（後書き）

携帯版解説：<http://app.f.m-cocolog.jp/t/typcast/1174875/11195677>

第98話 強くなる努力（前書き）

ブログで解説してます。

携帯からはココログから小説解説ブログで検索してください。

第98話 強くなる努力

キョウカは自分の席にお客さんを案内して、やっと香奈に説教出来るようになった。

「香奈、あんた負けたら給料が無くなるのだから、もっとうまくいなさいよ」

そうキョウカに叱られた香奈だが、何で怒られるか意味がわからない。

「あんた負け続けて給料が無くなったら、おじさまと打てなくなるわよ！」

キョウカは香奈を心配してさらに叱った。香奈は負けたらおじさまと打てなくなると思い、急に慌てだした。

しかし相変わらず意味がわかってないから、ただそわそわしているだけである。それを見てキョウカは呆れて

「いい、メンバーは負けたら給料で払うの。雀荘は一円も出さないから。だから負け続けて給料が無くなったらずっと立ち番なんだから」

とわかりやすく香奈に説明した。香奈はカードで支払っているから、いくら負けたのかわからない。

しかし、前に貰った給料が締め日とかの関係で給料がすくなくなかったから、普段も少ないと思い、負けたらやばいと自覚した。

香奈はこの時二つの選択があった。一つはおじさまが来た時だけ打つという立ち番オンリーの方法。

もう一つは

麻雀が強くなることだった。

香奈は即座に麻雀が強くなる方を選択した。何故なら普段本走をしないと、おじさまに努力をしてないと思われるからだった。

おじさまの考えでいくと、勝てないから本走しないは、努力をする気が無いになるから、香奈は強くなる努力をしなければならなかった。

第99話 逃げるキヨウカ

香奈は血走った目でキヨウカを見て

「わ、私強くなりたいです！」

とキヨウカに麻雀が強くなる方法を教えてくれと訴えた。キヨウカはこの香奈の態度に、とんでもないことをしてしまったと初めて自覚した。

香奈に麻雀が強くなる方法を教えるなんて、とてつもなく大変なことである。キヨウカはどう教えていいかわからず

「えーと、あの振り込んだら駄目よ。振り込んだら点棒が減るですよ」

キヨウカはなんとか香奈でもわかる方法を語ろうとする、しかしスイッチの入った香奈がその程度で納得するのか

「桜井二等兵、無事リーグ戦から帰還しました」

桜井リカだった。リカはリーグ戦が終わったから、サンフラワーに遊びに来たのだった。

「いらつしゃい」

キヨウカはそう言って目を輝かせ、リカを奥へ連れ込む。

「あんたちようどいいとこに来た。これから客打ちして香奈に見せ

てあげてよ」

とキヨウカはリカに頼んだ。リカは意味がわからなかったが

「ええっ」

と言ってキヨウカの頼みを聞くことにした。

「じゃありカそこ入ってー」

そう言っでキヨウカは男のメンバーとリカを交代させた。そして香奈に向かつて

「リカの打ち方見て勉強しなさい。彼女がこの店で一番うまいのだから」

と言っで香奈をリカにかっつけた。香奈はキヨウカに言われるまま、リカの背後に回り、リカの打ち方を見ることにした。

キヨウカは香奈をリカにかっつけて、やっと心が落ち着くことが出来た。

第100回 強いリカ（前書き）

読者交流イベントのお知らせ

「太陽の子」祝100回記念&2周年を祝って来る5月22日土曜日にネット麻雀天鳳<http://tenhou.net/>の個室を使って麻雀をしようと思います。

時間は20時から23時の間で、回数は無制限です。参加しなくても応募者全員に読み切り小説をプレゼントします。詳しいことは次回または小説解説用ブログで案内します。

第100回 強いリカ

リカは意味がわからず、客打ちをすることになった。わかっているのは勝ち負けは自腹で、後ろで香奈が見ていることだった。

カウンターでキョウカがほっとしていると、なおがリーグ戦から帰ってきた。

なおはリカが打ってるのを見て

「あら、リカちゃんほんと麻雀が好きね」

と言った。

「私がやらせたの。香奈にリカの打ち方を勉強しなさいと言って」

とキョウカはなおに事の成り行きを説明する。それを聞いてなおは

「香奈ちゃんじゃあの子の打ち方はわからないわよ。押し引きの麻雀だから」

と言ってキョウカのやり方を否定した。それを聞いても、キョウカはもう香奈が強くなるのを諦めてたから、もうどうでもいいと思ってた。

「リカちゃん、リーグ戦四連勝。そしてあの子の言うこと「牌が私を勝たせてくれる」って。いったい誰に教わってるのかしら」

となおが嘆いた。キョウカもリカの強さに異常さを感じていた。

リカは爆発力があるわけではなく、それでいて後半のまくりがあった。さらにリードを維持しての逃げきりが多かった。

若い女の子が老練なテクニックを持つてるとは思えず、キョウ力はリカの師匠とは誰なのか気になった。

気になったのは香奈も同じで、後ろから見ていてリカに質問したがつていた。ただいつもの引込み思案が災いして、何も聞けなかった。

そしてリカの打ち方は香奈じゃなくても疑問に思える打ち方だった。

リーチが掛かっているわけではないのに、簡単に手を崩していた。

第101話 香奈の質問（前書き）

イベントですが22日の土曜日前にメールマガジンで天鳳の個室URLをお知らせします。だから参加希望の方はメールマガジンに登録お願いします。そして登録者全員に読み切り小説をプレゼントしますから、参加しない方もメールマガジンに登録してください。携帯からでもOKです。

太陽の子オフィシャルメールマガジン：<http://www.mag2.com/m/0001130151.html>

第101話 香奈の質問

リカは意味がわからず、客打ちをすることになった。わかっているのは勝ち負けは自腹で、後ろで香奈が見ていることだった。

カウンターでキョウカがほっとしていると、なおがリーグ戦から帰ってきた。

なおはリカが打ってるのを見て

「あら、リカちゃんほんと麻雀が好きね」

と言った。

「私がやらせたの。香奈にリカの打ち方を勉強しなさいと言って」

とキョウカはなおに事の成り行きを説明する。それを聞いてなおは

「香奈ちゃんじゃあの子の打ち方はわからないわよ。押し引きの麻雀だから」

と言ってキョウカのやり方を否定した。それを聞いても、キョウカはもう香奈が強くなるのを諦めてたから、もうどうでもいいと思ってた。

「リカちゃん、リーグ戦四連勝。そしてあの子の言うこと「牌が私を勝たせてくれる」って。いったい誰に教わってるのかしら」

となおが嘆いた。キョウカもリカの強さに異常さを感じていた。

リカは爆発力があるわけではなく、それでいて後半のまくりがあった。さらにリードを維持しての逃げきりが多かった。

若い女の子が老練なテクニックを持つてるとは思えず、キョウカはリカの師匠とは誰なのか気になった。

気になったのは香奈も同じで、後ろから見ていてリカに質問したが、ついていた。たりカの打ち方を見て、香奈はリカにどうして手を崩すのかと聞こうとしたが、どう質問していいかわからなかった。

そんなうろたえる香奈を見てリカの対面が

「後ろ、何か言いたそうだよ」

と言ってリカに香奈のことを教えた。それを聞いてリカはあわてて振り向く。

香奈はなんとえば良いかわからず、ただ戸惑っていた。

「何なの？何が言いたいのか？」

不思議がつてリカが香奈に質問する。香奈はリカにそう問われて、言葉が出なかった。

そんな香奈に呆れてリカはまた卓の方を見た。

「あ、あの、何で出来てる物を壊すのですか？」

香奈は必死にそう質問した。

「え？」

リカは驚いて後ろを振り替える。香奈は相変わらず戸惑って、次の言葉が出て来ない。

「だってこんなドラも何も無い手を進めても意味無いでしょ！こういう時は降りて無理しないのが一番よ」
とリカは香奈にやさしく説明した。

「へー、桜井プロはドラが無いのか」

リカの上家がそうリカに話し掛ける。あわてて

「あ、もうこんなときに聞かないでよ！」

と言って卓上に戻った。

「ごめんなさいね。この子よくわからないものだから」

キョウカがあわててやって来て、お客さん達に謝る。

「香奈、もうこっちに来てなさい」

とキョウカが怒って香奈はカウンターの前に連れ戻された。

第102話 加減（前書き）

イベントですが22日の土曜日前にメールマガジンで天鳳の個室URLをお知らせします。だから参加希望の方はメールマガジンに登録お願いします。そして登録者全員に読み切り小説をプレゼントしますから、参加しない方もメールマガジンに登録してください。携帯からでもOKです。

太陽の子オフィシャルメールマガジン：<http://www.mag2.com/m/0001130151.html>

第102話 加減

香奈は無理矢理キヨウカにカウンターの前まで連れてかれた。

「香奈！対局中に話しかけたりしちゃ駄目でしょ。質問したいなら終わるまで待ちなさい」

キヨウカが香奈を叱る。そして

「香奈ちゃん、打ってる人に話し掛けたら、おじさまに怒られるわよ」

となおがやさしく香奈に言う。それを聞いてキヨウカはそんなこと言わないでとなおに目で合図した。

なおはキヨウカの合図に気付き、理由がわからないままその場は黙った。

香奈はなおにおじさまに怒られると教わったから、この場はおとなしくしていたが、もう打ってる卓のそばに寄ろうとしなくなった。

そんな状態になることをわかっていたキヨウカは小声でなおに

「香奈におじさまを使わないでよ、あの子加減わからないから」

と注意した。

「ごめん、今度から安易に使わないようにするから」

と言ってなおはキョウカに謝った。

お客さんが打ってる間は、普通はドリンクお持ちしましょうかとメニューには御用聞きの仕事があり、香奈はまだそれはさせてもらえなかった。

しかし、キョウカとしてはそれぐらい出来るようになってもらいたいと思っていたから、なおの言い方は逆効果だった。

しかも香奈はただでさえ動きが遅く反応が鈍いのに、今回の件ですます反応が遅くなった。

対局が終わったのを香奈自身を確認しないと仕事に取り掛からなくなっただけから。

キョウカに1卓終わったから片付けてと言われても、香奈自身が判別しないと、動かないのである。

香奈の心の中はおじさま>キョウカだから、キョウカよりおじさまに怒られないように香奈は努力するのであった。

第103話 他人事

香奈の判断が遅くなったとはいえ、サンフラワー的には何も影響が無かった。

急ぎの仕事は他のメンバーがやるし、香奈の判断が遅くなったのは、ゲーム中とゲーム後だけだから、取り分けて問題にはならなかった。

「リカ、もういいわよ。そこに次のお客さん入れるから」

キョウカは、リカの打ち方を香奈に見せる目的が失敗に終わったから、リカを客打ちから外すことにした。

終わった後、リカが次のお客さんが入れるように準備をして、香奈は何もすることなくただ見ていた。

「疲れたー！」

リカはカウンターのとこに来てそう嘆いた。

「リカちゃん強いわね。何でそんなに勝てるの？」

なおがリカに質問をする。これは香奈がリカに聞けないのをわかってるから、なおが代わりに聞いていたのだった。

キョウカもリカの強さの秘密を知りたかったが、先輩プロとしてのメンツがあるから、そんなことはリカに聞けなかった。

なおのきめ細かい配慮とは知らずにリカは、真面目に答えようと

「説明できるかわかりませんが、手牌に23と有って3を引いてきたなら、その局は前に出ないという感じです」

真面目に聞いていたなおはその理由がわからず、キョウカも同じくわからなかった。

そして香奈は他人事の様にまったく聞いてなかった。

「ちょっと香奈！リカが教えてくれるのだから、あなたもちゃんと聞いてなさい」

とキョウカは他人事の様に無関心な香奈を叱った。

第104話 リカの説明

キョウカに怒られ、渋々香奈はリカの話を書くことになった。

香奈が参加することになってリカは改めて話を始めた。

「23の時に、1とか4が来なくて、2とか3が来るのは1と4が他で使われてる可能性が高いから、この局は前に出ないという判断です」

リカは三人に懇切に説明する。

「リカちゃんの師匠はデジタルなんだ。私はそんな理屈並べられてもわからないわ」

なおはリカの言ってることが難しい理論だと思い、早々と匙を投げた。キョウカもわかってなかった。

「違います。師匠は逆にデジタルを否定してます。小さなデジタルの積み重ねが区分求積法みたいに、流れという曲線を証明していると、言ってます」

とリカがなおの判断を否定した。その返答はなおをますます混乱させ、なおはもう何も言わなくなった。

「師匠は勢いを重視してまして、先程の23の時にシャンテン数が変わらないものを自摸って来た時は、それだけ遅れてるから勝負をしないと判断します」

とリカは一生懸命説明する。しかし、なおはわからないと真面目に聞こうとせず、キヨウカはキヨウカで独自の理論があるからと話し半分に聞いていた。

逆に香奈は真面目に聞いていた。香奈は押し引きの基準はまったく持ってなかったから、何も書いてない画用紙に絵を書くようにリカの説明を受け入れた。

当然わかりやすい部分だけだが、それでも香奈にはものすごく参考になった。

「もう、いいわ。これ以上聞いてもわからないから」

キヨウカの号令でリカの説明はお開きになった。リカもこれ以上説明してもわかってもらえないと悟り、話をするのをやめた。

第105話 迷える子羊

リカの説明会がお開きになり、リカとなおは明日に備えて帰ることにした。

香奈はリカの話をも十分に理解してなかったが、初めて押し引きを知った。

ただ押し引きを知っただけで、それを勝ち負けに繋げることはまだわからなかった。

「香奈、強くないと給料が無くなっちゃうわよ」

とキョウカが香奈に話し掛ける。香奈は強くないと何故給料が無くなるのか意味がわからず、ただ黙っていた。

キョウカも香奈にはまったく期待していないから、そのまま香奈を放置した。

香奈は給料が無くなる仕組みがわからなかったが、無くなるのは困るから、どうしても強くなりたかった。

ただ強くなるの意味目的を十分理解してなくて、香奈は戸惑いそわそわした。

香奈は麻雀を入門書から学び、そこには麻雀が強くなる必要が書いてなかった。ただ明るく楽しくやることしか書いてなくて、メンバー向きの本では無かった。

香奈は給料が無くなるのは困るので、キョウカに麻雀が強くなる方

法を聞こうとした。

しかし、キヨウカに聞いたらまた怒られるかもしれないと思い、キヨウカの方を向いたが言葉が出なかった。

そんな何かを言いたそうな香奈を見て、キヨウカはもう帰りの時間かと思い

「香奈、もう上がっていいわよ。忘れ物無いようにね」

と言った。香奈はそんなことじゃないと言いたかったが、キヨウカが香奈の方を見ずに帳面を付け出したので、香奈は諦めて帰ることにした。

第106話 悩む香奈

帰りながら香奈は、麻雀を強くないと給料が無くなると心配して、強くなる方法を考えた。

しかし、香奈は麻雀をよくわかっていない。当然方法など思い付かなかった。

もう香奈に出来る方法の一つ、誰かに聞くことだった。

ただ人間関係が乏しい香奈には聞ける相手が居ない。サンフラワーの人達は教える気配が無くて、香奈は聞きづらかった。

そしてそんな香奈が思い付くのは“おじさま”だった。

（おじさまに麻雀が強くなれる方法を聞こう）

香奈はおじさまに質問できることをうれしく思い、早く帰ろうと足取りが早くなった。

歩きながらおじさまにアドバイスを受けてるところを想像していて、ふと香奈は突然立ち止まった。

（給料が無くなるからなんて言えない）

香奈はおじさまにそんな理由など言えなかった。言えばおじさまを心配させて、おじさまに迷惑を掛けることになる。

香奈はおじさまに麻雀が強くなる為の理由を言えなくなったので、

すぐに代わりの理由を言おうと考えたが、すぐには思い付かなかった。

そして香奈は他の理由を考えれば考えるほど、罪悪感で考えることが出来なくなっていた。

（他の理由だとおじさまに嘘をつくことになる）

香奈はおじさまに質問することをあきらめた。

家に帰り、お通夜のように暗く部屋に閉じ籠った香奈だが、プロ団体のパンフレットを見てあることに気付いた。

斎藤事務局長に聞くことだった。

第107話 電話でのやり取り

香奈は斎藤に聞けばいいと思い安心した。すぐに斎藤に電話しようと思ったが、さすがにまだ帰ってきていないと思い、今はあきらめた。

食事を取り、香奈はそろそろいいかと思い、緊張しながら斎藤に電話をした。

「はい、斎藤です」

「こ、小林で、す」

斎藤はすぐにはわからなかったが、このしゃべり方とは思いい、香奈だと気付いた。

「小林さんね。今日はどうしたの？」

「ま、麻雀が強くなりたいです」

「麻雀が強くなりたいか、それはいいことだね」

「給料無くなります」

「え、無くなるってどういうこと？」

「」

香奈は未だに給料が無くなる意味がわからないから、何も言えなかった。

「水野さんはどんな風に言ったの？」

「負けたら給料が無くなると」

「そうだね小林さんはメンバーだから、負けたら給料が無くなっちゃうよね。所で、僕なんかよりも水野さんや高木さんに教えてもら

った方がいいんじゃないの？

7

L

斎藤は教わるならキョウカかなおに教えてもらうつといいと提案したが、香奈は黙ってしまった。

斎藤は事情がよく飲み込めないが、キョウカやなおに頼れないと思
い香奈に

「それなら日曜日だけとお店に行こうか？」

「はい」

「十時頃に顔出すね」

「はい」

「僕も強くないからうまく教えられるいかも知れないけど、頑張つて小林さんを強くするから」

「はい」

「それじゃ日曜だね」

「はい」

斎藤は電話を切り、香奈も受話器を置いた。

第108話 斎藤の来訪

日曜の朝、香奈はいつも通りサンフラワーに向かった。

斎藤が来る来ないよりも、いつものごとくおじさまがサンフラワーに遊びに来てくれることだけを期待していた。

キョウカも香奈が休まない以上、サンフラワーに向かうしかなかった。

前までは自分自身でも集客に使うつもりで、サンフラワーに出勤していたが、十分過ぎるほど客数が定着してきたから、キョウカはもう集客の為に出勤する必要が無かった。

しかし、香奈が何をしでかすかわからないから、なおの居ない日には必ず出てくるしか無かった。

朝早く起きて、まだ寝ていたいのに起きて、キョウカはサンフラワーに向かった。

香奈はキョウカよりも早くサンフラワーに着いた。なおは休んで居なかったが、香奈はもうそのことに慣れたから、いつも通りの行動をしていた。

「おはよー」

眠たくて間延びした声でキョウカは挨拶する。目の前にいつもの香奈が居る。

（何でそこまで頑張れるの？）

キョウカは香奈を見て呆れる。香奈が休めばこのまま寝るために帰るのにと、不満に思いながらノートを見て売り上げをチェックした。

「いらっしやい。さ、斎藤さん！」

キョウカは突然の斎藤の来訪に驚いた。斎藤がわざわざサンフラワ―に来る理由は、断然香奈だった。

「香奈のことですか？」

キョウカはそう斎藤に聞いた。

「うん、小林さんが麻雀が強くなりたいというから、僕が指導に来ました。」

と斎藤は言った。

第109話 そんなに立派ではない

キヨウ力は斎藤の突然の来訪の理由を聞いて、顔を真っ赤にして

「香奈ー！何で斎藤さんが来ることを私に言わないのよ！」

と香奈を怒鳴った。その剣幕に斎藤は驚き慌てて

「水野さん落ち着いて、そんな風に怒ったら小林さんはもう僕に何も言えなくなってしまうですよ」

とキヨウ力をなだめた。

「斎藤さんすみません。香奈の為にご迷惑を掛けて」

キヨウ力は落ち着いて斎藤に謝った。

「逆ですよ。僕があなたに頼んだのだから、僕が謝るべきです」

と斎藤はキヨウ力を止めた。それを聞いてキヨウ力は斎藤に頼まれて香奈の面倒を見ていることを思いだし、冷静になった。

「水野さんに頼んで正解でした。彼女が麻雀を強くなりたいと思うのはかなりの進歩ですよ。他の女の子達はそんな気配はまったく無いですからね」

と斎藤はうれしそうに語った。

（香奈のはおじさまと打ちたいとかの不純な動機だから

）

キヨウ力は香奈もそんなに立派じゃないと言いたかったが、うれしそうに斎藤を見ると何も言えなかった。

「じゃ、小林さんを借りるね」

「は、はい」

「小林さん、あちらでお勉強しようか？」

斎藤が奥を指して香奈を誘った。香奈は頷いて斎藤に言われるまま奥の卓に向かった。

先程のキヨウ力の怒鳴り声が香奈を萎縮させていて、香奈はおどおどしながら卓に向けて歩いた。

そんな光景を見ながら、キヨウ力は香奈もそんなに立派じゃないと不満に思っていた。

第110話 禁句

キヨウカが斎藤の対応を不満に思っているときに入り口のドアが開き

「おはようございます」

と明るく言ってリカが入ってきた。キヨウカはリカを見て、この子の方が純粹に麻雀を強くなるうと思っているわよと愚痴をこぼした。

「キヨウカさん、おはようございます」

リカはキヨウカの気持ちを知らずに明るく挨拶する。

「あそこに斎藤さんが来てるから挨拶してきなさい」
いつもの厳しい顔でキヨウカはリカにそう指示した。

斎藤は香奈が麻雀に詳しくないのを知っていて、初歩的なことから教えることにした。

香奈は斎藤に受け入れ枚数とかの確率的なことを教わり、少しずつ上達していった。

「斎藤さん、おはようございます」

リカが斎藤に挨拶する。斎藤は驚き

「えと、君は？」

「今年入った桜井リカです」

「おお、名前は聞いてるよ。有望な新人だと話は聞いてるよ」

「ありがとうございます」「先輩方を押さえてトップだなんてすごいね」

「師匠が師匠ですから」

「え、師匠がいるのか?」「はい、プロ中のプロです」

トリカが言い終えた途端にキョウカが飛んで来て、リカを斎藤から引き剥がした。

リカは意味がわからずカウンターまで連れていかれる。

「あんた、プロ中のプロって斎藤さんの前で言わないでよ! 私達で麻雀プロを名乗ってる私達を否定しているってことになるじゃない」

とキョウカはリカを叱る。リカはキョウカが怒る理由がわかり、あわてて

「ごめんなさい、もう言いません」

と謝った。

第111話 ミラクルハンター

キヨウカは、これ以上リカを叱る必要もなく、斉藤に麻雀を教わる香奈を遠目に見ながら、休まなくて良かったと思った。

「私、あの光景を見て、おじさまが香奈に会いに来たのかと思いました」

とリカがキヨウカに話し掛ける。それを聞いてキヨウカは

「馬鹿ねえ、あの人斉藤さんじゃない。プロテストの面接の時に居たでしょ」

と呆れてリカに言う。キヨウカはリカの勘違いに呆れながら香奈と斉藤を見つめ直した。

（確かに見た目はおじさまと香奈ね）

キヨウカはリカの勘違いに図らずも同意する。

（本当に斉藤さんがおじさまかも！）

そうキヨウカは閃いて二人を見つめる。

（ミラクルハンター）

キヨウカは香奈があまりにも奇跡を起こすので、そう香奈を心の中で呼んだ。

香奈は斉藤に基本的なことを教わり、少しずつ麻雀がわかっていった。

斉藤も香奈には難しいことはわからないと思い、簡単な話に徹した。

指導は一時間ほどで終わり、斉藤は席を立ち、帰ることにした。

キョウカはあわてて斉藤を見送ろうとしたが、香奈の相変わらず淡泊な対応にイラつき、香奈を怒ろうとした。

香奈に向かって、斉藤さんがおじさまと言おうとしたが、思わず咄嗟に止めた。

（香奈が斉藤さんがおじさまだと知ったら　　）

斉藤がおじさまだったら香奈は斉藤に何をしでかすか？まだおじさまだと決まった訳じゃないから、キョウカは言うのを止めた。

第112話 プロ批判

斉藤が帰り、香奈はいつもの立ち位置に戻った。

キョウカは斉藤の指導結果を見ようと、香奈に本走をさせようかと思っただが、いつもの頼りない香奈だからあきらめた。

そして香奈の斉藤がおじさまではないという態度を見て、斉藤がおじさまであるうとなかるうともうどうでもいいわと

普段の仕事に戻った。

「さっきの、香奈ちゃん補習が何か受けてたの？」

一人の客が近くに居たり力に聞いた。

「あ、あれは香奈が麻雀が強くなりたいたからと斉藤事務局長に頼んで、斉藤さんがわざわざ来てくださったのですよ」

とリカは客に説明した。それを聞いた客は

「香奈ちゃん偉いよ。他のプロは遊ぶことばかりで、そういう努力を全然しないのばかりだよ」

と香奈を誉めた。リカはあまりの言い方に即座に反論したかったが、下手なことを言ってまたキョウカに怒られると思い、この場は思い留まった。

続けて他の客が

「そうそう、他の雀荘のプロなんか、よく明日はリーグ戦ですから頑張ってくださいってブログに書いてるけど、お前普段から頑張っていないだろと、思わず突っ込み入れたくなったよ」

と笑いながら相槌を打った。

相次ぐプロ批判にリカは気を悪くしたが、反論が出来ない。リカは気分を害し、この場に居られなくなって、すぐこの場から離れた。

このやり取りを遠くから聞いていたキョウウカは、この二人のプロ批判に憤慨し、二人の入っている卓に向かった。

第113話 キョウカの不服

客の側によりキョウカが

「木下さん、私達も勉強したり努力してます。みなさん知っているように、本走の負け分は自腹です。だから負けないようにみんな努力してます」

と力説した。それを聞いて木下は戸惑いながら

「この雀荘のプロの話じゃないよ。他の雀荘のプロのことだよ。このプロ達はみんな頑張っているのわかってるって」

とあわてて弁解した。キョウカはこれ以上言う必要もなく、店の雰囲気悪くしない為に

「わかってもらえばいいです。確かに私達にも至らないところがありますが、決して手を抜いているわけではないことをわかってください」

と謝るように言った。そのキョウカの態度に客達は感心し、もう何も言わなかった。キョウカもゲームの邪魔をしないよう、無言でカウンターに戻った。

カウンターに戻ったキョウカは疲れと溜め息を付きながら、香奈を見た。香奈は相変わらずおじさまのことを思いながら立っているみたいだった。

（何でこの子ばかり評価されて、私達が評価されないのかしら？）

キョウカはそう心の中で思いながら、不満げに仕事を続けた。

女流Bリーグの日が来た。香奈はリーグ初参戦だった。女流Bリーグには香奈の他になおとりカが参加していた。

女流Bリーグの立ち会いは普通は男子プロが行うが、今回は新人指導の名目で、女流Aのキョウカが立ち会うことになった。

キョウカは、話を受けた時は店の都合もあるから、断るつもりだった。しかし香奈が出る以上、仕方なく引き受けることにした。

第114話 女流リーグ初日

女流Bリーグ当日、香奈は普通に会場に向かった。香奈は別にリーグ戦を勝ち上がりたいとは思っていない、ただおじさまに頑張っている姿を見てもらいたいだけだった。

会場の雀荘に到着し、中に入ると男二人とキョウカが慌ただしく動いていた。

この光景は研修の時に見たから、別に驚かなかった。

「香奈ちゃんこつちよ」

その声はなおだった。なおはリーグ戦だからと正装で居た。そばにはリカも居る。香奈は安心してなおの側に行った。

リカは香奈が普段着のままリーグ戦に来てることに呆れた。

「香奈ちゃん、あちらで受け付け済ませて来なさい」

なおが香奈を受け付けに案内する。香奈は受け付けに向かい、受付の男子プロに

「こ、小林香奈です」

と震えるように言った。

「小林さん、団体の会費五千円とリーグ戦参加費の五千円で合わせて一万円です」

と受付の男は香奈に言った。それを聞いて香奈は驚いた。研修は三千円だったのにいきなり一万円にまで跳ね上がったからだった。

しかし、香奈は不服だと言えるわけもなく、黙って財布の中から一万円札を出して、受け付けに払った。

男はそれを受けとり、香奈に

「小林さん四卓ですから、そこに座ってお待ちください」

と香奈を案内した。男に言われ香奈はあわてて四卓を探す。四卓は見つかったが今度はどの椅子にすわればいいのかわからなかった。

香奈が四卓の前で立ち往生している間に、他の三人が座ったので香奈は残りの一席にちょこんと座った。

第115話 女流Bリーグ開始

香奈は借りてきた猫のように席に座っておとなしくしていた。なおもり力も指定の卓の席に座り、開始を待った。

そして女流Bリーグ戦の立ち会いの責任者がマイクを持ち、挨拶を始めた。

挨拶を聞きながら、香奈は配られた用紙に目を通して、ルールを確認する。

しかし、初めてなので香奈はルール、マナーを十分に理解できなかった。

立ち会い側に立ちながら、キョウウ力は香奈を監視する。立ち会いなどしたくなかったが、香奈を見てると危なかつしくて、逆に立ち会いに来てよかったと思った。

挨拶が終わり、各卓で場所決めが始まった。香奈は場所の決め方がわからない。他の同卓者達は香奈のことを無視して、各自に決まった場所に移動した。

香奈は申し訳なさそうに空いた席に座る。するとすぐに親決めが始まった。場所決めて東を引いた者がサイコロのボタンを押した。

そして起家マークが香奈の目の前を移動する。香奈は何が起こっているかまったくわからない。ただおとなしく黙ったままだった。

「それでは始めてください」

立ち会いの責任者の号令で女流Bリーグがスタートした。

「よろしく願います」

卓上で同卓者達が挨拶した。遅れながらも条件反射的に香奈も

「よ、よろしく、願います」

と同卓者達に挨拶した。この香奈のどんくさい動きに同卓者達は怒りに達していた。

まして、香奈はリーグ戦なのに正装しないで普段着のままで、まるで遊びに来ているように見えていた。

第116話 観戦者不在

キョウカは香奈が心配だったが、いつもと変わらない感じで打ち始めたから、安心して他の新人の様子を見ることにした。

香奈はおじさまが来ていれば緊張したかもしれないが、観戦者はおじさまどころか誰も居なかった。

女流Bリーグはプロ野球でいえば二軍みたいなものだから、人気がなく観戦者が少なくても仕方がなかった。

と言いたいところだが、Aリーグも観戦者が少ないか、一人も居ない状態だった。

麻雀は囲碁や将棋と違って観戦には不向きなゲームである。またにも観戦するなら選手の真後ろに立たなければならず、それは競技の邪魔になる行為だった。

テレビとかならば遠くからカメラを使い全部のシーンを撮れるから、番組として成り立つことは出来るが、一個人では観戦の能力には限度があり、またにも観戦が出来なかった。

それで観戦者が無理に観戦しようとしてマナー違反を起こし、トラブルになり、観戦を禁止する団体も出てきた。

そして一番の問題は、リーグ戦の結果を知りたがるファンが、あまりにも少ないことだった。

女子プロ達の雀力がとてもプロといえるレベルではなく、大多数の

麻雀ファンにリーグ戦自体価値が無いと思われるからだった。

観戦者が居ないから、リーグ戦は団体内のパワーゲームが幅を効かせていた。

香奈はおじさまが居なくてもいつ来るかわからないと、気を落とさずに麻雀を打った。

そして順調にあがりを重ね、先輩プロ達の不評を買っていた。

第117話 集計

女流Bリーグは降級が無く、最終順位も次のリーグではリセットされて全員横並びになるから、意味が無かった。

順位はすべてポイント数で決まるから、昇級を狙う人達は、素点を叩こうとしていた。

しかし、香奈は昇級に興味が無く、自己流の麻雀で安く上がり、先輩方のあるチャンスを潰していた。

オーラス、逆転を狙う先輩方を尻目に香奈は安く手を仕上げ、トップを取った。

香奈は点棒を受け取った後、目の前に集計用紙を投げられた。驚き戸惑う香奈に先輩方は

「あんたトップなんだから、あんたが集計しなさい！」

ときつく言い放った。香奈は集計などしたことが無いから、どうしていいかわからない。他の二人も香奈に教えようとはしなかった。

この時、キョウカは他の卓を見ていて、香奈のトラブルには気付かなかった。

そしてそばに居た立ち会いの男子プロは、女達の争いに巻き込まれないように、戸惑う香奈を無視した。

香奈はおどおどしながら、目の前の集計用紙を見ながら、何も出来なかった。

「いいわよ、私がやるから」

一人がそう言って香奈から集計用紙を取り上げた。

「集計出来ないならもうトップを取らないでくれる！」

このきつい一言を香奈は震えながら受け入れる。

「で、あなた何点？」

集計用紙を持った先輩プロから嫌みに質問されて香奈は

「よ、四万、三千、八百」

香奈はびくつきながら点棒を申告した。

集計しようとした先輩プロは香奈がトップなのが気に入らず、香奈の点数を過小に記入しようと思ったが、

他の二人の目があるから、いじらずそのまま記入した。

第118話 異変

集計が終わり、次の対局の準備が始まる。同一メンバーで四回対局するから、香奈はこの三人からは逃れられなかった。

場所決めから始まり、香奈は震えながら空いてる席に座った。

そして対局が始まり、香奈はいつも通り手を進める。

キョウカは香奈を見るために香奈の後ろに回った。

（いつもの香奈じゃない！）

キョウカは香奈の異変に気付いた。いつもなら鳴く所を鳴かずに見送ったからだった。

香奈が鳴かなかったから対面がテンパイしリーチをした。香奈はリーチに対してベタ降りした。

（鳴かないから対面が張ったじゃないの！）

キョウカは心の中で怒った。その局は流局し、香奈はノーテン罰符を払った。

次の局、香奈は面前でテンパイした。

（香奈、リーチしなさい。リーグ戦なんだから点数を稼がないと駄目でしょ！）

キョウカは心の中でそう思う。キョウカは対局者に中立な立ち会いだから、香奈にアドバイスしたくても出来なかった。

しばらくして当たり牌が出た。香奈はそれをスルーして山に手を伸ばした。

（ちょっと、何やってんのよ！当たり牌が出てるじゃない）

香奈の見逃しに、キョウカは思わず声が出そうになった。

香奈は何事も無かったように自摸り、そして切った。キョウカはずつと香奈の後ろに張り付く。

二回目の半荘が終了した。香奈はあがるどころかノーテン罰符すら貰おうとしなかった。

キョウカはすぐに香奈を問い詰めたかった。しかし、立ち会いは対局者と戦術面での話が出来ないから、ぐつと我慢した。

第119話　なおの説教

香奈は同卓者に“集計が出来ないならトップを取らないでよ”と言われたから、震えながら点棒を貰う行為をすべて拒否していた。

キヨウカはそんなことがわからず、香奈を助けることが出来なかった。四回戦すべてが終わり、各自のポイントが集計されていく。一回目とはいえ、みんな順位に一喜一憂していた。ただ香奈はその中に入らず、一人ぼつりと座っていた。

そしてキヨウカは全体の集計に追われて、香奈に何も問い質すことが出来なかった。

終わりの挨拶が始まり、立ち会いの責任者から次のリーグ戦の日程の話があつて、リーグ戦は閉会した。

キヨウカは香奈に先程の事情を聞こうとしたが、香奈は会場を走って出ていった。

キヨウカが驚き戸惑っていると後ろから

「ちょっとあんたたち！」

と大きな声が聞こえてきた。声はなおだった。

キヨウカがあわてて後ろを見るとなおは続けて

「香奈は新人なんだから、あんたたち先輩がやさしく教えないと駄

目じゃないの！」

と先程の香奈の同卓者を叱り付けた。

「なおさん、リーグ戦ですよ。勝つ為ならあれくらい普通ですよ」

と同卓者の一人が反論する。それを聞いてなおは

「何言ってるのよ！あんたたち競技プロならフェアに闘いなさいよ」

とさらに怒鳴り付けた。しかし同卓者三人は聞き入れようとせず

「なおさん、あの子に指導している人誰ですか？悪いのは私達ではなく、あの子を指導している人ですよ」

と悪びれることなく反論した。

第120話 悔やむキヨウカ

三人の同卓者達は、自分達は悪くないと、香奈を指導している人に責任転嫁をして、非を認めようとしなかった。

「あの子の指導をしているのは私と事務局長の斎藤さんです。指導に文句があるなら私に言いなさいよ！」

三人はその声に驚き、後ろを見た。キヨウカだった。

三人はキヨウカを恐れて何も言えない。一人があわててその場を離れると、他の二人もあわててこの場を離れた。

「なお、ありがとう」

キヨウカがなおに先の三人を叱ってくれたことにお礼を言う。

「こちらこそキヨウカさんがいてくれたお陰で。何かリーグ戦で殺気立ってて、さっきみたいに新人を虐めてまで勝とうとする人が居るのよね。ほんとキヨウカさんが居なかったらどうなることやら」

となおはほっとしながらそう語った。それを聞いてキヨウカは斎藤に済まないと思った。

斎藤がキヨウカに立ち会いを頼んだのは、そういう先輩面をして新人に冷たくあたる輩から新人を守るためだった。

斎藤は、モラルの無い一部の女子プロのことをキヨウカに言えず、ただキヨウカに期待して頼んでいた。

キヨウカは聞いてなかったとはいえ、期待に応えられなかったことを悔やんだ。何より一番守らなければならない香奈を守れなかったことを激しく後悔した。

キヨウカは香奈を心配しながら会場を後にした。友人と待ち合わせしていたから。

そしてサンフラワーにも寄らずに待ち合わせの場所に向かった。

第121話 取材

待ち合わせの場所は「やはぎ」という居酒屋だった。

キヨウカは店に入り、待ち合わせの相手を探す。

「キヨウカ、こっちよー」

奥からキヨウカを呼ぶ声がした。その声に反応してキヨウカは声のする場所に移動した。

「遅いわよ、もう勝手に注文したから」

そう言つてキヨウカを出迎えたのが、新鋭の女性週刊誌「Candy」の編集長の長沢知美だった。

キヨウカは長沢のわがままっぷりに呆れながらも、黙ってテーブルを挟んで長沢の対面に座る。

「キヨウカ、何かいいネタ無い？キヨウカのことでもいいから」

長沢は早速自分の雑誌に使えるネタが無いかキヨウカに聞いた。

「あるわけないでしょー」

キヨウカは長沢の唐突な質問に呆れてそう返した。

「キヨウカは結婚しないの？」

長沢はキヨウカにしつこく質問をする。キヨウカは呆れながら

「そんな暇なんか無いわよ！店のこととか、新人の面倒まで見なきゃならないのに」

と返した。

「へえ、キヨウカも新人の面倒をみるんだ」

と長沢は変に感心する。キヨウカは愚痴をこぼすように、香奈の面倒をみてることを事細かく説明した。

「ちよつと、それいいじゃない！取材してもいい？」

目を輝かせて長沢がキヨウカに迫る。キヨウカは何で香奈なんかと呆れながら

「べ、別に良いわよ」

と取材を了承した。

「ありがとう、じゃあ明日編集部員をサンなんとかに派遣するから」

と香奈が女性週刊誌に取材されることになった。

その頃香奈は部屋で、中学時代に登校拒否になったことを思い出しながら、二度と女流リーグには参加しないと涙を流しながら思っていた。

第122話 求める香奈

記事のネタを確保した長沢は、上機嫌でキョウカとくだらない話を始めた。

キョウカも落ち込んだ気分を一新するつもりで、話しに付き合い、その場を楽しく過ごした。

店を出て、長沢と別れたキョウカはふと香奈が気になった。

（明日、サンフラワーに来るのだろうか？）

香奈がショックでプロ団体はおるか、サンフラワーまで出て来なくなるのではと、不安になった。

ただキョウカは、香奈にはプロは無理だから、このまま普通の生活に戻った方がいいと、寂しく感じながらも、香奈の幸せを願った。

次の日の朝、キョウカは歪んだプロの風紀を正すつもりで、サンフラワーに向かった。

店に着くなり、店内に厳しい目を光らせる。まず店内からと、キョウカは自分自身に厳しくした。

気合いを入れて、卓の出入りのノートを見ると入り口のドアが開き

「お、おはようございます」

と弱々しい声が聞こえてきた。香奈だった。香奈は今日も休まずサ

ンフラワーに來たのだった。

キョウカは驚き香奈を見る。香奈はいつもより生気が無かったが、目は誰かを探すように生気があった。

（この子、おじさまを求めてここに來たのね）

キョウカは香奈を見てそう感じた。昨日のリーグ戦の事で斉藤が香奈を心配して、ここに来るかもしれないと、キョウカは思い香奈に

「香奈、あの三人には私とのおできつく言っといたから、もう安心してリーグ戦に出てくればいいから」

と香奈を諭した。

第123話 心配される香奈

香奈はキョウカにまたリーグ戦に出るように言われたが、まだ不安で返事が出来なかった。

そんな弱々しい香奈にキョウカは

「リーグ戦に出て来なかったらおじさまが心配するわよ！」

とさらに香奈を説得した。そうキョウカに言われて香奈はあわてふためき

「わ、私出ます。リーグ戦に出ます」

とキョウカに訴えた。それを聞いてキョウカは安心して

「大丈夫よ。あなたの籍は残ってるから心配しなくてもいいわよ」と過剰に心配する香奈をなだめた。

「おはようございます」

間の抜けた挨拶でリカが入って来た。リカはいつもと変わらぬ香奈を見て、昨日は大したことなかったのかと感じた。

リカの視点からは、昨日の事は、香奈が走り去っていき、その後なおが香奈と同卓した三人を叱り付け、その後キョウカも三人を叱っていたように見えていた。

リカからしてみれば香奈がプロとしてリーグ戦に居る方がおかしかった。だから香奈と同卓した三人に、二人に怒られたことに理不尽なことだろうと、少なからず同情を感じていた。

しばらくしてドアが大きく開き

「香奈ちゃん！」

と言ってなおが入って来た。

（え、なおは今日は休みなのに）

キョウ力はなおの突然の来訪に驚いた。なおは香奈を見つけると

「香奈ちゃん大丈夫？」

と心配して香奈に声を掛けた。香奈は突然のことにどうしていいかわからない。香奈は戸惑いながら何も言えなかった。

第124話　なおの指導

突然のことに戸惑う香奈になおは

「香奈ちゃん、あいつらには私とキヨウカさんが怒鳴り付けといたから、安心してリーグ戦に出てきてよね！出てこないとおじさまが心配するわよ」

と香奈を励ました。

（私と同じこと言ってる）
と近くで聞いていたキヨウカは苦笑した。

「香奈ちゃん、またトップを取った時の為に姉さんが集計の仕方を教えてあげる。キヨウカさん、香奈ちゃん借りるわよ」

となおはキヨウカに聞いた。

「いいわよ」

とキヨウカが返事をして、香奈は店の奥でなおの指導を受けることになった。

（なおったら、休みなのに香奈の為に来てくれたのね）

キヨウカはなおを見つめながら、自分の代わりに香奈を指導してくれるなおに感謝した。

「お、香奈ちゃん偉いなあ。また勉強か？」

客の山下が二人を見て、そうキョウカに話し掛けた。

「ええ、トップを取ったらトップ者が卓上の集計をするから、香奈も集計出来るようにならないと」

とキョウカが答える。

（何で香奈ばかり）

リカは香奈ばかり誉められるのを不快に思った。リカからみれば、香奈はリーグ戦が始まる前から、その程度のことぐらい努力してマスターしていない怠慢な人物だった。

「こんにちは、C a n D a yから来ました」

一人の女性がそう言ってサンフラワーに入って来た。キョウカはすぐに取材だとわかり

「どうぞ」

と言って雑誌の記者を受け入れた。

第125話 取材開始

「あの、小林香奈さんはどちらの方でしょうか？」

女性記者は香奈が誰かわからないから、カウンターに居たキョウカに聞いた。

「ちょっと待ってください！」

キョウカは女性記者にそう言って、取材を待ってもらい、香奈に取材を受けるかの確認を取ることにした。

「香奈、女性向けの雑誌からあなたに取材が来てるけど、取材を受ける？嫌なら取材を受けなくてもいいわよ」

とキョウカは奥でなおに指導されている香奈に言った。

そう言われて香奈は返答に困った。香奈は事態をまったく理解してなくて、どうしていいかわからなかった。

「香奈ちゃん、よかったじゃないの！取材を受けなさいよ。雑誌に載ればおじさまが香奈ちゃんを見つけてくれるかも知れないわよ」

となおが香奈にアドバイスをした。それを聞いて香奈はキョウカに

「わ、私、取材受けます」

と言ってそわそわしだした。

「じゃあ取材してもらうつわよ。記者さん、香奈はこの子です」

キョウカは記者に香奈を教え、カウンターに戻りだした。

（斉藤さんが女性週刊誌なんか読むわけ無いでしょ）

キョウカは記者と擦れ違いながら、香奈の態度に苦笑した。

記者は香奈に軽く会釈して、自分の名刺を渡した。香奈は名刺を受け取りながら緊張して震えていた。

対人恐怖症と取材の緊張感で香奈の心臓は、今にも破裂寸前だった。

記者は経験が浅いせいか、香奈の状態にまったく気付かず、普通に質問を始めようとしていた。

第126話 質問攻め

記者は落ち着きながら香奈に

「麻雀のプロになった動機は？」

と聞いた。簡単な質問だけど香奈は

「お、お、おじさまが麻雀のプ、プロだから、わ、私も麻雀のプロに・・・」

と最初から言葉に詰まった。

記者は香奈が喋るのを待ったが、香奈は緊張の為何も言えず、下を向いた。

「それじゃ、私帰ります」

なおはそう言ってキョウカに挨拶する。

「なお、ありがとう」

そうキョウカはなおに返した。

「いえいえ、私がつとしっかりして、先に教えていれば、香奈ちゃんにあんなつらい思いをさせなかったのに」

と自戒した。

「指導は私の担当だから私が悪いのよ」

とキョウウ力はなおをかばう。しかしなおは

「キョウウ力さんは全体的なことやお店のこともあるし、それに後輩の指導は先輩の務めですから」

とキョウウ力に言った。キョウウ力はこれ以上なおに言えず

「今日は本当にありがとう」

となおに礼を言った。

香奈は何も言えず黙ったままだった。記者は新に質問をすることにして香奈に

「おじさまはどんな人ですか？」

と聞いた。その問いに香奈は

「お、おじさまは太陽です。私達を照らしてくれる太陽です。だから私は太陽の子供です」

質問に香奈はそう強く訴える。ただそれでは記者は香奈とおじさまの関係がわからない。記者は香奈に

「おじさまはあなたにどんなことをしてくれましたか？」

と聞いた。その問いに香奈は

「し、質問に・・・」

と香奈はテンパって言葉が続かなかった。

第127話 取材が中止に（前書き）

スマートフォンに変えたら、操作に手惑い、執筆が遅れました。

第127話 取材が中止に

香奈が取材を受けているのを見てリカはため息を付きながら

「あたしも取材が来ないかな」

とつぶやいた。それを隣で聞いていたキヨウカはリカに

「あんたは麻雀で取材を受けなさい」

となだめた。そう言いながらキヨウカはふと香奈の方を見る。遠くから見ても香奈は緊張して、落ち着きが無く、キヨウカから見ればとても危なく感じた。

キヨウカはすぐに香奈の元に行き、心配して香奈に

「どうしたの？」

と声を掛けた。

「わ、わたし、おじさまに質問して、お、おじさまは……」

と香奈はキヨウカの問いに答えて無く、拳動がおかしかった。キヨウカはすぐに駄目だと思い

「すみません、この子知らない人が苦手で、うまく話せないから、取材はこれで終わらせて貰えないでしょうか？」

と記者に頼んだ。記者も香奈の状態からいって取材にならないから

キョウカに

「一度編集長に相談してみます」

と言って携帯を取り出して電話した。その間、キョウカは香奈を記者から引き離し、落ち着かせることにした。

「香奈、取材が駄目になっても気にしないでいいわよ！おじさまが女性週刊誌なんか読む訳無いから、雑誌に載っても載らなくても一緒よ」

とキョウカはそう言っ、香奈が取材が駄目になっても落ち込まないようにした。それを聞いて香奈は安心したが、すぐには動悸が治まらず、顔を真っ赤にして何かを言いたそうな感じだった。

「OK出たので、取材は中止します」

記者はそうキョウカに言っ、取材を中止した。

第128話 七夕杯

取材が中止になりキョウカはほっとした。ただ香奈は事情がうまく飲み込めずに、緊張したままだった。

「ごめんなさいね、この子も取材のこと今日初めて知ったくらいで、心の準備が出来て無かった物で」

とキョウカは記者に謝罪し、編集長の長沢のことなどの世間話を記者として、記者はサンフラワーを後にした。そしてキョウカは一人取り残された香奈を見て

「香奈、取材は中止にしてもらったから、もう大丈夫よ。だから落ち着いたら、いつものように仕事に戻って頂戴」

と言ってカウンターに戻った。香奈は取材が中止になったことが、少しショックで落ち込んだ。ただ今回は中止だけど、また次に取材が来ると勝手に思い、今度はうまく受け答え出来るようになるうと思ひ、少しは元気が出て来た。そしていつもの香奈として仕事に励んだ。

次の日の朝、キョウカは憂鬱だった。団体の主催するイベントの七夕杯が近付いてたからだ。七夕杯とは男子プロと女子プロをグループ化して両グループから二名選出して決勝で対戦するイベントである。

予選はトーナメント制で女子プロは人数が少ないから一日で終わるのだが、店の主力メンバーがその日は抜けることになるから経営的には痛かった。

キヨウカも参加したい性質だから、他者の参加を止められなかった。
キヨウカは各自の七夕杯の出欠を確認をする為にサンフラワーに向
かった。

第129話 出欠

「おはよう」

キヨウカはサンフラワーに入ると朝の挨拶をして、カウンターに入り、売り上げを確認する。

「おはようございます」

遅れてなおが入って来た。

「ねえなお、あなた七夕杯に参加する？」

キヨウカがなおに聞く。

「参加するする。だからキヨウカさん、その日は休ませてください」
「と言ってなおは七夕杯に参加を表明する。」

「分かったわよ、なおは参加ね」

とキヨウカはなおが出るに丸をした。

「リカちゃんも参加するのかなあ？」

「さあ、あの子も気分次第だから」

「リカちゃんが出たら梓は一名だけになっちゃうから」

となおはリカの強さからいって、決勝に残るのは確実だと思っていた。

「おはようございます」

眠たそうにリカが出勤してきた。

「リカ、あなた七夕杯に出る？」

キョウカがリカに七夕杯の出欠を聞いた。

「出ていいなら出ますけど」

「じゃあ参加ね」

キョウカはリカにも参加の方に丸をした。

（後は香奈ね）

キョウカは香奈にも七夕杯の出欠の確認を聞くことにした。

しばらくして香奈が出勤してきた。

「お、おはようございます」

相変わらずか弱い声での挨拶である。

「香奈、あなた七夕杯に出る？」

キョウカが香奈に出欠を聞く。香奈は七夕杯のことが分からず、答

えようがなく黙った。ぐずぐずして答えられない香奈に対してなおが

「香奈ちゃん、決勝まで残れば男の人達と打てるから、おじさまと打てるかも!」

と香奈を煽った。

「なお、おじさまが決勝に残ると限らないのだから、変なこと香奈に言わないでよ」

となおの言ったことに対してキョウカがなおを叱った。

「ごめん」

すぐになおがキョウカに謝った。

「わ、私出ます」

香奈が力強く参加表明をした。

「おじさまと打てるとは限らないわよ!」

キョウカがあわてて香奈に問い質す。しかし香奈は黙ったまま参加を辞退しなかった。

第130話 練習の為に

香奈が参加を辞退しないので、キョウカはもう何も言わずに香奈を七夕杯に参加させることにした。香奈はおじさまと打てる打てないよりも、おじさまに頑張ってる姿を見てもらいたくて、七夕杯に参加することになっていた。

キョウカは三人が出るから、自分は店の為に参加を見送ろうと考えたが、香奈の面倒を見なければならぬと思い、

「あたしも参加するから、その日はもうお店をお休みにしようかしら」

と他の三人に笑顔で言った。

「チームサンフラワーとしてみんなで頑張りますよー！」

とリカが嬉しそうに掛け声を上げたがなおが

「あら、対戦したら全員敵なんだから、リカちゃんといえども容赦しないわよ」

と笑顔でリカをけん制した。

「そうよ、同卓しても仲良く出来ないから。組んできると思われないように、同卓したら落とす気持ちで打って頂戴」

とキョウカは本気でけん制した。そんな三人の会話を無視して香奈は、ただおじさまに見てもらったことを考えていた。

キョウカは香奈が七夕杯に出ることになったので、練習の為に本走させることにした。

（香奈も一応プロなんだから、いつまでも甘やかす訳にはいかないわ）

そう思い、キョウカは次空きそうな卓を見つめた。

「一番卓ラストー！」

なおがそう叫んで、一番卓が終わったことを告げ、次のゲームの準備を始めた。なおは空いた席に本走として入る為に、自分の籠を取りにカウンターに来た。

「あそこには香奈を入れるわよ」

キョウカはカウンターに来たなおにそう伝えた。

第131話 進歩した香奈

なおはキョウ力の判断を不思議に思いながらも、香奈に本走をさせるのもいいかなと思い、素直に頷いた。

香奈は誰かがそこに入ると思い、次の半荘を始める為の準備をしていたが、誰も来ないので香奈は戸惑った。誰も入らないので、リ力があわててそこに入ろうとするとキョウ力が

「香奈、そこに入って」

と香奈に指示をした。突然のことで香奈は驚き戸惑い続けたが、なおが香奈の籠を持ってきて

「香奈ちゃん、麻雀を打って頑張って勝ってね」

と香奈を励ました。なおに言われて香奈はやっと本走をすることになったことに気付き、席に座った。とはいえ香奈は本走だと分かって無く、言われたから麻雀を打っただけだった。

香奈が座ると客達はすでに準備を終えていて、三人ともよろしくお願いしますと挨拶をした。

「よ、よろしく、お、お願いします」

あわてて香奈も挨拶をする。その光景はとてもプロとは言えず、キョウ力は香奈を見て呆れていた。

対局が始まると香奈は常連に指導される初心者みたいに、周りに気を使われながら打ち始めた。そんな香奈をキョウウ力は後ろで見えていたかったが、他の卓で動きが有り、香奈を見ている余裕が無かった。

香奈は最初こそ動作が緩慢だったが、いざ麻雀が始まると普通に打っていた。店ではリカの後ろで見て居たり、家で練習をしていたから、問題無く麻雀の方は進行した。

香奈は麻雀の勝ち方を理解した訳では無かったが、うまく打ち回して、現時点でトップだった。

第132話 無事本走を終えて

現時点でトップの香奈だが、他の客達も負ける為に打ってるわけではないので、逆転をしようと攻勢に出て来た。

今まで香奈の鳴きに振り回されていたが、今度は他の客達が鳴いて仕掛けて、あがりに向かい始めた。

香奈は上達したとはいえ、まだまだ他の人達には及ばないから、ずるずると点棒が削られ始めた。

南三局、ついに香奈はトップの座から落ちた。香奈は逆転されたとはいえ、さほど気にしていなかった。香奈からしてみればトップで無くても良くて、ただおじさまに頑張ってる姿を見せれば良かった。負けたら自腹で勝ったら利益になることも理解して居なくて、ただ平然としていた。

キョウカは香奈が勝とうが負けようが関係なく、問題無く卓が進めば良いと思っていて、実際、何も問題無く進行していたから、香奈のことを見ていなかった。なおも香奈がラスを引いても、給料で十分払えるからと全く気にしていなかった。

南四局、香奈はいつもと変わらず、ただあがることを考え、鳴いて手を安くしてあがった。香奈は手作りを知らないから、手成りで仕上げ、二着を自力で決めた。

清算になり、香奈はトップ者から勝ち分に相当する分のカードを貰った。これはカウンターで換金できる代物だと香奈は知っていたが、メンバーは換金していなかったから、香奈からしてみればただの力

ードだった。

香奈は知らなかったが、このカードの増減をメンバーは給料で清算しているから、今回の勝ちで香奈の給料は増えていた。

二戦目に入ろうと香奈は次の半荘の準備をし出すと

「香奈、いいわよ」

とキョウカが言って香奈を卓から外して、自分がそこに座った。

第133話 必死な香奈

香奈は連続して打ちたいと思っていないから、他のメンバーと同じように自分の籠を持ってカウンターに行った。

カウンターでなおは香奈から香奈の籠を受け取り、中身を確認した。

「香奈ちゃん、良かったね。中身が増えてるからおじさまが褒めてくれるわよ！」

となおはそう言っ、香奈にねぎらいの言葉を掛けた。それを聞いて香奈は、なおが確認した籠を持って、再び麻雀を打とうとした。

しかし、すべて埋まっているから香奈は打つことが出来なかった。それでキョウウカに代わってもらおうと、キョウウカの後ろに張り付いた。それを見てなおがあわてて香奈をカウンターに連れ戻した。

「香奈ちゃん駄目でしょ、他の人の迷惑になるでしょ！」

そう言っ、なおは香奈を叱る。しかし香奈は

「わ、私、もっと増やしたいです」

と反省の色無くなおにそう訴えた。その態度になおは呆れて

「香奈ちゃん、私達メンバーはお客さんに気持ち良く打ってもらえるように仕事をしているのであつて、カードを増やす為じゃないの！おじさまだつて香奈ちゃんがカードを増やすことよりも、お客さんの為に仕事をする方を願っているわよ」

と香奈をたしなめた。そう言われて香奈はもうカードを増やそうと
考えずに、いつもの位置に戻り、待機を始めた。

なおもこれ以上香奈に言うことが無いので、普通に業務に戻った。
キヨウ力は一連の出来事を麻雀を打っていたから気付かず、なおも
話すほどのことでもないからと、キヨウ力に黙っていた。

第134話 失敗した香奈

キヨウカは新たに来店したお客さんを自分の席に案内してカウンタ―に戻った。香奈が何事も無かったように立っているの、キヨウカは安心して業務に戻った。この時香奈はおじさまに褒められなくて、何か仕事をしたかったが、何をしてもいいかわからず戸惑っていた。

いつもなら勝手に考えて行動するが、さすがにキヨウカに怒られまくりで、香奈は自発的に行動しなくなっていた。それで香奈はキヨウカに命令されるのを待っていた。

しかし、キヨウカは香奈に頼む仕事が無く、逆に動いて欲しく無いという気持ちが強かったから、何も命令しようとしなかった。

卓が順調に動いている間はメンバーは仕事が無く、なおもりカモカウターのそばから離れなかった。

「ホットブラック!」

お客さんからコーヒーのホットのブラックの注文が来た。

「はい!」

そつなおが返事をして、コーヒーの準備をしようとした。そして遅れて香奈がコーヒーを入れようと動き出した。突然の香奈の行動になおが戸惑い

「え、香奈ちゃんどうしたの?」

と言ってなおが手を止めた。

「コ、コーヒー」

香奈がそう答えて、なおの代わりにコーヒーを入れようとした。なおは驚き、香奈の行動を見守った。

香奈はコーヒーを入れようとするが、量の加減が分からない。

「ちょ、ちよつと入れ過ぎよ!」

カップにインスタントコーヒーの粉を入れ過ぎた香奈をなおが注意する。その声にあわててキョウカが飛んできた。香奈はなおに注意されておろおろになってカップの前に佇んだ。

第135話 なおのミス

キョウカは香奈がコーヒーの粉を入れ過ぎたのを見て、顔を真っ赤にして

「ちょっと香奈！、あなた分からないなら勝手にやらないでよ」

と香奈を怒鳴った。

「は、はい」

キョウカに怯えながら香奈は返事をする。

「なお、急いで代わりのカップに入れて出してあげて」

そうすぐにキョウカはなおに指示した。なおはキョウカが何故ここまで怒るか分からず戸惑いながらも新しくコーヒーを入れて、お客さんの所に持って行った。

キョウカが激しく怒ったのは、香奈が真面目にメンバーをやりたくてコーヒーを入れようとしたのではなく、またおじさまに入れてあげる為の“練習”という気持ちでやっていると思ったからだった。

おじさの為という不純な動機で大事なお客さんに迷惑を掛ける、キョウカはそのことに腹が立っていた。

この光景を遠くから見ていたリカは、キョウカがさすがにやり過ぎだと思いながら、香奈の仕事意識を持つとうとしない感覚に嫌悪感を抱いていた。

不機嫌なキヨウカとキヨウカに怒られていつもの位置に縮こまって立っている香奈をなおは何かしようと言った。

「香奈ちゃん、何で私の代わりにコーヒーを入れようとしたの？」

と香奈に聞いた。その質問に香奈は

「み、みんなが喜ぶようなことをすれば、お、おじさまが喜ぶと思いますし・・・」

と必死になって答えた。その香奈の返答になおは自分自身の言い方が悪かったから、香奈が突飛的な行動したのだと反省した。

第136話 競争心

なおは香奈にどういえば良いか少し考えた。その間香奈はおどおどしながら

「私、仕事できるようになりたいです」

となおに訴える。なおは突然の香奈からの訴えに驚いて

「香奈ちゃん、今のままでいいわよ。なんで仕事が出来るようにになりたいの?」

とあわてて香奈に聞く。その質問に香奈は

「リ、リ力さんは私より後に入ったのに、私より仕事出来ます」

とリ力より遅れてることを苦痛に思っていることを告白した。

（私はあんと違うのだから）

近くで聞いていたリ力は香奈の告白に苦笑した。香奈の告白を聞いてなおは香奈に

「別にリ力ちゃんと競わなくてもいいわよ。キョウカさんもそこまです香奈ちゃんに期待していないし、おじさまも香奈ちゃんがここに置いてもらえるだけで喜んでるわよ」

と香奈に言った。キョウカはなおの言うことを聞きながら、置いてあるというより、面倒を見てくれと頼まれてるだけなのよねと、一

人でつぶやいた。

（斉藤さんならたしかに香奈をサンフラワーに置いていることを、顔には出さないけど喜んでくれてるはず）

とっさにキョウカはそう考えた。そしてキョウカの中でおじ様「斉藤がますます強くなっていた。」

香奈はなおの言うことを相変わらず自分に都合のいいように解釈して、おとなしくなりいつもの香奈に戻った。

女性週刊誌のCANDAYの発売日になり、キョウカは前のことを忘れて雑誌を手にとった。そして表紙を見てびっくりした。香奈のことが大きな記事になっていた。

（なんで、香奈への取材は没になったはずじゃ・・・・・・・・・・）

キョウカはあわてて香奈の記事を探した。

第137話 偽りの記事

キヨウカはあわてて香奈の記事の部分を探して見つけた。そこには香奈のことが記事として詳しく書かれていた。

（ちょっと何が現代版あしながおじさんストーリーよ！）

キヨウカはこの記事のキャッチフレーズを苦虫を噛むようにして読んだ。記事は香奈が謎の人物”おじさま”を求めて雀荘で働く姿を美化して伝えていた。そしてキヨウカが一番驚いたのはキヨウカの談話だった。

（私こんなこと言っていないわよ！）

キヨウカにとって寝耳に水のようにキヨウカの談話がそこに書かれていた。キヨウカは怒りを込めてそれを読む。そこには

「香奈の一途な思いを支援したくて私の雀荘で働くことを認めました。香奈のおじさまに会えるまで頑張ろうという直向きな努力をみんなが好感を持って、みんな心から”香奈頑張れ”と応援してます」

と書いてあった。

（もう勝手に何でも書いてえ！どうなっても知らないわよ）

キヨウカは雑誌の編集長の長沢に怒りを込めて、雑誌が読者から信用無くして売れなくなっても知らないからと、もう協力しないと怒りを込めて雑誌を元に戻した。

キョウカは気付かなかったが、この香奈の記事で女性週刊誌CANDAYの売り上げが過去最高を更新していた。

サンフラワーでは少しづつだが香奈は本走回数が増えていった。本来プロならばお客さんより強いから、麻雀を打てば打つほど稼げるはずだが、実際は稼ぐどころか負けて給料がマイナスになっていた。プロですらそうだから、素人メンバーも本走に入りたがらなかった。

キョウカはそんな事情から香奈だけを優遇する訳にはいかず、限定的だが香奈にも本走をさせていた。

第138話 2回目の女流Bリーグ

キョウカは香奈が負けて給料が無くなるようなことを避けたかったが、他のメンバーのことを考えれば、香奈にも打ってもらうしかなく、仕方なくキョウカは香奈にも本走をさせることにした。

香奈は店の事情から貰えた実戦のチャンスを嬉しく思い、一回一回大切に打った。そのおかげで香奈はキョウカの心配をよそに普通に麻雀を打てるようになっていった。

二回目の女流Bリーグの日が来た。キョウカはこの日は自主的に立ち会い人に応募していた。前回の時のように香奈を怯えさせるようなことは、団体的にも人間的にも繰り返したくなかったからだった。

他の女子プロ達からは香奈のような素人がこの場に居るのはおかしいと不満が出ていたが、キョウカの睨みが利いているから、誰もそのようなことを言う者は居なかった。むしろ逆に同卓してポイントを稼ぎたいと思う者ばかりだった。前回の香奈の負けっぷりはそういう不埒な連中にはおいしく思えていた。

ただ香奈は前回と違って、麻雀のレベルが上がっていたから、不埒な連中の思い通りにはならなかった。

女流リーグは普通に始まり、キョウカはすぐに香奈の居る卓を見た。香奈との同卓者達はキョウカに見られていることを意識し委縮していた。逆に香奈はキョウカに見られるのは慣れているし（慣れているというよりまったく気付いていない）から堂々としていた。

そんな状態だから、香奈の卓は香奈が有利に展開し、香奈がトップ

になった。対局終了後、各自申告用紙に自分のポイントを書いて香奈に渡す。香奈は全員のポイントを確認して

「あ、あつてますね」

と言って同卓者達に確認を取る。同卓者達が頷き、最後に礼をして対局は無事終わった。キョウ力は香奈がうまく出来たことにホッとして香奈から用紙を回収する。香奈はキョウ力に怒られなかったから自信を深めた。

第139話 記者の来訪

キョウカが香奈の成長を嬉しく思っている時に突然の訪問者が来た。

「すみません、CANDAYですけど……」

女性週刊誌の記者が香奈を取材しに女流リーグ戦に来たのだった。
キョウカは記者の声を聞くと反射的に

「只今対局中だから取材は御遠慮願います」

と言って記者の取材を止めようとした。キョウカはせっかくうまくやっている香奈に動揺を与えたくないし、何よりもまたあること無いこと書かれるのが嫌だった。

「対局が終われば取材が可能になりますから、とりあえず今は見学しててください」

香奈への取材を止めようとするキョウカを尻目に、女流リーグの立ち合いの責任者がそう記者に話し掛けた。

（な、なんてこと言うのよ！）

責任者の発言にキョウカは怒りを込み上げた。しかし、キョウカはこの場では責任者に何も言えなかった。

「女流リーグもやっとメディアに注目されるようになったか」
「こうやって少しずつ認知度がたかまればいいですね」

立ち会い者同士がそんな会話をする。

（リーグ戦なんか注目されてないわよ。注目されてるのは香奈だけよ）

キョウカは事情を知らずに能天気会話する男の立ち会い者達にいら立っていた。リーグ戦は二回戦目が始まり、香奈は記者が来たことに気付かず、そのまま対局に集中していた。

キョウカは記者の動向が気になって立ち会いに集中出来ていなかった。ただ対局がスムーズに進行し立ち会いが必要無いまま、香奈は二回戦目もトップで終わった。

第140話 包囲網

二戦目が終わり始めたから、キョウカは各卓の対局者達から用紙を回収し始めた。記者は対局が終わったと思い、立ち会いの責任者に

「対局が終わったのですか？」

と聞いた。その記者の問いに責任者は

「いえ、まだ二回目が終わった所です」

と言って説明した。それを聞いて記者はまだ取材できないと思い、動かなかった。

「小林香奈さんはどんな状態ですか？」

さりげなく記者がそう責任者に質問した。

「小林さんですか、彼女はプロとしてまだまだでして、この間も先輩方が彼女の出来の悪さに冷たく当たって、高木さんと水野さんが小林さんをかばって逆に注意してましたよ」

と責任者は答える。これを聞いて記者はそのことを忠実にメモした。キョウカはそんなやり取りが有ったと知らず、リーグ戦の進行を進めていた。

香奈は二戦目もトップを取れて、おじさまに褒めてもらえると浮かれていた。逆に同卓者達は香奈にこれ以上走られると困ると思い、三戦目は三人とも香奈をマークすることにした。

三戦目が始まり各卓でサイコロが振られる。香奈はいつもと変わらない麻雀をしようとしたが、香奈の上家が香奈に鳴かれないように牌を絞った。それで香奈は鳴けなくて少しずつフォームが壊れ始めていた。

「チ・」

「ポン！」

香奈が鳴こうとした牌に对面からポンが入った。香奈が戸惑う間に对面は牌を持って行って、自分の右に晒した。香奈の発声は遅いし、对面は無く必要が無かったから明らかに邪魔ポンだった。キョウカは邪魔ポンだと分かったが、戦術的に有効だからこの行為には何も言えなかった。

第141話 暗転

ポンをした対面を鳴いた牌を晒しながら、失敗したと思い苦い顔をした。それを見て上家と下家はほくそ笑んだ。香奈は鳴こうとした牌を鳴かれ、どうすればいいかわからず、動揺したままだった。

対面は無理鳴きで役が無くなり、この局は放棄せざるを得なかった。そしてこの行為が後々尾を引いて、この後も戦列に参加できる状態にならなかった。

上家と下家は一人脱落したことを喜び、積極的に動き出した。香奈は対面の鳴きで手が進まなくなり、気持ちも動揺していて、鳴きを入れることも出来なくなった。

香奈は三着四着と逆連帯で後半を終えた。ポイント的にはプラスだが、前回のマイナスを埋め切れるレベルじゃ無かった。

「集計が終わりましたので、これで女流Bリーグの二回戦目を終了します。皆さんお疲れさまでした」

立ち会いの責任者の終わりの挨拶を持って今日の女流リーグは終わった。

「小林さん、調子はどうでしたか？」

リーグ戦が終わったので、記者が即座に香奈に声を掛けた。突然のことでは香奈は何も言えず、ただ黙り込んでいた。キョウカは後片付けで香奈の方を見ていなかった。

記者は香奈が何か言うのを待ったが、香奈は一言も発しなかった。

「では質問を変えます。今日の結果をおじさまにどう報告したいですか？」

記者が改めて香奈に質問した。これも香奈には答えにくい質問だった。前半は調子良かったが後半は報告できる状態では無く、香奈はと言えばいいかわからず、ただ黙ったままだった。

第142話 二回目の取材

記者は香奈の様子を見て、質問は無理だと思い、取材を切り上げようかと思った。その記者の態度を見て香奈はあわてて

「お、おじさまに、香奈は頑張ってますと伝えたいです!」

と言った。香奈はまた取材が駄目になって、おじさまに香奈が駄目な子だと思われると思い、必死に記者の質問に答えた。香奈の答えを聞いて、記者は香奈の言ったことを手帳に記帳した。香奈は震えながら記者の動きを気にする。

「それではリーグ戦での先輩の当たりは厳しかったですか?」

記帳を終えた記者がすぐに新しい質問をした。その質問を聞いて香奈は

「せ、先輩に、欲しい牌を取られました」

とおどおどしながら答えた。その答えも記者はすぐに手帳に記帳した。

「すみませーん!この子疲れているから、もう取材は終わらせてください」

そう言つてキョウカが取材を遮つて香奈を連れ出した。香奈は何も分らず外にキョウカに連れて行かれた。

「香奈!勝手に取材を受けちゃ駄目でしょ!」

キヨウカが香奈を叱る。香奈は取材を成功させないと、おじさまに駄目な子だと思われるからと、必死に目で訴える。そんな香奈を見てキヨウカは

「香奈、勝手に取材を受けておじさまに変な風に伝わったら、困るのはあんたでしょ！」

と呆れながら香奈を叱る。それを聞いて香奈はあわてて口を塞ぎ、もう取材を受けない意思表示をした。

中で記者は香奈を連れていかれて、もう取材が出来ないのでどうしようか悩んでいた。

「どうです、他にもいますから、色々質問されてはいかがですか？」

立ち会いの責任者がそう記者に話し掛けた。

「し、失礼しました」

そう言っただけ記者はあわてて部屋を出て行った。責任者は意味が分からずポカーンと立ち止まった。

（何で香奈ばかり？）

足早く出ていく記者を見てリカは不満を募らせていた。

第143話 開き直り

女流Bリーグ戦から一夜明けた朝、キヨウカは憂鬱な感じで朝を迎えた。友人の長沢に香奈のことを教えたことが、キヨウカを苦しめることになっていたからだった。

雑誌絡みが香奈一人でも大変なのに、団体まで巻き込んでしまい、リカまで気分を害することになっていた。

「実力を付けても注目してもらえない。じゃ、一体プロって何ですか!？」

リカのキヨウカに向けた叫びがキヨウカの心にいつまでも響いていた。キヨウカはリカにどう言えばいいかわからず、ずっと頭を悩ませていた。

キヨウカはこのまま休みたかったが、シフトの都合上、休むわけにもいかず寄り道せずにサンフラワーに向かった。歩きながらキヨウカは当面の問題を片づけることに気を配った。

リカと香奈は特別に仲が悪いというわけじゃ無かったが、香奈が目されるのをリカが嫉妬みたいな感情を抱いて、リカが香奈を毛嫌いするようになってきていた。キヨウカはリカに香奈は面白おかしく注目されているだけだと言って、リカを慰めるつもりだった。

ただそれだけでは不十分で、リカのことを注目されていない現状を改善しないことには、リカの不快感は無くならないと思っていた。

（プロと言ったって麻雀で稼いでいる訳じゃないし、サークル程度

の活動しかしてないのに評価してもらえないわよ！)

そうキョウカは麻雀プロの現状を考え、開き直った。

悩むのを止めてキョウカはサンフラワーの有るビルに辿り着き、エレベーターに乗った。そしてサンフラワーの有る階で降りて、店のドアを開いた。

第144話 キョウカの指示

ドアを開けるとそこにはいつもと変わらない香奈が居た。

「お、おはようございます」

香奈が小刻みに震えながらキョウカに挨拶する。香奈からしてみれば、キョウカは相変わらず怖い存在だった。

「おはよう！」

不機嫌なままキョウカはそう香奈に挨拶し、他のメンバーには普通に接して、お客さん達には笑顔で挨拶回りをした。

（この子は何で休まないの？）

カウンターに入ってキョウカは横目で香奈を見てそう思った。リーグ戦の次の日だからとなおはともかくリカも休みにしているのに、香奈は全く疲れを感じないまま、店内で立っていた。

「香奈！あんたいい加減休みなさいよ。誰も休むなと言ってないのだから、遠慮なく休んでいいわよ」

とキョウカが香奈に強く話し掛ける。それを聞いて香奈はキョウカの方を見て

「や、休むとおじさまが来た時会えないので……」

と弱々しく返答した。

「馬鹿ねえ！おじさまが昼間っから……」

キョウ力はそこまで言っただけで急に口を止めた。止めたのは、おじさまが昼間から来るわけ無くて、来るとしたら夜だと言っただけだったが、そんなこと言ったら香奈が夜に店に来て、閉店まで居座るのが明らかだったからだった。

「おじさまだっただけで働いているのだから簡単に来れないわよ。それにあなたおじさまに仕事を休んでもらってまでここにきて欲しいの？」

とキョウ力は言い直して香奈に問い詰めた。

「そ、そんなこと無いです。お、おじさまに遠くから見守ってもらえるだけで十分です」

と香奈はあわてて言い返した。

第145話 香奈の心配

「それなら休みなさいよ！おじさまもあなたが休まず働いてるって知ったら、あなたが経済的に苦しいのだと思って心配するわよ」

「や、休みます・・・」

「じゃあ明日休んでいいわよ。おじさまが明日来なくてもいいようにあなたが明日休みだとみんなに言っとくから」

「・・・・・・・・」

キョウカは香奈を明日休ませることにした。そして香奈はいつもの位置に深刻そうな顔をして立っていた。

シフト的に香奈は居なくても影響が無いから、簡単に休ませることが出来た。そしてキョウカ自身も明日休みで、キョウカ的には明日ゆっくり休めるようにしたかった。

香奈はおじさまに心配されていないか深刻に考えていた。おじさまに経済的に苦しいと思われていたら、おじさまのことだから香奈に経済的な援助をしようとおじさま自身休まず働いてるかもしれない、おじさまにそんなことはさせたくない、香奈は今まで休まずサンフラワーに来ていたのを後悔していた。

そんな感じで香奈は深刻な感じで居たから、業務には使えそうに無かった。しかし、もともと香奈を当てにしていないという感じで、キョウカは他のメンバー達に指示を出して店を動かしていた。

「香奈、もう上がっていいわよ」

そう言ってキョウカが香奈に帰らせることにした。

「お、お疲れさまでした」

か弱い声で香奈は挨拶して店を出た。キョウカは一瞬香奈がもうサ
ンフラワーに來ないのかと思ったが、もうどうでもいいわという気
持ちで気持ちを切り替えていた。

第146話 値千金

次の日の朝、香奈は普通に起きて普通にご飯を食べて部屋に閉じ籠った。

（おじさまが私が経済的に苦しいと思わないように、私は休まなければならぬ）

香奈は自室に籠りながら、おじさまに心配を掛けないようにサンフラワーに出勤しないようにしていた。

香奈は休みを貰えたとはいえ、特別にすることが無かった。それでただひたすら麻雀の練習をすることにした。

一方キョウカは香奈が初めて休みだからと安心して、夜更かしをして昼まで寝ていた。

「おはようございます」

サンフラワーにリカが出勤してきた。

「おはよう」

なおが出勤してきたリカに挨拶をする。店内に入り、リカはいつもと違う雰囲気気付いた。

「あれ、香奈が居ない……」

リカは驚いて改めて店内を見回す。

「あ、香奈ちゃん、今日はお休みよ。キョウカさんが香奈ちゃんを働き過ぎだと強制的に休ませたのよ」

となおがリカに教える。それを聞いて確かにとキョウカの判断に納得した。

リカはもう香奈に対しての嫉妬の意識は無かった。昨日リカは自分が評価されないとの愚痴を言う為に師匠の南に電話をしていた。その時南が言ったことは

「注目されたら稼ぎにくくなるだろ！」

その一言がリカの心に大きく響いた。リカは南みたいにフリーだけで食べるプロになりたいから、その一言には値千金の価値が有った。（プロだもの、稼いでるのが目立ったら、稼げなくなって食べなくなっちゃうわよね）

リカは一人そう思い、南の言うことに納得していた。

第147話 おじさまの正体

「そうなんだ。香奈ちゃんが休みなら俺も休めば良かった」

「明日は香奈ちゃんが出勤するから、明日も戸田さんサンフラワーに来てくださいね」

「なおさん営業ですか」

なおと客との楽しい会話を聞きながらリカはふと我に帰った。

（何で香奈ばかり人気あるのよ！私の方がかわいいのに）

リカは麻雀プロとして香奈には対抗意識を持たなくなったが、女として対抗意識を持ち始めていた。

キョウカは家のことをやりながら、ふと思い出したようにPCに張り付いた。そしてしばらくしておじさまのHPの「希望の丘」に辿り着いた。

（この文章の書き方は斉藤さんだわ。やはりおじさまは斉藤さん）

キョウカは香奈の慕うおじさまが斉藤だと確信していた。

（香奈におじさまが斉藤さんだとしたら、どんなに斉藤さんに迷惑が掛かるか、そして週刊誌にも）

キョウカは長沢におじさまの正体がばれることを恐れた。そして掲示板をなぞりながら香奈の書き込みを見つけた。

（これで香奈はサンフラワーに卓掃したいと言って来たのね）

キヨウカは香奈の書き込みを見てそう感じた。それは香奈がおじさまに卓掃をするか聞いていた時のだった。

CANDAY編集部

「長沢編集長、おじさまのHPを記事に掲載しますか？」

そう香奈の記事の担当の女性記者が長沢に聞いた。

「駄目よ掲載したら。おじさまが誰かわからない方が、読者に神秘性をもたらせて効果的なんだから。それよりいいの拾って来たわね。是非ともこれを記事のタイトルにしなさい！」

と長沢は女性記者にアドバイスをした。長沢は香奈を扱うことで、次の号の売り上げが伸びるのを確信して微笑んでいた。

第148話 香奈の心配

次の日の朝、香奈は悩んだ末にサンフラワーに出勤することにした。一日しか休まなかったなら、おじさまは香奈が経済的に余裕がないから、休みを取るうとしないと誤解されると、逆に香奈の方が心配してサンフラワーに向かって行った。有る理由の為に。

キョウカも一日しか休まずサンフラワーに向かった。今日はなおが休みでシフト的に人が足りなかったからだ。この場合もキョウカは香奈を人数に考えていないから、香奈が出て来ようが休もうが関係無かった。

キョウカが出勤するといつものように香奈が居た。香奈はキョウカを見るなり

「わ、私がおじさまに、お金持ちだと思ってもらえるには、どうしたらいいでしょうか？」

と必死に質問した。

「はぁ……」

突然の変な質問にキョウカは驚き戸惑った。しかし香奈は真剣なまなざしでキョウカを見つめている。キョウカはと言えばいいかわからず投げやりのに

「普通に働いていれば給料入ってくるから、おじさまも心配しないんじゃないの！」

と答えた。普段のキヨウ力なら「お金持ちなら働かなくていいのだから」と休んでいたら」と答えていただろう。しかしおじさまの正体と斉藤と断定していたから、キヨウ力は斉藤が心配しないように香奈を休ませないように考えていた。

それに昨日の店の様子をなおに電話で聞いた時、香奈が居なくてお客さん達が香奈のことを心配していたと誇張的にだが聞いていたの
で、ビジネス的にも香奈を休ませない方がいいと思っていた。

第149話 キヨウカの心境（前書き）

投稿ミスで先週投稿したつもりが投稿になっていませんでした。

第149話 キョウウカの心境

香奈はキョウウカの返答を聞いて

「あ、ありがとうございます」

と礼を言っていつもの定位置に戻った。そんな香奈を見てキョウウカは

（こんな子に頼らないといけないっておかしい話よね）

と思っただけ息を付いた。

雀荘の現状は厳しい状態が続いていて、各雀荘も集客で苦戦していた。キョウウカが青田買いの感じでリカを獲得したように、各雀荘も人気女子プロの確保に力を入れていた。

人気者を育成するより、他からスカウトのような感じでゲストなり従業員として雇う方が簡単で楽だからと、各雀荘は育成をしないで人気女子プロの確保に力を入れていた。

それで人気女子プロは色んな雀荘にゲストとして顔を出すようになり、希少価値が薄れていった。そして教育がされないし、何もしなくても高いゲスト料が当たるなら人気女子プロ達も技能習得を怠ったから

、ますます人気女子プロの価値が落ちていった。

そして人気女子プロの集客力が落ちて、各雀荘は経営不振に戻った。それでも雀荘側は他に効果的な集客方法が考え付かないから、未だに人気女子プロの確保に力を入れていた。

そんな状態だからキョウカはリカにも各雀荘からゲスト依頼が来るのを分かっていたし、実際に色々来ていた。ただリカは南の教えを守り、すべてのゲスト依頼を断っていた。

（リカがゲスト依頼を断るのが分からないけど、そのおかげでリカ目当ての客はうちに来るしかないから、お店的にはすごく有り難いのよね）

キョウカはリカがサンフラワーだけでしか働かない事を嬉しく感じていた。

第150話 斉藤の苦悩

「小林香奈さんですか、小林さんは次は六月四日の七夕杯の女流予選に出ます」

「ではその日にお待ちしております」

斉藤は団体の事務局長として電話で女性週刊誌の取材の依頼を受けていた。

（女性週刊誌から取材を受けるなんて、小林さんは本当はどんな人なんだろう？）

斉藤は香奈のことを不思議に思いながら、奥さんに買ってきてもらった女性週刊誌CANDAYの香奈の載っている記事の場所を読んだ。

（こ、これは・・・・・・・・・・）

斉藤は記事を読んで深く驚いた。

（小林さんは僕を追いかけて麻雀プロを目指したなんて・・・・・・・・・・）

香奈の目的を知って斉藤は驚くだけではなく、深い苦悩に陥った。

（これからは小林さんと接するのを控えないと。僕がおじさまだと小林さんが気付いたら、小林さんはきつと絶望してプロを辞めるかもしれない）

斉藤は香奈にあまりにも頼りない男が、香奈の尊敬してやまないおじさまだと知られることを勝手に恐れていた。

こうして斉藤は香奈と接触するのを避け、香奈が参加する団体の行事に出ないことにした。

七夕杯の女流予選の日がやって来た。この日はサンフラワーから全員参加したから、サンフラワーは営業時間を大幅に短縮して営業することになった。

今回はキョウカも参加者だから立ち会いは他の者が務めた。七夕杯はワンデイトーナメントで一回戦ごとに各卓から上位二名が勝ち上がっていく仕組みになっていた。

それで協力し合って一位二位を取るような八百長の行為を警戒されていて、キョウカはなお、リカ、香奈とは同卓を避けたいと思っていた。

第151話 キョウカの開き直り

香奈は女流リーグ戦で慣れて来たから、何事も無く普通に受付で参加費を払い、適当に空いている席に座り、香奈自身が入る卓が決まるのを待った。

七夕杯の女流予選は参加者32名で卓の割り振りを決めることになっていた。その割り振りも全員同じ扱いだから、抽選で割り振りが決められた。

キョウカは8卓しかないから、なお、リカ、香奈の誰かと同卓になるのは仕方ないと思っていた。当然3人の内の誰かと同じく勝ち上がれば必然的に同卓しなければならないから、同卓を避けるのはあきらめていた。

キョウカは名前を呼ばれて2卓に座った。そして後から香奈も名前を呼ばれてキョウカと同じ2卓に座った。

（え、香奈と同じ・・・・・・・・・・）

キョウカは香奈と同卓になって驚いた。改めて香奈と同卓してキョウカは大事なことに気付いた。香奈には八百長とかの概念が無く、キョウカにはまっすぐ打って来るということを。

周りから見ればキョウカの立場は香奈にキョウカに振り込む事を強要出来るから、香奈がただ普通にキョウカに振り込んでも、キョウカが勝ち上がる為に振り込ませていると誤解されるかもしれないかった。

香奈に八百長的な行為が出来ると、訴えてもそんな理屈は通用しないとキョウ力は思って、香奈からあがらなければいいと考えた。

しかし、それはそれで香奈を勝ちあがらせるための八百長と受け止められるから、香奈から当たらないことも出来なかった。

キョウ力はどうにでもなれと開き直って予選に挑むことにした。

第152話 予選開始

逆に香奈の方はキョウカと同卓になってまた怒られないかと怯えていた。

サンフラワーの本走では、意図的に香奈とキョウカは同卓しなかったので、二人が同じ卓に着くのは初めてだった。香奈は目の前のキョウカの不機嫌そうな顔を見て、怯えて震えていた。

大会の説明が終わり、場所決めが始まった。キョウカがサイコロを振り、香奈はそれをただ見ているだけだった。

場所が決まり、香奈はいつものごとく残った牌を取り、空いた席に座った。それでも動きが遅いからキョウカに怒られるか心配だった。

親決めのサイコロが振られ、香奈が起家になった。起家マークが香奈の所に配置されたから、香奈は自分が親だと分かり、対局を始める挨拶が終わるとすぐにサイコロを振った。

キョウカに怒られないか心配しながらの香奈だったが手牌を見て麻雀に集中しだした。キョウカも香奈を無視して麻雀に集中し対局が始まった。

一局目から香奈の鳴きが入った。キョウカは香奈にあがらせるような打牌を避けようとしたが、両脇が甘いから、香奈が一局目からあがった。

「ツ、ツモ、四千オール」

香奈が親満をツモあがる。キョウカはすぐに四千点を香奈に渡した。香奈はそれを怯えながら受け取り、続く一本場が始まった。

半荘は勢いづいた香奈が独走して、キョウカが何とか二位に付けてオーラスになった。

キョウカはこれをあがれば二位だが点数持ち越して無いから、ただあがるだけで第一戦を通過できるから充分だと考えていた。

第153話 決定戦前

自摸を繰り返し、キヨウカはテンパイして七萬を切った。その時香奈の態度があやしく、何かを言いたそうだった。キヨウカは即座に気付く

「香奈、あがりならあがりなさい！でないとななた失格になるわよ」と香奈に忠告した。香奈は申し訳なさそうに

「口、ロン八千」

と宣言した。キヨウカは黙って香奈に点棒を渡し、半荘を終了させた。

今の放銃でキヨウカは三位に転落して、予選通過は出来なくなった。香奈もそれに気付いてキヨウカからあがるのをためらったのだった。

香奈はキヨウカに怒られると思い震えていたが、キヨウカは香奈を無視して他の人達の状況を見に行った。

「あーん、一回戦で負けちゃった」

なおがキヨウカにそう言った。

「キヨウカさんはどうでした」

なおがキヨウカにキヨウカの結果を聞いた。

「私も負けたわ。香奈は一回戦を通過よ」

「リカちゃんも一回戦を通過だから、チームサンフラワーは二人勝ち残りね」

キヨウカはなおのチームサンフラワーという名称に苦笑しながら、香奈に負けたことに関しての麻雀の難しさと奥深さを噛み締めていた。

キヨウカとなおが見守る中、香奈とリカは二回戦も突破して二人とも決定戦に残った。女性週刊誌の記者は、香奈に取材したいが、香奈はキヨウカに言われた通り取材を拒否し、キヨウカも取材に協力しなかったから、とりあえず予選の結果だけをメモしていた。

キヨウカは決定戦で二人が協力し合う形にならないか心配したが、リカは香奈に強烈な対抗心を抱いていて、香奈と口を聞こうとすらしなかった。

第154話 決定戦開始

七夕杯の女子部門の選抜の決定戦が始まることになった。香奈は決定戦まで残れたことで十分に思い、キョウカに全く怒られなかったから、安心して緊張などしていなかった。

他の三人が緊張する中、香奈は消化試合みたいな感覚で起家として賽を振った。リカは香奈には負けたくないという一人香奈に敵愾心を持ち、香奈の方を睨むように見ていた。

（リカ、何を考えているの、平常心で居なさい）

キョウカは闘争心剥き出しのリカを見てそう思った。

「リ、リーチ」

最初から調子がいいのか香奈が先制リーチをした。それに対してリカは危険な所を切り出す。他の同卓者が驚く中、リカは次々と危険な所を通す。

「ツモ、千、二千」

リカが香奈のリーチを掻い潜り、三八ンの手をツモあがりした。香奈はあがれなかったことを悔しがらずに黙ってリカに二千点を渡した。

（香奈、この場合は五千点棒でしょ！）

キョウカは香奈に注意をしたかったが、アドバイスになるといけな

かったので、黙っているしかなかった。この時香奈は千点棒二本で払った為、手元には千点棒が一本になった。逆にリカはリーチ棒を含め、九本と多過ぎな状態になるから、香奈が五千点棒で支払い三千点をお釣りで貰うべきだった。

続く東二局、リカは親番で四千オールをツモあがりしてリードを広げた。リードを広げて上機嫌なまま、リカは一本場の賽を振った。

香奈が無欲無心のまま、鳴きながら手を進める。リカは親番を死守しようと積極的に攻めた。

第155話 攻守逆転

リカは点差をさらに引き離そうとリーチを掛けた。

「リーチ」

そう言つてリカは千点棒を卓に置く。

「ロ、ロン、3900は4、4200」

香奈がリカの切った牌であがったのだった。リカはよりよつて一番振り込みたくない香奈に振り込んでしまったから、悔しさをにじませながら、香奈に点棒を払った。香奈はそれをゆっくり点箱に仕舞い、次の局に移った。

（いつもの冷静なりカはどうしたのよ！十分過ぎるほどリードが有るのだから、落ち着いて打ちなさいよ）

キョウカはリカのことを心配して、心の中でアドバイスを送る。香奈はリカからあがつてトップが近付いたが、全く嬉しいと思っていなかった。何故なら決勝に残れただけでおじさまに褒めて貰えると思ひ、勝ち上がることを全く考えていなかった。

焦つてフォームを崩したりリカと対称的に伸び伸びと自由に打つ香奈。その二人の差を明確に表すように同卓者がリーチをした。

リカはそのリーチに対して、突つ張れず、安全牌を切り出して降りた。逆に香奈は暴牌と言えるくらい、好きにいらぬ牌を切った。リカは香奈に合わせて安全になつた牌を切つて行く。

リカは香奈に助けてもらっているような状態を恥じたが、振り込んでトップから降りる方を極度に恐れて、なりふり構わず手を壊して安全牌を切って行った。

この局は両者とも点棒を減らさずに終わったが、勢いを失ったりリカは、香奈が伸び伸びと打つのを見ながら、半荘が終わるまでの感じでトップを守ろうともがいていた。

第156話 リカの勝利

香奈はただまっすぐ打っていたただだったが、それが他者のあがり
を妨げ、結果的にリカをも助けることになっていた。

香奈は勝ち残ることを考えていないから、打点を高くする気は無く
すぐに鳴いて手を進めた。その鳴きが他者の勢いを止め、打点が低
いからリカは追い込まれながらも逆転のチャンスを得ることになっ
た。

オーラス、打点は低かったが他者のリー棒を得て、香奈がトップに
なっていた。リカは二位だからこのまま終わっても決定戦は通貨だ
が香奈に負けたくないという気持ちで逆転を狙っていた。

香奈は勝ち残る気は無かったが、トップになって勝ち残れると思っ
と、緊張して気が動転して、フォームを崩してしまった。普通なら
鳴いて終わっていたのを、思わず声が出無くてスルーしてしまい、
局が長引いた。

おかげでリカが間に合い、リカは勝負した。

「リーチ」

リーチと言い千点棒を卓の上に置く。香奈はもう怖くて動けない。
ただリカのリーチに対して降りるだけだった。

数順後

「ツモ！」

逆転だった。会心のあがりでリカがトップになった。点数的に香奈は二着に終わり、決定戦は終了した。

負けて落ち込む香奈になおは

「香奈ちゃん良かったわね、七夕杯の決勝に出れるわよ」

と声を掛けた。香奈はなおの言うことをいまいち理解できていなかったが、決勝に出れるなら負けてもおじさまに褒められると勝手に思い、嬉しくなっていた。

リカは決勝に出れることよりも、香奈に勝てたことが嬉しくてしばらくそのことを喜んでいた。

第157話 週刊誌の記事

七夕杯予選が終わり、女子プロ側からはリカと香奈が決勝に出ることになった。

次の日、キヨウカは香奈を休ませ、自分自身もサンフラワーを休んでいた。

起きた後、キヨウカは女性週刊誌のCANDAYが発売されていることに気づき、次はどんな記事を書いたのか気になって、家のことを放り出して書店に向かった。

書店に着き、週刊誌を手に取り、問題の記事を見る。記事を読んで顔を青ざめ、CANDAYを持ってあわてて書店を出ようとして、代金を払わなければいけないことに気付いてカウンターに向かった。

「三百五十円です」

そう店員に言われ、キヨウカはすぐに金を出して、CANDAYを持ってサンフラワーに向かった。

サンフラワーに着くなり血相を変えて店に入る。メンバー達は突然のキヨウカの来訪に驚いた。

「キヨウカさん、どうしたの？」

なおが驚きキヨウカに問う。

「なお、これ見てよ！」

キョウカはあわてて香奈の記事の誌面を開いてなおに見せる。そこには

おじさまに香奈は頑張ってますと伝えたいです。

と書いてあった。

「香奈ちゃんらしいじゃない！」

そう言ってなおは微笑みながら香奈に感心する。

「そこじゃないわよ！此処読んで」

キョウカがなおに指で読んで欲しいところを指示する。そこには

香奈さんは対局中に、先輩に欲しい牌を取られるという嫌がらせを受けながらも、おじさまに心配を掛けまいと、嫌がらせのことは黙って耐え忍び、おじさまに頑張っていることを伝えたいと健気に訴えています。

と書いてあった。

第158話 発言の影響

「これじゃ私も香奈ちゃんに嫌がらせしていていると思われるのかな？」

となおは記事の記述を読んで不快になった。

「そうよ、私達が香奈に嫌がらせをしてるように思われて、女子プロ全体のイメージが悪く思われちゃうのよ！」

キヨウカは語気を荒げてなおに訴える。

「これ、香奈ちゃんは悪くはないよね。香奈ちゃんは何も分からず記者の人に語ったみたいだから」

そう言つてなおは香奈をかばう。

「もう香奈に取材を受けさせないようにしましょ！記者に好きなこと書かれたら、香奈が団体に居られなくなっちゃうから」

「そうよね、香奈ちゃんが悪くなっちゃうから」

なおはそう返事をし、機嫌の良くないキヨウカは怒りのやりどころを探した。

キヨウカが記事で騒ぐ中、雑誌は香奈の記事の効果で売り上げがかなり伸びていた。

女性読者には麻雀界という真新しい感じの世界で、香奈が悲劇のヒロインという表現の記事の書き方に読者はかなり興味を持って読ん

でいた。

そしてこの人気に話題が無くて困っているテレビ局が取り上げ始めた。

香奈は、自分自身の発言でそんなことになるとは知らずに、P Cの前でおじさまに七夕杯の決勝に出られることを報告しようか悩んでいた。

香奈はすぐに報告しようとおじさまのサイトを開いたが、緊張して掲示板に書くことが出来なかった。

おじさまに存在を知られることを無意識に怯えて、手が止まっていた。

第159話 喜べない香奈

香奈はおじさまに知られるというよりも、見られる方に怯えていた。見てもらいたいと思いつながら、いざ見てもらおうとしたら、緊張して見て欲しいと頼めなかった。

香奈は見て欲しいとおじさまに頼めない以上、何も出来ないから、静かにおじさまのサイトを閉じた。

斉藤は香奈の七夕杯の女流予選で決勝進出の報告を立ち会いの責任者から聞いて、我が子のように喜んだ。しかし、香奈におじさまだとばれたくないから、香奈と接することはあきらめた。

次の日、香奈は何事も無かったようにサンフラワーに出勤してきた。キョウカは香奈に週刊誌の記事のことを言わずに黙って香奈を観察していた。

七夕杯の女流予選の結果は団体のホームページにアップされたから、客達も二人の決勝進出を知り、リカと香奈におめでとうと結果を祝った。

リカは祝ってくれる客達にありがとうと笑顔で感謝していたが、香奈はおじさまに報告できなかった以上、決勝進出は嬉しいことではなく、客達におめでとうと言われても他人事のように喜ばうとしなかった。

キョウカはそんな香奈に見かねて

「ちょっと香奈！みんな祝ってくれてるのだからお礼を言いなさい

よ」

と香奈に雷を落とした。香奈はキョウカになぜ怒られるのか分からなかったが、言われるままありがとうと客達に言った。普通の人達から見ればいい加減な礼の仕方だったが、香奈のことを良く分かっている客達だから、香奈のことを怒ろうとせず、温かい目で香奈を見た。

キョウカもそのことを分かっているから、キョウカ自身が客達に感謝して礼を言い回った。

第160話 リカの心境の変化

七夕杯の女流予選を二位で予選通過したのに、全く喜んでいない香奈を見ながらリカも一位で予選通過したのに本心では喜んではいなかった。

リカは女流予選を一位で予選を通過したことを嬉しくて師匠の南に電話で報告した。

「あ、師匠、リカです。七夕杯の女流予選を一位で無事通過しました」

「二位じゃ無いのか。二位でも予選通過できたよな」

「え、二位って？」

「一位だとどこが悪いかわからないから、全然成長しなくなるからな」

突然の返答にリカは分からず迷ったが、すぐに南がリカの成長の方を優先に考えていると分かり

「ありがとうございます。ほんとまだ未熟で全然至らなくて」

と南に礼を言った。

電話を終えた後には、リカはもう予選通過などどうでもよくなっていった。大事なのは強くなること、それだけだった。

サンフラワーでもリカはもう香奈に嫉妬心を抱かなくなっていた。強くなることだけ考えているリカはもう香奈など眼中に無かった。

数日経ち、キョウカには新たに頭の痛い問題が湧いてきていた。テレビ局からの取材の依頼だった。

突然のことでキョウカは驚いたが、依頼目的が香奈だとわかって、なるほどと一人で納得していた。

キョウカは週刊誌の反響でテレビまで飛びついて来たと分かった、もう呆れるしかなかったが、テレビ局の依頼となると、自らタレント活動をしているキョウカは立場上断れず、さすがに変なことはされないだろうと依頼を受けることにした。

第161話 テレビ局の取材

テレビ局の取材の日、香奈はキョウカに何も聞かされずにサンフラワーに出勤してきた。キョウカは香奈にそんな話をするなどどんな行動に出るかわからないので、普段通りで居てもらおうと取材のことは黙っていた。

何も知らずに居る香奈を見ながらキョウカは取材班が早く来るのを待っていた。

キョウカは店の風景をテレビで放映されるのかと考えていたら、放映されてはいけない光景が目飛び込んで来た。カードのやり取りである。カードなら金銭のやり取りとは思われないけど、賭け事をやっていると思われるなら問題である。すぐに放映は拒否しようと思った。

キョウカはすぐに店を出て、玄関の外で取材班を待った。しばらくしてカメラマンを携えて取材班が来た。

「すみません、賭け事とか放映できないでしょ。だから店の中の撮影は遠慮して欲しいのだけど・・・」

そうキョウカは取材班に頼み、取材班もそんな理由ならと納得し、取材は店の外ですることになった。

「ちょっと香奈、こっちに来て！」

キョウカが香奈を店の外に呼ぶ。香奈はキョウカの後を付いて店の外に出る。そこにはテレビカメラを持ったカメラマンとマイクを持

ったレポーターが居た。

「あなたが小林香奈さんですか？」

レポーターがマイクを持って香奈にそう質問をした。香奈は突然のことに戸惑い何も答えられない。

「香奈、テレビ局の取材だからちゃんと答えなさい」

そうキョウカが香奈に注意する。

(しゅ、取材……)

香奈は取材と分かるとあわてて店の中に入って逃げて行った。

第162話 テレビの取材は中止に

キョウカは突然の出来事に戸惑いながらも、これ幸いと思い

「すみません、あの子対人恐怖症だから、テレビカメラとかで緊張しちゃって、会話すら出来ないから、今日はこれで終わりにしてもらえませんか？」

とテレビ局側のスタッフ達に頼んだ。テレビ局側はきちんと取材をしないと番組にならないと思ったが、肝心の香奈が店の中に入ってしまったら追いかけることが出来ない（店内を撮影出来ないから）ので、取材を中断し、上層部に相談してどうするかを決めることにした。

キョウカもここに来ている人達は下っ端達だからすぐに結論が出ないと分かっている、結論が出るのを待った。

しばらくして、スタッフ達は片付けを始めたので、キョウカは取材が中止になったと思い、店内に戻った。

店内には相変わらず香奈がいつもの定位置の立っていた。キョウカは香奈を見て

「香奈、何で逃げたりしたの？」

と香奈に逃げた理由を聞いた。その質問に香奈は

「お、おじさまに変な風に伝えられないように、取材は、う、受けないことにしてます」

とおどおどしながら答えた。それを聞いてキョウカは呆れて

「香奈、テレビ局の取材はいいのよ。改変しようが無いし、おじさまもあなたが喋ってるのが分かるから。それにあなたもおじさまに伝えたいことが色々あるでしょ！」

と言った。そうキョウカが言った途端、今度は香奈が店を飛び出した。

あわててキョウカが香奈を追い駆ける。キョウカはサンフラワーを出るとサンフラワーの外で香奈が周りをきょろきょろして何かを探しているのを見た。

第163話 キョウカのごまかし

キョウカは香奈がテレビ局の取材班を探しているのに気付いて香奈に

「香奈、もうテレビ局の人達は居ないから店の中に戻りなさい！例えテレビに出てもおじさまは忙しいから、香奈の出ている番組なんか見ないわよ」

と言って香奈に店に戻るように説得した。香奈はおじさまが見ないのならばとあきらめて店に戻った。

店内でおじさまに何も伝えられ無くて落ち込む香奈にキョウカは

「香奈、ここで頑張っていればおじさまに伝わるから、別にテレビに出る必要なんか無いわよ。そして早く一人前のプロになりなさい！おじさまがあなたがプロになれるように尽力を尽くしてくれたのだから、

感謝の意味を込めて頑張らなきゃ駄目よ！」

と言って励ました。その励ましを聞いて香奈は眼を輝かせ

「お、おじさまは私がプロになれるようにどこで？おじさまはどこに居るのですか？」

と真剣にキョウカに聞いてきた。キョウカは事務局長の斉藤がおじさまとの前提で香奈に語っていて、香奈におじさまの正体が斉藤だと言えずに、戸惑いながら

「ほ、ほら、おじさまも香奈がプロになれるようにお祈りしてたと

思うの。だって手助けをしたら不正行為になって香奈が失格になっちゃうじゃない」

と言っでごまかした。香奈は手助けが不正行為になると分かり、おじさまは香奈に何もしていないと逆におじさまをかばおうとした。

香奈の扱いが面倒だと感じたキョウカは、香奈にもうこれ以上話し掛けないことにした。

第164話 モチベーション

また女性週刊誌「CANDAY」の発売日が来た。

キョウカはまた香奈のことでどんなことが書かれているか気になって、書店で週刊誌を見つけ中を開いて記事を探した。

記事を見つけ、キョウカはまた啞然とした。

正義は勝つ

香奈さんは意地悪な先輩達に勝って、七夕杯の決勝の切符を物にしました。

と書かれていた。キョウカとの一戦は恩返し（勝負の世界では弟子が師匠に勝つことを恩返しという）の一戦として紹介されていた。

キョウカは取材拒否で、記事のネタを提供しなかったが、向こうの方が上手で、うまく文章を書きまとめ、先輩プロ達を悪人に仕立てて、香奈に同情が集まるように記述していた。

キョウカは女子プロ達を悪く書いた記事に憤慨したが、抗議しても無駄だと分かっているから、この件についてはもう黙殺するしかないとおきらめた。

次の日、サンフラワーでは七夕杯の男子部門の決勝メンバーのことが話題になっていた。

メンバーは若手二人で、特に話題にするようなことが無かったが、

なおが香奈に

「香奈ちゃん、おじさまは決勝に出れなかったから、おじさまと対局は出来ないみたい」

と香奈に教えていた。

「ちょっとなお！そんな言い方したら香奈がやる気をなくしちゃうでしょ」

キョウ力がなおを叱る。

「ごめん」

なおがすぐにキョウ力に謝る。

「香奈、おじさまは香奈が決勝で麻雀を打つのを楽しみに待っているから、頑張つて来なさいよ」

とキョウ力がすぐに香奈を励まして、香奈の七夕杯へのモチベーションを上げた。

香奈は黙っていたが、目は輝いていて心はすでに七夕杯という感じだった。

第165話 応援されるリカ

肝心の七夕杯だが、キョウカがこの間テレビ局の取材がお流れになったと安心していたが、あの程度でも話題の少ないテレビ局には十分で、すでにワイドショーで香奈を紹介していた。

そして香奈の演技で無い行動が視聴者の好感を呼び、テレビ局側は再び香奈を扱おうと考えていた。

テレビ局側は香奈が七夕杯に出ることを知って、七夕杯の中継を目論み、団体に交渉して了解を取り付けていた。団体側はそのことをキョウカに教えなかったから、キョウカは七夕杯にテレビ中継が入ることを知らずに、七夕杯が始まるのを待っていた。

七夕杯前日、リカも香奈も前日だからと言って休みが当たるわけもなく、逆に明日休みになるからシフトに入らざるを得なかった。

「よう、元気か」

リカに男が声を掛ける。

「し、師匠！」

男を見てリカが嬉しそうにそう叫ぶ。リカに声を掛けたのは師匠の南だった。

「金を返してもらいに来たぞ！」

南はそうリカに言う。

「え？」

リカはそんな話聞いていないとただ戸惑う。

「出世払いだから、明日の七夕杯で優勝したら賞金が出るだろ。その賞金で払えばいい」

と南は真面目に語る。リカはまだ優勝していないのにとはいえず、えばいいかわからなかった。

「この人なりのリカちゃんへの応援よ」

南に付き添って来店した美央がそうリカに教える。

「師匠、ありがとうございます」

南の真意が分かってリカは嬉しそうに礼を言った。

第166話 回収

リカが南のエールに喜んでいる時に、キョウカに店の奥まで引っぱられた。

「あんだ、あの男にいくら借りてるのよ？」

そうキョウカはリカに問い質す。

「十、十万ほど」

リカが小声で答える。キョウカが仕方ないわねという顔をして、財布から十万を取り出し、リカに渡した。

「給料から引いとくから」

キョウカはリカに有無を言わずに金を受け取らせた。リカはしぶしぶ南に借金を払いに行った。

南は突然リカに金を渡され、驚きながら黙って受け取った。それを見てキョウカは

「お二人ともせっかく来たのだから打って行ってはいかが？」

と南と美央に言った。

「それなら大阪までの交通費を稼ぐか？」

「はい」

南と美央はキヨウカの誘いを受けて喜んで卓に入ることにした。

（はあ、交通費を稼ぐって、ここはそんなに甘くないわよ）

キヨウカは南の発言に呆れた。

（あの二人に打たせたら駄目！）

リカは南と美央に打たせたら、強過ぎて他のお客さんに迷惑が掛か
ると思った。

南と美央と他の客達で新たに卓を立てて半荘が始まった。

「あの二人に打たせたら駄目ですよ」

リカがそうキヨウカに言う。

「何言ってるのよ！払ったお金を少しでも回収しなきゃいけないじ
ゃない」

キヨウカはそう言っリカに反論する。

「あの二人強いからお客さんが痛い目に遭いますよ」

とリカはお客さん達の方が心配だと言う。そう言われてキヨウカは
何も言わずに二人の麻雀を後ろから見に行った。

第167話 本物のプロ

キヨウカは南の打ち方を見ようと南の後ろに回ると、丁度南が七萬を捨てようとしていた。

（何でそれを切るのよ？他に使えないのが色々あるでしょ。牌効率も分からなくて打ってるの？）

キヨウカは南の打ち方に呆れて、もう見る価値が無いとその場を離れた。

牌効率から行けば七萬の方が使えたが、南は七萬が使えないことを見抜き、振り込み牌にならないように先に切っていたのだった。おかげで他家はその七萬であがるチャンスを逃し、場は別の方に動いた。

「もう駄目だこの二人には勝てないよ」

そう言つて常連が席を立った。キヨウカはカウンターで卓ごとの成績を聞きながら、そうなることをうつすら感じていたから、今更驚こうとはしなかった。

ただ南達の強さには、新たに驚きを感じざるを得なかった。

南と美央が通しを行っている気配は感じなかった。それはカウンターから二人の動向を見守っていたキヨウカが一番分かっていた。

二人の強さはキヨウカには分からずじまいだった。逆に改めてリ力が強いのもこの二人の指導が有ったからだと理解した。

卓が割れ、南と美央は卓を離れる。南は何気に香奈が本走しているのを見つけて後ろから見た。

（こ、これは……………）

南は我を忘れて香奈の麻雀を一生懸命眺めた。その光景を見てキヨウ力は

（確かに本物ね……………）

キヨウ力は南が香奈の実力を認めたように、南の実力をリ力が本物のプロだと説明していたのを思い出し、一人納得していた。

第168話 香奈の打ち方

南が香奈に驚き注目したのは、香奈の打ち方が何気に理に叶っていたからだった。

香奈は手牌の複雑な変化を出来るだけ簡単に、つまり選択の幅を狭めて簡単にしていた。

一般的には牌効率と言って、多様な変化を求め、どんな牌が来ても手が進むように手牌組みをするが、香奈は手役を決めて不用な物を捨てる打ち方をしていた。

牌効率など考えてなく、南でさえ捨てるのが惜しいと手に留めそうな牌まですなりと切るから、南が驚き香奈を見るようになった。

南が香奈を注視しているのをリカは香奈が変な打ち方をしていて面白いから、南が面白おかしく見ているのだと勝手に思っていた。

「この子も七夕杯の決勝に出ます」

そうキョウカが南に香奈のことを教えた。

「なるほど、今年の七夕杯は面白いことになりそうだな。美央、帰るぞ」

「はい」

美央は返事をして南と美央はサンフラワーを出た。

「ありがとうございました」

キョウカが笑顔で二人に挨拶する。

キョウカが見送りから戻るとリカが申し訳なさそうな顔をして立っていた。

「確かに本物のプロね。道理でリカが強い訳だ」

とキョウカはリカに向けて二人に感心した。

「ありがとうございます」

リカは二人を認めてもらえて、嬉しくてキョウカに礼を言った。

ついに七夕杯の日になった。キョウカは店を休んで先に会場入りした。

会場に入るとテレビカメラが何台か設置準備だった。

キョウカはDVD撮影なんて聞いてないから、何故テレビカメラが有るのか理解できなかった。

第169話 傷心の香奈

キヨウカはテレビカメラのことを近くに居た会場係に聞いた。

「あ、あれですか、何かテレビ局の取材が入っているみたいですよ」

淡々とキヨウカの質問に答える会場係。

「え、取材はボツになったんじゃないの？」

香奈への取材は終わったとっていて驚くキヨウカ。

「????」

会場係は何のことかわからず、何も言えなかった。

キヨウカは今更どうしようも無いし、テレビ局なら捏造とかが無いから大丈夫だろうと、このことには言及しないことにした。

香奈は香奈で落ち着いて居られなかった。おじさまが来ているかもしれないと会場内を探し回っていた。

しかしおじさまらしき人物が居なくて香奈は落ち込んだ。

「あれ、香奈は？」

キヨウカはなおとりかに香奈と一緒に居ないことを問い質した。

「香奈ちゃんならあっちの方に行ってたわよ」

なおが観客達の方を指してキヨウカに教えた。

「何やってんのよ！あの子がおじさまと勘違いして、他人に迷惑を掛けるようなことが有ったらどうするのよ？」

キヨウカが二人をそう怒鳴りつけた。あわてて二人は香奈を探しに行った。キヨウカもあわてて香奈を探す。

香奈はすぐに見つかった。落ち込んだまま三人の元に戻ろうとしていたからだ。

「ちょっと香奈！勝手にどこでも行かないで頂戴」

キヨウカは香奈を見てそう叱った。しかし香奈は

「おじさまは………」

とつぶやいてキヨウカの前を通り過ぎて行った。

第170話 取材が続く理由

「あ、キヨウカさん、香奈ちゃんは？」

なおがキヨウカの元に戻りそう質問する。

「あの通りよ」

キヨウカが香奈を指す。そこには落ち込んだままの香奈が居た。

リカも二人の元に戻り、落ち込んだままの香奈を見て大丈夫なのかと心配した。

キヨウカは事務局の斉藤に何とかしてもらおうと、斉藤を探しに行った。しかし、斉藤は来訪者の相手で手がいっぱい、キヨウカは斉藤に頼むのをあきらめた。

七夕杯を観戦しようと一般人が会場に入り始めた。週刊誌だけではなくテレビの影響も有って、観戦者は五十人を超える勢이었다。

キヨウカが取材がボツになったと喜んだテレビ局は折からの低予算で、ボツに出来なくてうまくワイドショーのネタとして、香奈が取材を拒否する姿の画像を使ってニュースにしていた。

その時の香奈の行動が、視聴者に本当に人見知りな激しい子と認識され、視聴者に評判が良かった。

評判が良かった為、香奈は継続で追い駆けられることになり、今回の七夕杯の取材になった。

落ち込んでいる香奈とは対照的に気合の入っているリカは、観戦者の人込みを見て

「師匠――！！」

と叫んだ。そして観戦者達のそばに向かって走って行った。リカは師匠である南と美央に

「来てくれてありがとうございます。ここじゃなんですから、こっちまで来てください」

と言ってキョウウ力達の元に二人を案内した。

会場係は観戦者を対局者達に近付けないよう厳命されていたが、リカの知り合いならばとこの場はOKした。

第171話 香奈の復活

「師匠、応援に来てくれたのですかあ？」

嬉しそうにリカが南に質問する。

「当たり前だろ！わざわざ交通費使って借金取りに来るわけ無いだろ」

リカと南は楽しく談笑する。キョウ力はそんな二人のやり取りを無視して香奈の心配をした。

しかし、香奈を元気にさせる方法が見つからなくて困った。

南はふと香奈の方を見た。香奈は落ち込んでいて元気が無かった。南は香奈の傍により

「ここに来れない人達も応援してくれてるのだから、一生懸命頑張れよ」

と香奈を励ました。そう言っ南は香奈の元を立ち去る。香奈は少しずつ元気になって来た。

（おじさまは来ないのじゃ無くて来れないんだ！私は忙しいおじさまに来て欲しいなんてずうずうしいこと考えていました。おじさまはここに来れ無くて私のことを応援してくれています）

香奈はおじさまが応援してくれてるのだから勝手に想像して少しずつやる気を持ち始めた。

香奈が元気になっていくのを見て、キヨウカは南の香奈への声援に激しく喜んだ。キヨウカも同じことを言おうと思えば言えたのだが、おじさまらしき斉藤が会場にすでに来ている以上、おじさまが来ていないと思うことができなかった。

キヨウカが南の方を向きながら心の中で“ありがとう”と言った。そんなキヨウカを見てなおが

「キヨウカさん聞いた？リカちゃんがゲストを断っている話」

とキヨウカに話を振った。

「

第172話 リカの意識レベル

キヨウカはそれくらい知っているとしてみなおに

「知ってるけどそれがどうしたの？」

と逆に聞いた。

「じゃあ、リカちゃんがゲスト料を受け取らないで客打ちしてることも知ってますか？」

と改めてキヨウカに聞く。

「え、それどういうこと？」

キヨウカはリカがゲスト料を受け取らないということに驚いた。

「ゲストとして入らないけど、お客さんとして麻雀を打ちますってお店側に伝えて麻雀してるのよ」

なおがキヨウカに分かりやすく説明する。

「それじゃ負けたら自腹じゃ無い！」

キヨウカはリカの不可解な行動に激しく驚く。

「そうなの。店の人がわざわざゲスト料を渡そうとしたけど、リカちゃん受けとらなかつたみたい」

それを聞いてキョウカは啞然とする。

「何かお師匠さんに金が欲しいなら客打ちしてくればいいだろと言われて、リカちゃんゲストは断る代わりにお客さんとして来店してみたい」

となおが説明するとキョウカはすぐにリカの方を向き

（リカ、絶対勝ちなさいよ！私達女子プロは意識レベルが低いとか甘やかされてるから、勝負の世界ではやっていけないと男達に馬鹿にされ続けて来たけど、そんなことは無いとあなたなら証明できるわ）

と強く思った。

リカは相変わらず師匠である南と談笑していた。リカはキョウカが思っているレベルなどもう眼中になく

、ただフリーで食っていけるレベルを目指していた。

一方対戦相手の男子プロ達は、香奈とリカを見ながら嘲笑していた。

第173話 対局開始

「今回は新人だけとか、あいつらのやってることはお遊びか？」

「森さん、女子なんて所詮おままごとレベルですよ！」

七夕杯の男子プロ予選を勝ち上がってきた森と佐々木が、女子予選を勝ち上がってきたリカと香奈を見て、女子プロ達のレベルが低いと馬鹿にしていた。

「佐々木！テレビの前であいつらに赤っ恥をかかせるぞ！」

「はい、森さん」

森と佐々木は、女子プロ向けにテレビの取材が入ったと思い、それに嫉妬してリカと香奈を打ち負かそうと考えていた。

「それでは対局者の方々は卓に着いて下さい」

七夕杯の責任者がそう対局者達に呼びかける。決められたとおりリカと香奈は対面同士に座った。七夕杯では対局者同士協力しないように上家下家と並ばないように対面に座らせることになっていた。

よって場決めは無く、親決めでこの中で年長者の森が際を振った。

五が出て森が親番になった。東南西北の順で森、香奈、佐々木、リカになった。

「それでは対局を始めてください」

「よろしくお願いします！」

責任者の号令で四人とも挨拶をして対局が始まった。

まずは親番を引いた森が好調で先に聴牌した。

「リーチ」

森は自信満々にリーチと言って、点箱から千点棒を出して卓の上に置いた。

香奈は森の待ちがわからないし、安全牌も無かったから、ノータイムでいらない七筒を切った。

それを見て森と佐々木は驚く。佐々木は森に向かう気も無く、ベタ降りをした。

第174話 対局中

リカは森のリーチにはノータイムで安全牌を切った。東一局から親と喧嘩するような愚を犯さず、態勢の維持を心掛けた。

ツモれずにイラつく森を尻目に香奈は普通に手を進める。香奈が安全牌を増やすから、佐々木も手を進めてしまい、香奈の切った五萬を見て

「チー」

と言って鳴いた。

佐々木が安全牌だと思って二萬を河に出す。

「ロン！」

森の声だった。森はカン二萬の待ちで、裏ドラを開いて

「12000！」

と言った。リーチ三色裏一でマンガンのあがりだった。

佐々木は森ならばとスムーズに点棒を払い、この局で使われた牌はすべて中央に吸い込まれていった。

リカは森のあがりを見て、ほくそ笑んだ。純チャンに程遠い感じで、待ちも窮屈なカンチャン待ちだったから、たまたま運よくあがれただけで、これから森は失速していくと思っていた。

続く一本場、森はリカの予想通り、前よりも手牌が落ちていた。それでも他家よりも幾分かましで、他家達は鳴ける牌を期待して待っていた。

最初に鳴けたのは香奈だった。香奈の一鳴きが森の動きを止めることになった。

「ロ、ロン3900は4200」

香奈が森からあがったのだった。森はしぶしぶ香奈に点棒を払う。香奈はそれを点箱に仕舞い、牌を中央に寄せて落とした。

東二局、リカは香奈の親番を落とそうとして、最初に仕掛けを入れた。七夕杯はチーム制ではないので、リカは香奈からもあがることを考えていた。

第175話 助走

香奈は勝ち負けにこだわらずただ淡々と手を進める。リカは手が軽いことをいいことに、先に仕掛けて千点を香奈から出あがった。

香奈は黙って千点棒をリカに払い、リカはそれを受け取り、全員牌を落とした。

（リカ、香奈の親をわざわざ落とさなくてもいいでしょ！）

キョウカはリカの急いだあがりを不満に思った。しかしリカはこのあがり喜んでいた。リカが始めて美央と対戦したときも美央はリカの親を落とすのに千点の手であがっていた。

このあがり助走をつける為のあがり、美央はそれを契機にリカに対して優勢に半荘を進め、リカを追い詰めた。

この時リカはそんな目的が有ったとは知らず、やることがせこいと鼻で笑っていた。

目的を知った時は、南を師匠を仰いだ後だった。南がリカに欲張らないで千点の手は千点であるように教え、あがることによって次回以降の手牌の状態を良くすることが大事だと教えた。

リカは実際美央が南が言っていることを忠実に実践していることを、実際に対戦した時の記憶で思い出し、美央にも尊敬の眼差しを向けるようになっていた。

東三局、すぐにはリカの手は良くなかったが、流れはちょっと

したことで変わる。森のあせった仕掛けがリカの手牌とずれた自摸牌のマッチングをもたらし、本来あがれなかったリカが少ないけど点棒を三人から集めることが出来た。

東四局、リカの親である。まだ調子が戻らないがリカは冷静にチャンスを期待して待機していた。

第176話 気持ちを込めて

場は静かに進行し、リカと香奈は淡々と手を進め、森と佐々木は高い手をあがろうとして、打牌が力んでいた。リカは佐々木の自摸切った七ピンをチャンスと見て

「チー」

と言つて678の形で鳴いた。リカはリーチを掛けて高い手にしようとは思わず、牌の流れに合わせて、自然な進行をすることにした。そしてドラを引き入れて、他家が静かな内に

「ツモ二千オール」

とツモあがりをした。次も親番だからと無理な手作りをしなかったが、面前で仕上がったからリーチを掛け、四千は四千百オールをあがった。

親番は香奈にあがられて終了したが、トップは逆転してあとはそのリードを守るだけだった。

オーラスも終わり、第一回戦が終了した。ポイントはリカ+24・5、香奈+3・1、森-9・1、佐々木-19・5と決まった。

香奈は対局が終わるとその場を急いで離れた。キョウ力は香奈の突然の行動に驚いたが、向かっている先がトイレだったから、トイレかと香奈の行動を気にすることをやめた。

一回戦が終了したが、まだ対局中に当たる為、誰も対局者達に触れ

ることは出来なかったし、対局者同士会話することも出来なかった。

香奈はトイレの中で緊張し震えていた。おじさまが観に来ていないとはいえ、あれだけの公衆の面前では香奈は緊張してしまう。香奈はおじさまに香奈は頑張っていると伝えたくて気持ちを込めて

「おじさま、香奈は、太陽の子です!」

と小声ながら力を込めて言った。

そして落ち着きながら二回戦目に向かった。

第177話 香奈の反撃

香奈が戻ってきて二回戦目が始まることになった。二回戦目が最終戦でここで七夕杯の勝者が決まることになっていた。

再びリカと森が場所決めをする。リカに不運だったのは座る場所が変わり、また一から流れを作らなければならなかった。

席が決まり全員が着席する。今度はリカが起家で対局が始まることになった。

「よろしくお願いします」

四人の挨拶があり、リカはサイを振った。リカは配牌を取り、牌勢が落ちていることに不安を感じた。いつもなら別に最後はあがるのは自分だからと気にしなかったが、今回は負けるのではと不安になった。

今回そう感じたのは香奈の方に勢いがあつたからだ。香奈は配牌を見るなり積極的に動こうと考えていた。

すでに勢いがなく消化試合と化していた男二人から香奈はキー牌を鳴き、リカは不安が現実の物だと確信した。リカは香奈の勢いを止めることが出来ず

「ツ、ツモ、千二千」

東一局は香奈のツモあがりで終わった。安いとはいえ高目をツモあがりしたのを見て、リカは香奈に流れが移ったことを感じた。

「香奈ちゃんがあがったから、香奈ちゃんが逆転優勝するかも知れないわね」

なおは香奈があがったことを喜び、傍にいたキョウカにそう言った。

「ええっ」

キョウカはリカが親番を失ったことが痛いと感じてなおの考えに同調しながらも、リカの頑張りを思うとどうしてリカに優勝して欲しかった。

ギャラリー達も香奈のあがりを見て、香奈が逆転優勝するかもしれないと感じていた。

第178話 冷静なリカ

しかし、リカもこの程度のことは何度も経験しているから、流れを取り戻すタイミングを落ち着き、見計っていた。

香奈は逆転優勝など考えてなく、ただひたすら麻雀をすることを考えていた。それが針の穴を通すような精密な麻雀になってすでに勢いを失った男子プロ達から点棒を奪っていった。

「ロ、ロン、一万二千」

香奈の親満のあがりが森に炸裂した。それを見て観客たちがざわめく。このまま順位点も加味すれば香奈の優勝である。テレビ局のプロデューサーが香奈が優勝するなら話題になると、あわててテレビカメラを回せと指示を出した。

「キヨウカさん、このままだと香奈ちゃんが優勝ね」

なおはそうキヨウカに話し掛ける。

「ええ」

キヨウカはそれを聞き流すようにリカを応援し続けた。

香奈の逆転でもリカは落ち着いていた。連荘で香奈の親番は続くから、香奈に直撃できなくてもツモあがりすれば満貫でも一万二千の点差を縮めることが出来ると思っていた。

香奈が積み棒の百点棒を出して東場の親が続く。リカは配牌を受け

取り、満貫手をと手牌を進行させた。

そして鳴ける牌を鳴かずに我慢の連続でやっと満貫手をテンパイさせた。

（リーチしたら香奈は出さない）

リカは順目も遅いし、香奈から直撃できることを願いながら深く静かに身を潜めた。

香奈はただひたすら自分の手牌ばかり見ていたので、リカのテンパイに気付かず、何も気にせずにリカの当たり牌を河に捨てた。

「ロン、八千は八千三百」

リカの香奈からの直撃のあがりで再び順位は逆転した

第179話 リカのミス

香奈は元々トップを取ろうと思わず振り込みも問題ないと思っていたから、淡々と点棒を払った。リカはそれを受け取りほっと一息ついた。ダメであがるときは、ましてこんな大事な局面は息を殺して待つていなければならない。テンパイがばればあがれるものもあがれなくなる。リカはあがることが出来てやっと息が出来た。

誰もが香奈はもう優勝できないと思われたが、それでも香奈を応援する人達の気が変わるわけではなかった。テレビカメラのスタッフがプロデューサーがカメラを止めるとの指示をすと思いプロデューサーの方を見たが、プロデューサーはただひたすら卓上を見ていた。

次の局、香奈は何事も無かったように手を進める。リカはそんな香奈を不気味に思い少し気が迷い始めた。そして焦りが生じ、上家の出した一萬をチーした。

「やばい、リカがミスをしたぞ」

「え、何がですか？」

南がリカのミスに気付き美央に話しかけた。卓上は観客側からはわからなかったが、リカのチーという声を聞いて南はミスだと感じ、美央はチーだけではミスだとわからなかった。

これは鳴いたリカも後からミスと気付いた。鳴けばテンパイが早くなるがその代わり手は安くなり、打点が欲しい時に大して点棒が集められないという問題があった。実際あがれるにはあがれたがただ二千点を加算しただけだった。

リカのミスはその後の展開に跳ね返ってくる。リカは自然にフォー
ムを崩していった。

第180話 再度逆転

場は南場になり、リカの親になった。リカはさらに追加点を叩きたいが、配牌と自摸に勢いが無かった。

リカはここは点棒を守るように自重しながら足を貯めるところだが、先程の打点不足が気になって、今回も動いた。

「チー」

カンチャンを鳴いたのだからリカはミスではないと思っていたが、鳴かなければ手牌の変化があり、こちらの方が有利な状態だった。

リカは知らず知らずにあがりを逃し、この局は森と佐々木が振り合って終わった。

リカは点棒を失わなかったただけ良しとすべきだが、焦りが気を迷い続けていた。逆に香奈はミスをしなければいいと、点棒を集めることを二の次に考え、結果的に失点を防いでいた。

南二局は香奈が欲無く千点をあがり、南三局に。

ついに南三局香奈の親、ギャラリー達はここからの香奈の逆転に期待した。キョウ力はリカに優勝して欲しいが香奈も負けて欲しくない、どう応援すればいいかわからなかった。

香奈は優勝など考えてなくただ無欲に手を進め、一ハンの千五百点を佐々木からあがった。小さなあがりであるが少しずつ差を縮められるリカには心地良くない、リカはストレスが溜まる中、手順ミス

をして香奈の親番を止めるチャンス逃した。

そして香奈はそれを生かして

「ツ、ツモ、に、二千は二千百オール」

と再度逆転した。このあがりギャラリーは大いに沸く。なおは

「キョウカさん、香奈ちゃんが勝ちそう！」

とまるで自分のように喜ぶ。キョウカは香奈が勝つのはうれしいが、リカが負けるのもつらいから素直に喜べなかった。

第181話 最終局

南三局は香奈のあがりで香奈がトップになった。点差はリカと四千点程だが順位ポイントもあるから、次もあがれば優勝するかもしれないなかった

リカは香奈の連荘を止めれば優勝になると思い、安手でいいからあがろうとした。

両者とも配牌を受け取る。勢い的に香奈の方が有利だった。しかしリカにはテクニクが有り、勢いが無くても勝ちにいける力があつた。

素人のように手を進める香奈、その間隙を抜くかのようにリカが仕掛けた。

「チー」

何気ない鳴きだが、香奈の動きを止めるのに十分で、その後も鳴きで手を進め

「ロン、千は千六百」

と森からあがった。

香奈から直撃できなかったのが痛い、香奈の連荘を止めたのは大きいとリカはほっとしていた。

ついに南四局、ここで優勝者が決まることになる。現在の点差なら

リカの優勝で、リカは今回も安手で終わらせようと考えていた。

香奈は優勝とかトップとか考えずに、ただおじさまに喜んでもらえるようにミスをしないことだけ考えていた。もうすぐ半荘が終わる、香奈はゴールだけを気にしていた。

両者配牌を取り、思惑は違えども手を進めた。リカは前回同様に考えていたが、今度は動けなかった。前回はうまくあがったつもりだが、実は勢いをさらに殺していた。逆に香奈は勢いが増していて次々と暗刻が出来ていった。

「リーチ」

香奈からのリーチだった。リカは香奈のあがりを阻止したい。しかし鳴いて自摸をずらすことすら出来なかった。

第182話 香奈の優勝

リ力は安牌を切って、香奈のリーチに振り込むのを避ける。しかし、リ力は流れる的に香奈に勝てないと悟り

（師匠、今回は二位になります。だってもっと強くなりたいから）
と勝ちをあきらめて手を崩した。そして香奈があがるときが来た。

「ツ、ツモ……」

と言って香奈は裏ドラを見て点数を言おうとしたが、三人とも香奈が言う前に点棒を出した。親が一万六千、子が八千ずつ。

香奈のあがりは役満の四暗刻だった。この瞬間ギャラリーが大きく騒いだ。試合は終わり点数が新たに集計される。その集計ももう結果がわかっていてテレビのレポーターなどがあわてて騒ぎ出した。香奈の優勝だった。

プロデューサーはヒーローインタビューみたいな感じで香奈を取材することにして、配下に指示を出していた。その間表彰式の準備が行われ、キョウカとなおは香奈とリカの傍に行った。

「香奈ちゃんおめでとう！」

なおが喜びながら香奈に離し掛ける。キョウカはリカをいたわり、香奈に何も言わなかった。香奈は優勝したことはまったく喜んでいなかった。むしろ無事完走したことを喜び、ほっとしていた。

表彰式より先に香奈へのインタビューが先になり、レポーターが

「小林プロ、優勝おめでとうございます。あちらで感想をお語りください」

とカメラの前を指差した。香奈は訳がわからず、その場に向かうことにした。

香奈は言われた場所にたどり着き、意味もわからずその場に立つたままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3394e/>

太陽の子

2011年11月27日22時45分発行